
月夜の晩にキスをして

水城朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の晩にキスをして

【Nコード】

N3085N

【作者名】

水城朱音

【あらすじ】

ある日突然小国の王女ミレーヌは女嫌いでも有名な大国の王子マルクスの元へ嫁ぐことに。

しかし、マルクスに「お前を妃だなんて認めたわけじゃない」なんて言われてしまうのだが、何故かいろんな事に巻き込まれていく。ミレーヌに幸せはやってくるのか！？

第1話：結婚の申し出（前書き）

今はまだそういった表現は出てきませんが、いずれ一部残酷な表現を含む文章が出てくる予定ですのでR15指定とさせていただきます。

第1話：結婚の申し出

「ミレーヌ…そなたの結婚が決まった」

そう言つてミレーヌの目の前で肩を落とすのは彼女の父親。
現アナタリア王国の国王である。

その隣では心配そうに夫を黙って見つめる妻マリーの姿。

アナタリア王国は大陸の西に位置する小さな小さな国だ。

国を支える鉱山に囲まれ決して豊かとは言えないが、緑に囲まれとても良い国だ。

民からも信頼され、争い事など一切無くここ数十年ずーっと平和である。

「お父様…なぜそう肩を落とされているのです？」

「……どうせまた結婚は嫌だ！とか言うんだらう？」

「……まあ…否定はいたしません」

いつもは怒鳴り散らすほどミレーヌの結婚に対してうるさい父が、今度は気を落とす作戦に出てきたのだらうか？。

と言つのも、ミレーヌは次から次へと申し込まれる結婚話や婚約話を尽く断ってきたのだ。

十五歳で結婚し嫁ぐのが当たり前前の世の中になりつつあるというのにも関わらず…。

なぜ結婚や婚約をしなかったのか？

それは、彼女には密かに思い続けている相手が居るのだ。

最近ではそんな理由で両親を困らせていることに罪悪感すら感じるようになってきていた所に今回の縁談話。

そろそろ歳も歳だし妥協しないといけないのかもしれない…。

「で、お相手はどんな方です？」

「相手はあのマルクス王子で…」

「えっ！？マルクスってあのマルクス様ですか？！」

父親が最後まで口にする前にミレーヌは立ち上がり叫んでいた。

いきなり大声を出したのに驚いたのか、両親は顔を見合わせている。

「…？ほ、他にマルクスと言う王子は確か居なかったはずだが？」

「そうですけど…」

マルクス王子と言えば、こことは遠く離れた大陸一大きなマグナドル国王子だ。

ここ最近の噂では、とても冷徹で人を人とも思わないような方だと。

「彼は確か、女嫌いで有名で結婚とは無縁の方だったはずですが」

「ああ。私もそう聞いている。だが結婚の申し出があったのも事実だ」

そう言っただけでテーブルの上に置かれたのは上等な紙で書かれた親書。

ミレーヌはそれを手にとって眺める。そこには間違いなくミレーヌに対しての結婚の申し出の内容がつつらと綺麗な字で書かれていた。

「で？今まで相手すら聞いてこなかったというのに…もしや…受けてくれるのか！？」

「……そ、そうね…今までは断ってましたけど…私もそろそろ嫁がないといけませんものね？それに、もしこの申し出を断ってしまったら後々が大変ですわ。そうでしょう？お父様」

「そ、そうなんだが…本当にいいんだな？」

まさか結婚を承諾するとは思っていなかった彼は、ミレーヌの気が変わる前にと慌てて妻を連れ立って部屋を後にした。

ミレーヌはそんな父親を尻目にテーブルに置かれたティーカップを手にとると、中に注がれた紅茶を口に含み考えた。

正直これだけの大国の王子が、なぜちっぽけな国の王女である彼女との結婚を望むのか？

それこそきつと選り取り見取りなはずの王子が…。

疑問はあつたが、この際考えないことにした。

「マルクス様と結婚…」

ボソツと呟かれた彼女の一言に誰一人として気づくものはいなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

あれよあれよという間にマグナルドへ赴く日がやってきた。

王である父はなぜ急にミレーヌが気を変えたのか…本気で結婚する気なのか半信半疑だった。

ミレーヌはというと、あの日から怒涛の日々だった。

まずは一緒に着いて行く侍女選びから始まり、持っていく物の仕分けに、あちらの国の歴史や作法の勉強。

作法は小国とは言え王女としてこれまで20年間過ごしてきたのでほぼ問題は無い。

ただ時間が無かった。

向こうが指定してきたのはあの親書が届いてから5日後には国を發つこと。

なぜそんなにも急がせるのか…？

父は氣が変わる前には出發できそうだと周りの者に嬉々として触れ回っていたようだ…。

「では…お父様、お母様行つて参ります」

王城の門前で馬車に乗る前に父、母へ挨拶をする。周りには城に残る侍女や執事が整列して皆頭を下げている。

母の腕の中では歳の離れた弟がスヤスヤと寢息を立てていた。

彼はまだ産まれて間もない赤ん坊。そんな弟にミレー又は手を伸ばし頬をスツと撫でた。

「アレッサムお父様とお母様をよろしくね…」

「何かあったらすぐに連絡するんだぞ」

「ミレー又…幸せにね…」

「はい…！」と出来る限りの笑顔で返事をしたミレー又は馬車に足をかけると一気に体を中へやった。

窓越しに見る父と母は肩を震わせ必死に涙を堪えていた。

「開門ーーーー！！」

兵士がそう叫んだと同時に馬車が動き始めた。

窓から身を乗り出したミレー又はどんどん小さくなっていく父と母そして弟の姿が見えなくなるまで必死に手を振った。

第1話：結婚の申し出（後書き）

1話目、大幅修正しました。

第2話：接見前のお話？

馬車に揺られ、宿屋に泊まりながらもゆっくりと進み、ミレーヌ達は日も暮れ掛かる夕方によく王都に辿り着いた。実に出発してから約一月が経たっていた。

窓の外に広がる城下町は色々な店が並んでいて店主は道ゆく人に声掛けをしたりしてアナタリアなどでは決して見ることが出来ない活気に満ち溢れていた。

「ミレーヌ様、もうじきお城に着くようですよ。お疲れではないですか？」

外の様子に見入っていたミレーヌに声を掛けてきたのはアナタリアの城から一緒にやってきた侍女リリーだった。

彼女はミレーヌが15歳になった時から身の回りの世話をしてくれているが、年も近いせいか友達のように仲が良い。

「ええ、わたくしは大丈夫よ。リリーの方こそ長旅で疲れてはいない？」

「私も大丈夫です」

「そう。それは良かったわ」

その後しばらくリリーとたわいもない話をしているとゆっくりと馬車は停止した。

ドアが開けられ、外からスツと伸ばされた手を取り馬車を降りると、目の前には見たこともない大きさの城があった。

あまりの大きさに呆然と立ち尽くしていたためか、いつの間にか右

隣に人が立っていることに気が付かなかった。

「初めまして、ミレーヌ様」

そう声を掛けられ、初めて右隣にいた人物に意識を向けた。

そこに立っていたのは赤茶の髪の毛で同じ色の瞳を持つとても真面目そうな若い男性だった。

「私はダラスと申します。マルクス様の護衛兼秘書をしております。以後お見知りおきを」

「こちらこそ、よろしく願います」

「ここで立ち話もなんですから、まずはお部屋へご案内いたします」
「よう」

――――

ミレーヌ達は城に入ると、何度となく角を曲がり、長い回廊を抜けると、扉がいつぱい並ぶ廊下へと出た。

その一つの扉の前でダラスはようやく立ち止まった。

「こちらがミレーヌ様のお部屋になります。…どうぞお入りください」

そう言っただけで開け放たれた扉の先にあったのはとても広く華美な部屋だった。

自分が今まで暮らしていた城とは比べものにならないほど、調度品から家具まで素晴らしいものばかりで、ミレーヌは少し気後れした。

ダラスに促されるまま、部屋の隅に置かれた長椅子に腰掛けた。
それを見計らったかのように、部屋で待機していた侍女が、お茶を
用意してくれる。

「どうぞ……」

「ありがとう」

そう言うと侍女は一度礼を取ると部屋の外へと出て行った。
きちんと扉が閉まるのを待ってからダラスは話し始めた。

「ここにあるものはミレーヌ様のお好きなようにお使い下さい。右
側の扉は寝室へと繋がっております。……………それから、マルクス様
との接見の前にお聞きしたい事があるのですが……」

（聞きたいこと？）

何を聞きたいのかと首を傾げたミレーヌに彼は言葉を続けた。

「つい先日、王子妃の選考がこの城で行われたのはご存知ですか？」
「……………？選考……ですか？」

そんな話は聞いたことが無い。
父もそんなことは一言も言っていなかった。

「そうです。国内だけでなく、国外からも手当たり次第女性を集め
て行われたのですが……」

「し、知りませんわ。だったらなぜ、わたくしの所へ縁談の話が来
たのでしょうか？」

本当に意味がわからない。選考が行われていたのなら、すでに妃は決まっているのではないのか？

傍らに立つ、リリーに視線を向ければ、自分も訳がわからないという風な顔をしていた。

（とにかく落ち着かないと…）

ミレーヌがテーブルの上に用意されていた飲み物に手を伸ばしかけたその時だった。

「俺が説明しよう」

「……………！？」

突然の声に驚いて振り返ってみれば、扉の所に男性が立っていた。

第3話：王子の登場

「おや、マルクス様ではないですか：仕事はどうしたのです？」

ダラスの言葉を聞いて、目の前に立っている男性がマルクス王子だと認識すると、ミレーヌは慌てて、ドレスの裾を掴むと礼を取った。

「仕事は他の奴らに押し付けてきた。それよりダラス、俺から話をするからお前は下がっている」

この人が、あのマルクス王子…。

礼を取る前に一瞬見た彼の姿は噂に違わず、蜂蜜色の髪の毛と、緑がかった瞳で、とても美青年だった。

「仕事を押し付けてくるなんて、皆今頃泣いてますよ」

「大丈夫だろう：話が済んだらすぐに戻る。そう伝えとけ：。それと、そなたも出来れば外へ出ていてくれ姫と2人で話したい」

突然話しかけられたリリーは「はっ、はい！」と返事をするに縮こまりながら早足で部屋から出て行った。

ダラスもそれに続いて扉の前まで来ると振り返り、「では、ミレーヌ様：話の途中で申し訳ありませんが、失礼いたします」と、礼を取ったままのミレーヌに一礼すると部屋を出て行った。

「顔を上げなさい」

ミレーヌは下げていた頭を上げて、改めてマルクスを見た。

「お初にお目にかかります、マルクス様」

マルクスは聞いているのかいないのか、椅子の方へと移動するとドカッと足を組んで座った。

その、あまりの態度に呆然としてしていると話しかけられた。

「何をしてる？……取り合えず、座ったら？」

「は、はい…失礼します」

恐る恐る椅子に座ってみたものの、王子はじつとこちらを見つめてくるだけで、話をしようという気が無い様に感じられる。

一体どのくらい時間がたったのか…ほんの数秒だと思うのに、ピリピリしたムードの中ではものすごく長いような気がした。

「先ほどの話だが…」

「はい…」

「先日、選考が行われたのは事実だ。だが、ろくな女は居なかった」
「……………」

「自分の容姿を自慢する女、いかに自分が妃になれば得をするか唱える女、ひどい奴は寝起きを襲ってきやがった。まったく反吐が出る。大体もう少し身の程を知れと言うものだ」

ため息交じりの発言に同じ女として、ミレー又は少しムツとした。

「では、なぜ私の所に縁談が来たのでしょうか？そもそも選考の事実さえ知らないのに…」

「それは、親父が唯一選考に参加していないお前に縁談を持ちかけたからさ」

「え？」

「親父はあらゆる女を俺に進めたのに、全く見向きもしなかったものだから、焦ったんだろ。選考の日程を知らせた招待状を送った

はずが、当日現われなかったというお前を妃に言い出した。そんな理由で結婚相手を決められたら堪ったもんじゃない。後から調べた事だが、お前の所へ向かった使者が崖から転落し遭難していたらしい」

「……！」

「誰かが手を回したという事はないらしいがな」

転落した人には悪いが、誰かの手によって転落したのではないと聞きホッとした。

しかし次の瞬間には、ミレーヌの体はマルクスによって長椅子に押し付けられていた。

肩に触れる手がギリギリと音を立てそうなほど強く、ミレーヌを見つめる瞳は物凄く冷たくて、あまりの恐ろしさに逃げたくても逃げられなかった。

「勘違いするな…俺はまだお前を妃として認めたわけじゃない」

第4話：嫌いにはなれない

勘違いするな…俺はまだお前を妃として認めたわけじゃない

彼は話は終わったとばかりに、乱暴にミレーヌの肩から手を離すと一度も振り返ることなく部屋を出て行った。

マルクスが出て行った扉をじいつと見つめながら、ミレーヌは呼吸するのを我慢していた事に気が付き慌てて息を吐き出した。

そんな事言われたって、だったらどうしろと？

ここまで来て「はい。そうですか」と逃げ帰ることなど出来るわけが無い。

とりあえず、これからの自分の身の振り方を考えなくてはならないな…とミレーヌは思った。

別れ際の父と母の姿を思い出す。

これ以上悲しい顔はさせたくない。

それに……

（一度、陛下に面会してみようかしら）

コンコンと扉が控えめにノックされる音に気が付いたミレーヌは、ようやくと長椅子から立ち上がると、扉の前に移動した。

「どなた？」

「ミレーヌ様、リリーでございます」

「どうぞ…お入りなさい」

そう言つて扉を開けてあげると、リリーは部屋へ入つてきた。扉を閉めて振り返つた彼女は、ミレーヌの顔を見て眉をひそめた。

「ミレーヌ様：顔色が優れませんね。いかがなさいました？」

「なんでもないのよ：大丈夫」

何とか笑顔を作つてリリーを安心させようとしたけど、ちょっとしたこちない笑顔になつてしまった。

「本当ですか？もし気分が悪ければ言つてくださいね」

「わかつたわ」

城へ到着したのが日が暮れてからだった為、すぐに食事の時間となつた。

食事を持ってきたのは、セレナという自分よりも年上と思われる女性だった。

彼女は食事をテーブルに並べ終わると「失礼いたします」と一礼して去つて行つた。

もう遅い時間だからか、簡単なスープにパン、サラダのみ。

リリーは傍らに立ち、必要に応じてお茶などを入れてくれている。正直あまり食欲が無いから簡単な物で助かつた。

「リリー：わたくし今度、陛下に会つてみようかと思うの」

「陛下に：ですか？」

「ええ。もしかしたら、忙しくて会えないかもしれないけど…」

「：わかりました：：：では、そのように手配しておきますね」

「ありがとう。お願いね」

入浴を済ましたミレーヌは、寝室へ移動し、ベッドに腰掛けると自分自身を抱きしめ、ふうつとため息をついて、今日の出来事を思い

返していた。

いまだ、肩に残るマルクスの手の感触、今まで受けたことも無い冷たい眼差し。

マルクスという人間を恐ろしいと思った。

だけど、瞳の奥はとても寂しそうで、そして…悲しそうだった。

あんなに憎悪を表に出す人間に会ったのは初めてだ。

ただどあの一瞬、人を嫌悪しているようで、それでいて悲しそうな彼をどうしても嫌いにはなれなかった。

第5話：妃選考

マルクスは非常に機嫌が悪かった。

周りの臣下たちは皆マルクスの逆鱗に触れぬよう戦々恐々としていた。

というのも、先日いきなり親父に呼び出され、仕事の話かと思って顔を出してみれば、接見の間は女だらけ…その上、第一声が…

「マルクス、お前のためにわざわざ集まってもらった。この中から好きな女を選べ」

満面の笑みでそう言ったこの狸親父は「どうだ？どうだ？あの娘なんかいいんじゃないか？」と耳打ちしては王妃の前だというのにデレデレしっ放しで蹴り倒したくなった。

マルクスは女が嫌いだ。かと言ってあっちの気がある訳ではない。至って普通だし、昔は女も嫌いではなかった。だが、ある出来事が彼を変えたのだ。

「マルクス様はやっぱり素敵な方ですわね！わたくしの父は貿易商をしていました……」

「……………」

「わたくし、十数件の縁談をお断りしてきましたの」「何よ！わたくしだって数ある縁談を断ってきましたわ！」

「……………！」

「……………！！……………！！」

「……………」

マルクスの不機嫌な様子に全く気づきもせず、女たちはいい争いまで始るしまつ。

取り合えず考えさせてくれと、その場を何とか切り抜けた。

が…その日の真夜中だった。

「誰だ!!」

枕元に人の気配を感じ、マルクスは素早く身を起こすと、枕元のナイフを手に取りそれを相手に向けると「ひっ」という女の声がした。月明かりに目を凝らし相手を見てみれば、薄着をした女が立っていた。

自分に向けられたと言うのにナイフに物怖じする事もなく女はマルクスに近寄ってきた。

「マルクス様：驚いたではありませんか！そんな物騒なもの下げてくださいまし…わたくし夜のお勤めに参りましたのに」

女はそう言いながら自分の美貌を主張するかのように、マルクスの首に腕を回し身体を寄せてきた。

そんな女にマルクスの怒りは頂点に達した。

「出て行け…」

「え？」

「聞こえないのか？貴様：出て行けといっている！それとも首を飛ばされたいか！」

「なっ!!」

呆然としている女にマルクスは首に回る腕を掴むと乱暴にその体を

引きずっていくと、部屋の外へと追い出し力任せに扉を閉めた。

（冗談じゃない！なんなのだあの女！！）

外の見張りにダラスを今すぐ呼べと命令すると、すぐにダラスは駆けつけてきた。

「ダラス！どういうことだ！説明しろ！」

「説明しろと申されましても……」

「お前、しらを切るつもりか！？あの女の事に決まっているだろう！」

「あの女？……そう言えば陛下が夜にはある娘をマルクス様の元に……つてまさか？！」

「その、まさかだ！ふざけやがって！」

そう言うともマルクスはテーブルをダンツと叩いた。

（やっぱりあの糞親父の差し金か！！）

第6話：愚かな考え

数日後、のらりくらりとマルクスとの面会を避けていた父アレクは、又してもいきなりマルクスを呼びつけた。

王の執務室は東塔の奥にあり、マルクスがいる南塔と反対側に位置している。

ちなみに、王や王妃が住まう宮殿は城の隣に建てられ、マルクスは南塔で暮らしていた。

執務室へ入ると重厚な机がまず目に入る。壁一面を本棚で埋め尽くされているのはマルクスの執務室とそう変わらない。父親は書類に埋もれるように机の前に座っていた。

「おー待っていたぞ、マルクスよ！」

片手を上げながら立ち上がり、何故かウキウキした様子の親父を見るなりマルクスは嫌な予感がした。

「用件は何でしょうか？こう見えて忙しいんですよ……」「まーまー、そんな焦るでない。取り合えず、茶でも飲むか？」

「……いえ、結構です」

「なんだ連れない奴だなあ……まあ、いい。今日はお前の妃についての話があるのだ」

「父上……それなら先日お断りさせていただいたはずですが？」

ため息混じりにそう言うと、アレクは机を叩くと大声を張り上げた。

「なーにを言っておる！お前も、もう25だ……そんなんではいつになっても孫の顔一つ見れやしないではないか！」

「それは父上の都合でしょう…僕には関係ない…」
「関係無いだと！この親不孝者めが！！」

アレクはマルクスの言動に顔を赤くしながら叫んだ。

しかし、ハツと我に返ったのか咳払いを一つすると椅子に腰掛けた。

「マルクス…孫の顔はまあ百歩譲ったとして…とりあえずは結婚しろ」

「別に今すぐでなくてもかまわないでしょう？」

「そんな事言つて、このままでは結婚すらいつになるかわからん…この間の娘たちは尽くお前が断ってしまった手前、今更縁談には持ち込めまいし」

「じゃあ…」

マルクスは焦つてそう言つと、アレクはニヤツと口の端を上げた。
その一瞬を見逃さなかった彼は眉をしかめた。
また何か思いついたらしい…まったく憎たらしい親父だ…。

「いや？ちよつと待て…この間一人だけ姿を現さなかった娘が居たな！」

「は？」

「小国の王女で20歳の少し歳がいった娘だったが…そうだ！その娘に縁談を持ち込もうではないか！」

「ちょ…父上！？何を言い出すんですか？来なかったという事は、別に結婚したくなかったからじゃ…」

「そんな事調査してみなけりゃわからんだろう？」

（頭が狂ったのか？そこまでして俺を結婚させたいのか？）

マルクスは、ほとほと呆れた。

「もう…勝手にしてくださいよ…でも、妃にするなんてまだ認めて
ませんから。話は以上ですか？忙しいので失礼させてもらいます。
では」

そう言うが早くマルクスは、まだ何か言っている父親を無視して執
務室を出て行った。

（どうせ小国の姫君だ…大陸一のわが国からの縁談なんて、怖気付
いて断ってくるに違いない）

南塔へ続く回廊を急ぎ足で歩きながら、そう決め付けたマルクスは
この件はもう忘れようと、自分の執務室へ戻るとすぐさま仕事に没
頭した。

2日後……マルクスは自分の考えが愚かだったと思い知ることにな
る。

- - -
- - -
- - -

「はあ！？なんだって！！」

「ですから、マルクス様の縁談が滞りなく決まったと」

「……………」

昼下がり、用があるとどこかへ行っていたダラスが執務室へ戻ってくるなり報告した内容に、マルクスは驚きそして2日前の自分を呪った。

（俺は馬鹿か？なんであの時もつと強く親父の事を止めなかったんだ！そしたらこんな事には…）

「マルクス様：聞いてらっしゃいますか？」

「……ああ、聞いている…くそっ！」

思いつきり悪態をつくマルクスにどうしたものか？とダラスは頭を悩ませた。

付き合いが長く、女嫌いの原因も知ってるだけに何と言葉をかければ良いのか…？

下手な事を口にすれば、いくらダラスとも言えど首が飛びかねない。それほど怒り狂ったマルクスは手に負えないのだ。

「とりあえず、その姫君に一度お会いしてみてはどうです？結婚するしないは別として」

「そんな必要がどこにある？」

「まあ…そうでしょうけど、あ、そういえば、もう一つ陛下が申しました。よろしいですか？」

まだ何かあるのか？と眉をしかめながらマルクスは先を促した。

「調査の結果、従者は崖から転落して怪我を負ってましたが、命に関わるほどではないと……って調査とはいったいなんです？」

「ああ…その事か…父上が勝手に縁談を進めた娘がなぜ妃選考の日に現われなかったのか調べると言っていた」

「そっという事だったんですか…」

「ダラス…やる事が溜まってるんだ。早く仕事に戻れ」

もうこの話は終わりだと言わんばかりに書類に目を通しながらマルクスは言った。

第6話：愚かな考え（後書き）

ここまで書き終え、シリアスな話を目指してたんですが、マルクス視点にすると若干コメディのようになってしまったなど。

まあ、あの父親のキャラがあんな感じなので仕方が無いのでしょうか？

第7話：見透かされた心

縁談が滞りなく済んだとあって、アレクは非常に上機嫌。

一方、マルクスの機嫌は氷点下まで下降した。

アレクはマルクスが何も言わないのを良いことに、さっさと結婚させようと企み、結婚相手であるミレーヌに5日で実家を発つよう要求した。

その事実をダラスによって知らされたのは、何とミレーヌがすでに城を発った後だった。

ここ数日マルクスの機嫌は常に悪く、ダラス以外の臣下たちは恐怖で近づきもしない。

ダラスは機嫌が悪かろうがなんだろうが近づかなければ仕事が増えるだけ。

そんなダラスを、只でさえ仕事もあるというのに臣下及び大臣までもが彼を捕まえ、書類を渡してくれだの、意見を聞いて来いだのといったのも倍はやる事が増えてしまった。

「マルクス様：イライラしてるのはわかりますが、皆怖がってますよ。おかげで仕事の伝達だの色々と押し付けられて正直迷惑です」
「……………」

ダラスの言う事など眼中にないと言うように書類にサインをしているマルクスに彼は心の中でため息をつき、持っていた書類を差し出した。

「この書類は早急に対処して下さい…それと…ミレーヌ様の…」
「そこに置いてくれ。今日中にはどうにかする」

話を途中で遮られたが、これも最近ではよくある事。

とにかくミレーヌの話を持ち出そうとしても無駄なのだ。

こつやって話を遮るか、無視のどっちか。

明日にはミレーヌがこの城へとやってくると言つのに聞く耳を持つてくれない。

ダラスは自分の不甲斐なさに落胆した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次の日の夕方、ミレーヌは予定度通りマグナルドへ到着した。

元々ダラスに案内するように言っていたし、ここ最近ずっと彼女の存在を否定し続けてきたマルクスにとって、顔を合わせるといふ考えは毛頭無かった。

だが、なぜか気になって仕事もはかどらず手が止まってしまう。

この状況にもイライラしてきて、マルクスは立ち上がった。

「ちょっと、出て来る」

マルクスはスタスタと扉に向かい、後ろで「お待ちください！」という臣下達を無視して執務室を出た。

階段を一つ下がり廊下を進むとミレーヌが居る筈の扉の前で立ち止まった。

扉を開けるとダラスの背中とその脇の椅子に腰掛けるミレーヌと思われる女性が目に入った。

（あれが…どうせ今までの女と同じだろ…）

そう心の中で呟きながら、彼らの話に割って入り、彼とミレーヌの侍女を部屋から出て行くよう命令した。

自分がこの部屋へやってきたのは結婚する意志など無い事を目の前にいる姫に思い知らせるため。

「勘違いするな…俺はまだお前を妃として認めたわけじゃない」そう言って乱暴に扱って脅してやれば相手が泣き出すか、怒り出してこの縁談が無くなればいいと思った。

ただ実際、そう言った時の彼女の反応は驚いてはいるものの、泣き出すでもなく、怒り出すでもなく、俺から目を逸らす事も無く、ただその澄んだ瞳でじいつと見るだけ。

どうしてなのか自分の心を見透かされた気がして気分が悪くなった。これ以上一緒に居ては自分は何を言ってしまうか分からない。

言いたいことは言っただろうと、彼女のそばを離れるという事しか頭に無く、マルクスは急いで部屋を後にした。

執務室で待っていたダラスに「姫は？」と問いかけられたが、無視をした。

ダラスが小さなため息をついたが、それも気づかない振りをした。

（なんだ…あの女…）

考えれば考えるほど謎だ。

自分の心を覗かれるのはマルクスにとって恐怖なのだ。

昔、心を許した途端に裏切られたことがあった。

その時からマルクスはどんなに悲しくても、寂しくても顔に出さず自分を偽るようになった。

（まあ、どうせ放って置けばそのうち実家へ逃げ帰るだろう）

しばらくしてこの考えが甘かった事に気が付くことになるつとは…

第7話：見透かされた心（後書き）

昔あった出来事とは？？

ちよつと謎を残しつつ次のお話からはまたミレー又視点に戻りたい
と思います。

第8話：ミレーヌの思い

「くしゅっ」

ミレーヌは自分のくしゃみで目が覚めた。いつの間に眠ってしまったのだろうか？

瞼を開けたミレーヌは上体を起こすと、足元にある上掛けが目に入った。

どうやら上掛けも掛けずに寝しまったらしい。

今は春で昼間は暖かいが、朝晩はまだまだ冷え込む。

ベットから足を下ろしたミレーヌは、周りをキョロキョロと見回すと窓の外が明るいまいただった。

（もう、朝？）

窓へ近寄ると引かれていたカーテンをそつと開けた。

やはり辺りは明るくて朝だという事を主張していた。

テーブルと椅子が置かれたベランダの先には庭があり、色とりどりの花が咲いていた。

ミレーヌは小さい頃から花や植物が大好きで、アナタリアに居た頃は王女なのにも関わらず、庭師に混じって毎日のように庭弄りをしていた程だ。

だから、色とりどりの花たちを見てミレーヌは嬉しくなった。

そうして窓際にある椅子に腰掛けて庭を眺めていると、リリーが控えめなノックと共に寝室に入ってきた。

「おはようございます、ミレーヌ様」

「おはよう、リリー」

朝の挨拶を終えると、リリーはクローゼットと思われる扉を開いて、アナタリアから持ってきた服を出してきた。

「今日はこちらのお召し物でよろしいでしょうか？」

「ええ。かまわないわ」

リリーが出してきた服は水色の裾がふんわりしていてとても動きやすそうだけど、人前に出ても恥ずかしくないようなデザインのドレス。

ミレーヌは早速着ていた寝巻きを脱ぐと、リリーに手伝われながらドレスを着た。

次に鏡の前に移動すると、水を張った洗面器が置かれ、顔を洗うと丹念に化粧を施される。

腰まである長い金色の髪の毛は櫛で艶が出るまで何度も梳かされた後丁寧に編み上げられた。

他の姫や貴族の令嬢などはこの後アクセサリーなどを着けるのだから、ミレーヌはそういったものは好きじゃなかった。

というのも庭弄りするのに邪魔だというだけの理由なのだが…

身支度を整え応接室の方へと行くとすでに食事の用意がされていた。昨日の夜に比べて色々な料理が並べられていた。

「ミレーヌ様、おはようございます。お食事のご用意は整っています」

そう声を掛けてきたのは、セレナだった。

二十三歳で、この城に来てから七年が経つと言う。
他に二人の侍女が紹介された。

食事も終盤に差し掛かった所に廊下から足音がしたかと思うと、ミレーヌの部屋の前で音が止み、続けて扉がノックされた。
リリーが返事をして扉を開けるとそこにはダラスが立っていた。

「ミレーヌ様はいらっしゃるかな？」

「はい。只今お食事中ですが…」

そう言うとダラスは顔だけを覗かせて「食事中でしたか…すみませんが少し失礼してもよろしいですか？」と聞いてきた。
ミレーヌが彼の入室を許可すると、ダラスはミレーヌの前へやってきた。

「お食事中に申し訳ありません。昨日はマルクス様が失礼なことは
されませんでしたか？」

「え？」

「いえ…マルクス様は女性の方に対しての言動が少しばかり…いや、
かなり悪いので…」

「……それでわざわざ？」

「はい。マルクス様は口は悪いですが、国の事、民の事を一番に考
えてらっしゃる根は優しい方なので、どうか見捨てず……ってミレ
ーヌ様？」

普段真面目そうな彼が必死にマルクスを庇うのを見て、ミレーヌは
思わず「くすっ」と笑ってしまった。

突然笑い出したミレーヌに彼は困惑しているようだった。

ようやく笑いが収まったところでミレーヌはダラスに向き直った。

「昨日の話ではマルクス様はわたくしを妃には認めてくださらない
みたいけど…でも、だからと言って国に逃げ帰ることはしません
わ」

笑顔と共にそう言っでやるとダラスは安心したかのように胸を撫で
下ろしていた。

「そうですか…では…」

「その代わり、わたくしとの縁談を認めてもらえるまでその話は保
留にさせてもらいたいの…やっぱりお互い納得した上でそういう話
をしたいし……」

「……それで…いいんですか？」

「はい…。ところで、今日は庭へ出てみたいのですけれど、よろし
いかしら？」

「え？ああ…それは全然かまいませんが…」

突然、縁談保留の話から飛んで、庭に出たいだなんて言っで、迷惑
だったかしら？と一瞬思ったが、特にどちらもダメだとは言われず
にミレーヌはホッとした。

「……縁談の話は保留という事で、マルクス様にお伝えさせていた
だきます」

「お願いします」

「では、僕はこれで失礼します。ごゆっくり」

そう言うたダラスは部屋から出て行つた。

リリーは扉が閉まると神妙な面持ちで話しかけて来た。

「ミレーヌ様…縁談保留だなんて、本当によろしいんですか？」

質問の意味としてはきつと、ミレーヌの立場などを考えての事なのだろうか…

「だって…マルクス様がわたくしを妃と認めない以上、結婚したところで幸せになるどころか不幸になるだけだわ。そんな姿をお父様にもお母様にも見せたく無いし…それに政略結婚とは言え、やっぱり幸せになりたいじゃない…」

もう結婚に夢を見る歳ではないけれど、一生を共にするならお互いを認め合いたい。

好き嫌いだけでなく…。

ミレーヌはそれなりに覚悟してこの国へやってきたのだ。

「そうでしょうけど…」

「幸い、マルクス様は国へ帰れとは一言もおっしゃらなかったわ…。だからこれはお互いを知るチャンスなんだと思うの」

ニコツと笑ってそう言つと、リリーはちょっと難しい顔をしていたけど特に反論はしてこなかった。

第9話：庭師登場

昼食も食べ終わり、暇を持て余したミレー又は早速庭へ出てみる事にした。

「ねえ、許可も貰った事だし、ちょっと庭に出てみましょうよ」

「はい。では、お茶は外のテーブルに用意しましょう」

セレナはそう言うとお茶の用意をするためか一旦部屋を出て行った。リリーはミレー又と一緒に付いてきた。

外へ出てみると、暖かな日差しが照りつけてとても気持ちがいい。花壇へ近づき腰を屈めて色とりどりの花たちを眺めた。

「見ない顔じゃの？」

突然話しかけられ、声の方へ振り向くとそこには、六十代ぐらいのひげを生やした小柄なおじいさんが立っていた。

慌てて立ち上がり、突然現われたおじいさんに困惑していると…

「えと…」

「ああ、すまない。わしはこの城の庭師をしてるんじゃ」

「じゃあ、ここの花たちはおじいさんが？」

「そうじゃ。ここはわしの自慢の庭じゃ。どうだね？」

「はい！とっても素敵です。気に入りました」

笑顔で言ったミレー又に気を良くしたのか、庭師だというおじいさんはにこにこしてしながら屈むと花の周りにある雑草を抜き始めた。ミレー又もその隣に屈んだ。

黙々と作業をしているおじいさんに、そういえば自己紹介をしてい

なかったなとミレーヌは話しかけた。

「わたくし、アナタリアから来ましたミレーヌと申します」

「そうでしたか…」

うんうんと頷きながら手を休めることなく次々と雑草を抜いていく。そんな様子のおじいさんにミレーヌは勇気をだして、自分も手伝いたいと言うと、一瞬ポカーンとしていたが、「じゃあ、そっちを頼みますぞ」と言うともた作業に戻った。

きつと手伝いたいだなんて言われた事が無いんだろうなとミレーヌはくすつと笑った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

セレナはお茶の用意をして戻ってくると、そこにはびっくりする光景が広がっていた。

なんと、あの気難しいと有名な庭師に混じってなにやらやっているミレーヌを見てさらに驚いた。

ミレーヌと共にやってきたリリーと言う侍女に慌てて近寄ると、彼女は「いつもの事ですから」と平然としていた。

「いつもの事って…止めなくて良いの？」

「ミレーヌ様はアナタリアに居た時から、あんな感じで…言っても聞いてくださらないの」

「そっなの？か、変わった方なのね…」

「変わっている」というのはセレナの正直な感想だった。

大体が、部屋で大人しくしているか、庭へ出てもお茶を飲むぐらい。貴族の令嬢や、ましてやお姫様が庭で雑草を抜いたりなんてありえない。

しかも、気難しくて普段人を寄せ付ける事のない庭師が、これまた見たことも無い笑顔でおしゃべりしているのを見てミレーヌと言う人柄に興味を持った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「お嬢さん、今日はこれぐらいにしようかね」

雑草がいくつか持ってきたバケツいっぱいになっているのを見て、ミレーヌは手を止めた。

気が付くと、真上にあつた太陽がいくらか移動していた。

「夢中で気が付かなかったわ…結構時間がたっていたのね」

「いやー助かったよお嬢さん。二日かかる所を今日一日で終わらせられた」

「わたくし、お花を見るのも育てるのも大好きなんです。だからとつても楽しかったです」

「そうかい…じゃあ今度温室に案内しよう。約束じゃ」

温室と言う言葉を聞いて、ミレーヌは顔をほころばせた。この庭同様、きつとすばらしい温室に違いない。

「ええ。楽しみにしています」

「お嬢さん。じゃ、また」

そう言って片手を上げるとおじいさんは去っていった。

「ミレー又様…、部屋へ戻りましょう。着替えないと…」

リリーに言われて着ているものに視線を向けると、ドレスの至る所に土がこべり付いていた。

しかも、庭のテーブルの上にあるティーセットが目に入り、ただ花壇を眺めるだけのつもりだったのに、つつい庭師と一緒に雑草を抜いてしまっていた自分を思い出し、恥ずかしくなった。

「そうね。せつかくお茶の用意してくれたっていうのにわたくしつたら…セレナごめんなさいね。着替えたら飲むわ」

急に謝られたセレナはぶんぶんと手を振り、「い、いいんですよ。じゃあ新しいお湯貰ってきます」と言っ部屋を出て行った。

残されたミレー又とリリーは、汚れたドレスを着替えるため寝室へ移動した。

着替えも終わり、応接室へ顔を出すと、セレナがお湯が入ったポットを持って戻ってきていた。

お茶を飲んで一息付いた所で扉がノックされた。

「誰でしょうか？」

そう言っセレナは扉を開けて訪問者を中に入れた。

「失礼致します」と言いながら入ってきた人物はミレー又が会った事のない男性だった。

「ミレー又様、はじめまして。私、陛下の秘書をさせて頂いており
ます、ハンクと申します。陛下より伝言をお伝えしに来ました」
「伝言を？」

「はい。陛下とのご面会は三日後、午後との事です」

「三日後、午後ですね？わかりました」

「はい。それでは私はこれで…」

「ええ。ありがとう」

ハンクは一礼すると部屋を出て行った。

扉がきつちりと閉まるのを見届けると、セレナは「陛下とご面会な
さるんですか？」と聞いてきた。

「ええ…リリーに陛下と面会が出来るか頼んでいたの」

「そうだったんですか」

セレナは納得したのかそれ以上は何も聞いてくることは無く、ミレ
ー又はお茶を飲みながら、陛下との面会の事を考えていた。

第9話：庭師登場（後書き）

庭師のおじいさん登場しました。

これからちよくちよく登場予定です。

お話自体はすこーし進んだ程度になってしまいました。
さて、3日後は陛下と面会です。

次は陛下（マルクスのお父さん）が登場します。

第10話：謁見の間にて

謁見の数時間前 - - - -

「陛下は一体何を考えているのかしら…?」

「さあ…わかりません」

ここは王妃の私室。すべてのものに贅を凝らした部屋。
そこに居るのは王妃アリスともう一人。

「わたくしは、姪である貴方をマルクスの許婚としようとする者の
に根回しまでしたと言っのに…」

「……………」

「これではわたくしの計画が台無し…今まで忌まわしいあの女の息
子を自分の子として育てたのは貴方を妃に迎える為…なのに…」

王妃はギリギリと音がしそうなほど歯をかみ締めた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ミレーヌはセレナに伴われて陛下が待つ謁見の間へ連れて来られた。

「こちらが、謁見の間になります」

ついに、陛下との面会が叶う。

大国の王様とはどんな人なのか？ミレー又は緊張した面持ちで、両手を胸の前でぎゅっと握り閉めると、扉の前へ一歩足を踏み出した。

「よろしいですか？」

「ええ」

うんと頷き、握っていた手を元に戻すと、まもなくセレナによって扉は開かれた。

長い長い玉座への道のりをゆっくりと進む。

ようやく陛下の前へ辿り着き丁寧に膝を折って挨拶をする。

「お目にかかれて光栄です。国王陛下…わたくし、アナタリアから参りましたミレー又と申します」

「まあまあ、顔を上げなさい」

そう言われて初めてミレー又は顔を上げて周りの状況に意識を向けた。

王座のそばには側近らしき人が2人、腰にある剣に手を添えて立っている。

陛下へ視線を移せば、マルクスに似た顔が目に入った。

やはり親子…それほど、陛下はマルクスが歳を重ねたらこうなるんだという事を主張しているようだった。

父も同じ国王だが、どこかが違う。大国の王としての威厳だろうか？次に陛下の隣に視線をやれば王妃という存在感をこれでもかと表し、座ってこちらを睨む様に見ていた。

（え……？）

その目を見た瞬間ミレー又は咄嗟に不自然にならないように、目を逸らした。

心臓がドクドクと鼓動を早めた。

「姫、よくわが国にお出でくださった」

「は…はい」

「まあ…そう緊張するでない。挨拶が遅れてすまなかった」

「いえ！そんな…」

緊張するなといわれても、王妃の冷たい視線に更に緊張は増してしまっている。

おかげで微かに手が震えてしまい、頭は真っ白だ。

「で、息子には会ったのかね？わしに似ていい男だろう！あっはははは」

「陛下…冗談はおやめください」

「あ、あの…その…」

これから話す内容にどう陛下と王妃がどう反応するのか考えたただけでも恐ろしい。

陛下の方は今はとても機嫌が良いみたいだが、怒らせたりなんかしてしまったりしたら、両親はどうなってしまうのか…。

そんな事ばかりが頭によぎってしまい、うまく言葉が出てこない。

でも自分から面会を申し込んでおいてこのまま何も話さないという訳にもいかない。

ミレーヌは勇気を出して口を開いた。

「こ、国王陛下…わたくしは…」

「何だね？何なりと申してみよ」

「……マルクス様との縁談を…一時保留にさせていただきたいのです」

一瞬王妃の眉が上がったがそれを見ていたものは誰もいない。

ミレーヌはどうしても顔を上げて言う事ができず、うつむき加減で言葉を発したため2人が今どんな顔をしているのか見る事ができなかった。

「……………」

「勝手な言い分だと、重々承知しております。ですが、このままマルクス様に妃として認められないまま結婚するのはわたくしが嫌なのです」

「……………」

「マルクス様がわたくしという人間を知って、それでも無理だという時は…」

「今すぐに縁談を破棄するという考えはないのですか？」

ずっと黙って聞いていた王妃が話を遮り、冷たい声で問いかけた。突然の事にビクッと肩を揺らしミレーヌは顔を上げた。

ここで顔を合わせてから、冷たい目でこちらを見ていたが、今はさらに凍えるような目で見ている。

王妃はこの縁談が最初から反対だったといわんばかりの態度だ。

対照的に陛下の方はとくに怒ってはいないようで何とも言えない表情を浮かべたままだった。

ミレーヌは静かに首を立てに振った。

「まあ、アリスよ…こちらから縁談を進めたのだ。姫がそう言うなら無理に縁談を破棄にと申す事はできんだろう。そうだな…三ヶ月…三ヶ月間姫にはこの城に滞在していただき、その間にお互い納得できるよう勤めるとよからう」

「…っ！陛下！何を言い出すのです！？大体わたくしはこの縁談は反対だと申したではありませんか！マルクス本人も結婚しないといっているのです。なら、縁談を破棄すればいいじゃありませんか！

？」

やはり王妃はこの縁談に反対だった。

ミレー又だって馬鹿ではないし、王妃のあの態度でわからないほうがおかしい。

きっと自分があまり権力の無い小国の出だからではないのか…そんな気がした。

「何を言っておる。これで縁談を破棄すれば、また一からやり直しだ。それではいつまで経つてもあいつは結婚しないではないか！」

「ですが…他にも、もっとふさわしい相手が…」

「ここに居る姫がマルクスの妃にふさわしくないと申すのか？」

「……………」

一段と低くなった陛下の声は怒りを含んでいて自分が言われたわけではないのに恐怖を覚えた。

王妃も同じなのか口を噤んでいる。

「わしが、決めた事だ。お前は口を出すんじゃない」

いきなり始まった国王陛下と王妃の口論にどうしたら良いのかわからない。

というか、王妃の「他にもふさわしい相手が」と言う言葉にミレー又は内心打ちのめされていた。

周りの側近だろうう人達も視線を泳がし何かを述べる事は無さそうだ。ここで自分が何か発言すればさらに王妃からの反感を買いかねないし、得策じゃない。

「姫よ…」

「……………はい、国王陛下…」

「他に話は無いかな？」

先ほどとは打って変わって穏やかな口調だった。ただ、目は笑っていないのがわかった。

言いたい事は取り合えず言ったので、他に話はない。それに早くこの場を立ち去りたい。

「はい…。お忙しい中ありがとうございました。それでは失礼いたします」

口早にそう言って、礼を取り立ち上がった時に一瞬視界に入った王妃は、怒りと悔しさからか顔を歪ませていた。

入ってきた時と同様、焦る気持ちを抑えてゆっくりと扉まで歩き、謁見の間を後にした。

扉を静かに閉めると緊張の糸が切れたかのようにその場に座り込んでしまった。

それを見たセレナと、リリーが慌てて近寄ってきた。リリーはここ以後からやってきたのだろう。

そして二人はずっとここで待っていたのだろうか…。

「ミレー又様…」

扉の外にまで、陛下と王妃であるアリスの言い合いが聞こえていたみたいで二人とも顔面蒼白だ。

きつと自分も同じような表情をしているに違いないと思った。

本当はあまり心配を掛けたくは無いのだけど、さすがに気疲れをしてしまったようだ。

「大丈夫よ…ちょっと疲れてしまったから、部屋に戻って休みたい

のだけど…」

そう言った瞬間二人は顔をしかめた。

「あの…ですが…」

「…何かあるの？」

何故かセレナは言い辛そうにしている。

早く部屋へ戻って休みたいのだが、何かあるのにそれを聞かない訳にもいかず、ミレーヌは先を促した。

「それが…先ほど、マルクス様がこちらへ。話が終わったら、自分の執務室にミレーヌ様を連れてくるようにと…」

「え…？」

正直今は誰にも会いたくないのが本音なのだが、相手が相手だけに来いと言われて無視するわけにもいかない…。

ミレーヌはため息を一つついて「わかったわ…案内して」と言うつと長い廊下を歩き出した。

第10話：謁見の間にて（後書き）

今回は陛下だけでなく、王妃も登場となりました。

王妃はこれから話に大きく関わってくる事になるかと…

次回はマルクス登場です。

第11話：本当の気持ち（前書き）

第11話目の内容で、矛盾が出てしまわないよう10話目までの内容を少し修正致しました。

初めて読む方は特に問題は無いと思います。

そんなに変わってはいませんが、お知らせします。

第11話：本当の気持ち

「マルクス様、ミレーヌ様をお連れしました」

頑丈そうな扉の前でセレナは声を掛けると、しばらくして中から扉が開くと、ダラスが顔を出した。

「ああ、お待ち兼ねですよ。すみませんが、ミレーヌ様だけ中へ」

そう言つて右側に身を避けると「どうぞ」と声を掛けられた。

ミレーヌは一緒について来た二人にここで待っているようにと伝え、執務室の中に足を踏み入れた。

ダラスはミレーヌが完全に部屋の中へ入ったのを確認すると静かに扉を閉め、長椅子に座るよう言った。

待ちかねていると言っていたはずなのに、ここにマルクスの姿は無い。

不思議に思っていると、ダラスは「あの扉の奥にいます。呼んで来るのでちよつと待っていてください」と言つて指差した扉の中へ消えた。

一人になつてしまったミレーヌは何だか落ち着かなく、キョロキョロと周りを見渡していると、視線がある一つの棚で止まった。

そこには、写真立てだけがポツンと置かれただけで、他の棚のように物が無い。

見てはいけないと頭の隅では考えてるはずなのに、勝手に体が動きいつの間にかその写真立てを手にしていた。

その写真には、綺麗な女性と五歳ぐらいの男の子、そして同じぐらいの可愛らしい女の子が一緒に陽だまりの様な笑顔をして写っている。

あまりにも幸せそうなその写真に、ミレー又は知らぬうちに笑みをこぼしていた。

だから、背後に誰かがいるとすぐに気が付かなかった。

「それに触るな!!」

「きゃっ!」

突然背後から大声がしたかと思うと、手にあった写真をものすごい勢いで奪い取られた。

奪い取ったのはもちろんマルクス本人。顔を見れば激怒しているのがすぐにわかった。

ミレー又は驚き過ぎてその場に固まった。

どうやら見てはいけないものを見てしまったようだ。

「勝手に人のものに手を出すなど、恥を知れ!!」

そう言ったかと思うとマルクスの振り上げた手が見えた。

ギョツと目を閉じて次に来る衝撃に身を構えていたが、何も起きない。

そつと瞼を開ければ、手をダラスに押さえられたマルクスが目に入った。

「マルクス様、女性に手を上げるなど…おやめください」

「ダラス!!何をする手を離せ!」

「では、手を上げないと約束してください。そしたらすぐにでも離します」

「……………わかった。だから早くその手を離せ……」

ため息混じりにマルクスが言つのと同時にダラスの手が離れた。

「マルクス様…ご、ごめんなさい…その…」

「もういい。二度と触るな…言い訳も聞きたくは無い」

そう言うマルクスは持っていた写真立てを乱暴に元の棚に伏せて置くと、これ以上この話はしたくないとばかりに背を向け長椅子にドッサッと音を立てて座った。

「…取り合えず、話がある。座れ」

「はい…」

ミレーヌが椅子へと腰を降ろすとマルクスは口を開いた。

「ダラスから報告を受けた。縁談を保留とは一体どういふつもりだ？」

「そ…それは…」

「俺はお前を妃にするつもりは無いと言った筈だ。なぜ、保留にしてまでこの城に留まる必要がある？何が目的だ？金か？地位か？」

「なっ…！ち…違います！！」

「なら、何だと言っただ？女など、所詮それしか考えていないだろう？」

「……………」

何も言い返す事も無く黙ってしまったミレーヌに、彼はため息を付くと静かに口を開いた。

「何か言ったらどうなんだ？」

「今…ここであたくしが何かを言って…それを信じてくださいますか？…いいえ…きっと嘘のように聞こえてしまうでしょう…」

ミレーヌがここへ来てから、マルクスとは初対面だと思わせるような素振りをしてきたが、実はそうではない。

一度だけ会ったことがあるのだ。

それはマグナルド国主催の舞踏会での事。

当時十歳だった彼女は「ミレーヌ、今回はお前も一緒に行くように」と父に言われ、初めての舞踏会に胸を踊らせワクワクしていた。会場へ着くなり父から挨拶をするから来なさいと言われ後を付いていった時だった。

人だかりを何とか進み、目的の人物の前で父は立ち止まった。すると、「この国の第一王子だ挨拶しなさい」とマルクスを紹介された。

スラリと背が高く、たった五歳の差でも当時のミレーヌにとってはマルクスは洗礼された大人だと感じた。

背に隠れる様に立っていたため、挨拶以外の言葉を交わしたわけでもないから、マルクスが覚えていないのも当然なのだろうが…。

その時彼女は父の影からチラリと見えるマルクスの姿にドキリと心臓を高鳴らせていた。

そう…彼女はマルクスに一目で恋に落ちたのだ…。

でも、この恋は叶わない…自分はその他大勢の中の一人にしか過ぎないし、周りには自分より美しい人が沢山いるのだと歳を重ねれば嫌でも理解してしまった。

だけど、この思いをどうしても捨てきれずにいたミレーヌは、どんなに父の反感を買っても縁談や婚約の話を断り続けて来た…。

だから、今回の縁談にはとても驚かされたが、それと同時に神に感謝した。

何故自分が…？そう思ったがこれは自分の気持ちを伝えられるチャンスでもあるのではないかと考えた。

だから本当は「お金や地位なんかが目的じゃない。ただ、あなたが好きなだけ！」と叫んでしまいたかった。

だけど、今の彼に何を言っても無駄な事は想像できた。

これ以上何か言って、嫌われる事が耐えられない。

だから彼女は固定も反論もしなかった。

それを彼がどう捉えたかはわからない…。

所詮女はこうだと決め付けられ、ただ――――胸が痛かった。

第12話：ミレーヌの悩み

あれから数日がたった。

ミレーヌはどうしたら良いのか行き詰っていた。

陛下より三ヶ月の滞在を許されたが、マルクスの態度は依然変わらずむしろ避けられている。

自分を嫌っている相手にどう接したら良いかなんて知らない。

大体、そこまで人に嫌われたことも無ければ、嫌った事もないのだ。恋愛初心者のミレーヌにはアプローチの仕方などまるでわからないのが現状だった。

「はあ…」

ここ数日のため息も板についてしまい、リリー達から心配されてしまっている。

気を使っただけ何も聞いては来ないが…。

「ミレーヌ様今日は良い天気ですよ…外へ出てみませんか？」

「う……ん……」

そうして外へ出てみても、一向に気分は晴れない。

視線は無意識に南塔のマルクスの執務室へと向けられチラッとでも良いからマルクスの姿を見る事は出来ないかと考えてしまう。

（見てるだけじゃこれまでと何も変わらないじゃない…）

「お嬢さん、何か悩み事かね？」

そう言われてやっ自分今庭師（名はヨダンさんと言らしい…）のお手伝いをしてるんだったと気が付いた。

今日は新しい種を植えるのに土を掘り返す作業を頼まれていた。

「いえ…お手伝いしているのにぼーっとしてしまつてごめんなさい」
「それは別にいいんじゃない。でも、何かあるなら話してみてはどうじゃ？まあ、こんな老いばれに話した所で解決できるとは思われないが…」

「えつと…その……、わたくしある方に嫌われてるみたいで…」
「嫌われてる？」

「はい。そんな相手にどうやって接して良いのかわからなくて…」
「そうかあ…それは大変じゃな…」

そう言つてヨダンは顎に手を置いて何かを考えこんでしまった。

そんな姿を見てミレー又は少し申し訳なくて黙々と作業を続けた。

「お嬢さんは…その相手が好きだから悩んでいるんじゃないのかい？」
「？」

「えつ！？」

どうしてわかつたのかと言う顔を見ると「やっぱりな…」と彼は笑顔を浮かべた。

別に隠す事でもないのだが、なんだか照れくさくて顔が熱くなつた。

「好きじゃなきゃそんなに悩む事もないだろう？嫌いならどうでもいい話じゃ」

「…まあ…そうですね…」

「相手には好きと伝えたのかい？」

「……いえ…言つても信じてくれないと思います」

「どうして？」

「どうしてでしょうね…そんな気がするんです」
「そうか……」

しゅんとしてしまったミレーヌにヨダンはそれ以上何も言わなかった。

こうしてミレーヌが悩んでいる間にも王妃アリスは着々と次の計画を進めていた。

「ミレーヌは今どうしているのかしら？」

部屋の中央に置かれた長椅子に足を組んで座りながらアリスは尋ねた。

「今の所マルクス様に避けられているのか、お会いしているという事はないようです」

「そう…マルクスの気が変わる前に何とかしないとね…もし、気が変わる様な事があれば…消えてもらうしかないわね」

「はい…仰せのままに…」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ミレーヌは中庭から部屋へ戻る途中の回廊を歩いていると、突然曲がり角から誰かが現われ出会い頭にぶつかってしまった。

「いめんなさい」

言ってから顔を上げて固まった。

目の前にはマルクスが顔をしかめて立っていたからだ。
マルクスは腕を払いミレーヌを睨み付けた。

「気をつける。……それになんだ？その格好は……」

そう言われて、視線をマルクスから自分の服装へ向けると顔が真っ赤になるのがわかった。

「こっ……これは！」

そう……ミレーヌの服は侍女が着るようなワンピースで、しかもそれは土で汚れたもの。

必死に土を払おうとしたが、もう遅い。

マルクスは更に顔を歪めた。

「お前は一体何をしにきたのだ？まさか土を弄りにわざわざやって来たんじゃないだろうな？」

「……………」

「また、だんまりか……」

俯いてしまったミレーヌにマルクスはため息を吐くとそのままミレーヌの脇を通って奥へ去っていつてしまった。

何も言い返す事できず、呆然とその場に立ち尽くしていたミレーヌだったが、リリーに声を掛けられ我に返るとその場を離れ部屋へと歩き出した。

そんな姿をマルクスに見られているとも気づかずに……………。

部屋へ戻ってきたミレー又は自分の姿を鏡に映し更に落ち込んだ。土で汚れているのは服だけじゃなく、頬まで…。

なんと不様な格好を晒してしまったのか…思い出しただけで、恥ずかしい…。

もう恥ずかし過ぎて、穴があつたら入りたいとはこのことだろう。

これでは言われた事を否定する事なんかではしない。

でも何かに没頭していなければ、マルクスのことばかり一日中考えてしまい気が滅入るばかりなのだ。

（どうせ、嫌われてるんだから…もういいのよ）

そう自傷気味に笑うしかないミレー又だった。

第13話：過去に捕らわれし王子

「マルクス様いかがなさいました？」

ダラスに声を掛けられハツとする。

自分は一体何をしているのか？

ここ最近仕事に集中できない…あの姫の事が頭から離れてくれず…。

縁談を破棄してくるかと思えば、保留にしてくれと言い出した。
なぜそんなに結婚にこだわるのだろうか？

だから、本人に直接問いたくて呼び出した。

ダラスに「ミレーヌ様がいらつしやいました」と言われ奥の書斎から出て来て一番に目に入ったのは棚の前で何かを手にしたミレーヌの姿。

あの棚は……。

そして手元に視線を移した時、頭よりも口や体が先に動いていた。

「それに触るな!!」

そう言ってミレーヌが手にしているものを奪う。

彼女はビクッと肩を揺らしてこちらを振り返り固まっていた。

これは彼が何よりも大切にしているもの。

もちろん彼以外の者には決して触らせない。

その中に写っているのは自分の本当の母親……。

産みの親である母親は自分が十五歳の時に病死した事になっている。

現王妃は後妻で本当の母親ではない。

そして自分の隣で笑顔で写る彼女は自分が唯一信頼し、そして恋をした相手だった。

彼女ユーリは代々王家に仕える家の出で幼い頃からこの城へ出入りしていて、母親の侍女を勤めるようになり…そして、いつしか恋い焦がれる存在となっていた。

身分の差はあれど、近い将来結婚を申し込むつもりでもいたのだ。

それが結局彼女も母の後を追うように亡くなった。

それも自殺だった。

無惨にも自分の部屋で首を吊って…。

大切な人を続けて二人も失ってしまった彼の悲しみは相当のものだった。

彼女が亡くなって数年後…ある日記が見つかった。

その中に書かれていたのはマルクスを更に追い詰めるには十分な内容だった。

『マルクス、あなたに謝らなければならないことがあります。

私は過ちを犯しました。それは許される事じゃないでしょう…。

あなたの母親を死なせてしまったのはこの私です。

私はある方の命令によりずっとメアリー様が飲むお茶にある薬を混ぜ続けていました。

そして亡くなったあの日は私は耐え切れずメアリー様にその事を打ち明けました。

だけど、メアリー様は知っていたと…ずっと死を覚悟していたと言われました。

ずっとずっと私を庇い続けていたんだとその時になって気がついて

…でも遅すぎました。

メアリー様は亡きお方へと姿を変えてしまわれた…。

私はなんと愚かな事をしてしまったのか。

後悔しか残りませんでした。

そしてあなたにも、もう顔向けできません。

こんな私を好きになつてくれたこと嬉しかった。

でも罪悪感でいつもどうにかなりそうでした。

だからこの身を持って償います。

ごめんなさい。本当にごめんなさい』

そう綴られた日記にマルクスは裏切られたと初めは怒りを覚えユーリを憎みさえした……しかし時が経つにつれ、きつといつも悩んでいたんだろっ彼女の心情にも気付けなつた当時の自分をも責めるようになった。

あの日記は今も誰の目にも触れないように厳重に保管してある。

取り敢えず自分だけが知っていればいい内容だ。

だれが母に薬を盛るように命令したのか？

憶測でしかないが、それは現王妃ではないかと思っている。

後妻となつたアリスは自分の欲に忠実な女だつた。

元々側室だつた彼女が妃の座を狙っているというのは母が亡くなる随分前から言われていたのは事実だ。それだけではなく、妻を亡くした父に付け入り一年も経たずに後妻となつた。

ただ、ユーリに命令したと言う証拠が何も無く…犯人と決め付けることは出来ずにいた。

自分は何も知らないと忠実な息子を演じ…自分を偽るようになった。

いつかボ口を出すんじゃないかと機会を待ち続けている。

そんな自分の周りに近寄ってくるのはアリスのような女ばかりで…。

女は欲の為だつたらどんな努力も惜しまない。

男はただのステータスに過ぎず、金と権力さえ持っていれば最高級だと言っているようだった。

そんな女を相手にする事も何度かあった。

だがその度に心はどんどん冷えていき、いつしか人を愛するとはど
ういう事なのかわからなくなってしまった。

だから、ミレーヌに対しても、金や権力が結婚の目的なんだろうと
決めつけて本性を探ってみたが、なんとも煮え切らない返答しか返
って来ることはなくマルクスを苛立たせるだけだった。

金や権力が目的でないとすればなんなのか？

そんな事ばかり考えているマルクスにはミレーヌの思いなど察する
ことなど出来なかった。

第14話：アリスからの縁談

突然義母上から部屋へ来るようにと呼び出された。

こちらとしては正直何も話す事は無い…。

あの女が今までずっと沈黙していた事が妙に気になってはいたが…。

南塔から東塔へと繋がる回廊の途中、角を曲がった所で誰かにぶつかった。

注意しようと見てみれば、相手はミレー又だった。

彼女はなぜか侍女のような服装で土にまみれている。

マルクスは腕を払うと、相手を気遣う事もせずに睨み付けた。

一体この娘はこの城に何をしにきているのか？

別に自分の事を常に気にしろだなんて言わないが、それにしたって王女と言う自覚は無いのか…。

彼女の行動には呆れる。

それとなく指摘してやれば、顔を真っ赤にして必死に土を払っている。

そんな姿を目にして、つい嫌味を言ってしまった。

あんな言い方をすれば、何かしら言い返してくるかと思えば、彼女は俯いて表情を隠してしまい、またしても黙ってしまった。

（なんなんだ？ 一体…）

しばらく彼女を見つめていたが、一向に黙ったままで身動き一つしない。

「また、だんまりか…」

マルクスは心の中で舌打ちすると、何も言わない彼女の脇を通って奥へと向かう。

だが、すぐに近くの柱の影に身を隠すと、何故かミレーヌの様子を伺っている自分がいた。

（おい！何で俺は柱の影に隠れたんだ！？）

自分がしている行動とはいえ、理解不能としか言いようが無い。

大体自分で傷つけるようなことを言っておいて…。

今どんな表情をしているのか何故か気になってしょうがないだなんてどうかしている。

どれくらいそうしていたのか…気が付けばミレーヌと彼女に付き添っていた侍女の姿もなかった。

「ちっ！馬鹿馬鹿しい…」

そう悪態をつき、マルクスはため息を一つ吐くとアリスの元へ向かうべくその場を離れたのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「あら…遅かったわね？何をしていたのかしら？」

マルクスがアリスの私室へと足を踏み入れた瞬間、不機嫌な様子で声を掛けられた。

「今、仕事を立て込んでまして…」

「そう…仕事ね…」

まるで”本当にそうかしら？”とでも言いたげだ。

そんなアリスを無視すると「で、何か用ですか？」と話を切り出した。

「あの、小国の姫との縁談はどうするのです？」

「どうすると言われましても…」

（あなたには関係ないでしょう）

そう。関係ない。これは自分の事なのだ。アリスに口出しされる筋合いもない。

そんな気も知らず、アリスは更に畳み掛けるように言い出した。

「マルクスいい？これはあなただけの問題ではないのよ……さつさと破談になさい」

「は？なぜです？父上がそう言ったのですか？」

「あなたにはもっと相応しい方がいるはずよ…」

「相応しい？はっ……意味が分からない…何を持って相応しいのです？」

彼が言った事に答えもせず、相応しい相手がいると言い出したアリスに思わず喧嘩腰になる。

「そんな屁理屈を聞きたいわけじゃないわ…」

「じゃあ何だと言うのです？」

「妃にしないと言ったのはあなたの方でしょう」

「そうですね。確かに言いました。それは認めましょう。ですが、だからと言ってあなたに何か？」

「何か？そうね…あの娘は正直目障りね」

「……………」

「わざわざ陛下のお時間を頂き、話を聞けば縁談を断るところか保留ですって？なんて図々しい…」

なにが図々しいだ…そっくりそのままあなたに返しますよと言いたいのをぐつと我慢する。

「まあいいわ…今日はあなたに会わせたい人がいるのよ…」

「……………」

そう言つてアリスは薄く笑うと、廊下へ続く扉の前へ移動して外へと呼びかけた。

「中へ入りなさい…」

「はい…叔母様」

「……………！？」

廊下ですつと待っていたのか呼びかけに返事が返ってきた。

そして、アリスに伴われてこの部屋へ入ってきたのは見た事のある娘……………。

「マルクス…あなたはこの娘との縁談を進めなさい」

「なっ……………！！」

「この子は伯爵家へと嫁いだ私の姉の子。名は知っているわね…リリーよ」

何食わぬ顔で挨拶する娘…。

それは紛れも無くミレーヌの侍女リリーだった。

第15話：ふざけた話

「どういうことですか!？」

「どうもこうも、あなたには彼女…姪であるリリーとの縁談を…と言ってるの」

姪だかなんだか知らないが…よりによってミレーヌの侍女とだなんて!

全くふざけた話だ。笑えもしない…。

今そんな話をして”はい。そうですか”と了承するとても思っているのか?

マルクスはあからさまに顔をしかめるとアリスに食ってかかった。

「そんな話は聞いてません!」

「だから今、話してるんじゃないの」

小馬鹿にした言い方に腹が立ったがここで冷静にならなければ…そう思ふのにどうも無理なようだ。

「ミレーヌはこの事を知っているのか?」

「知っているも何も…」

リリーに話し掛けたというのに、アリスが白々しくそれに答えようとする。

「あなたには聞いてない!!」

それを素早くマルクスは遮るとリリーに向き直った。

「リリーと言ったな…お前の主人はこの事は知っているのか？」
「……………」

リリーはこの状況を初めから予想していたのだろうが、顔色が悪いのを見るとアリスだけがこの縁談に積極的なんだろうと思った。だからと言ってマルクスの怒りが治まる訳ではない。

「早く答えるんだ!!」

「いえ……話しておりません」

知らないと聞いて思わずため息がでた。
もちろん安心から来るため息ではない。

そりゃ話せないだろうというのはわからなくもない…。

自分の縁談相手とご主人様であるミレーヌの縁談相手が同じだなんて果たして言えるだろうか？

どちらにしても、彼女を受け入れる事なんて無理に決まっている。

大体、父の了承も貰っていないのは明白だ。

こんな事を知っていたら始めからミレーヌとの縁談を持ち込んで来ないはず…。

「義母上…申し訳ありますが…私は彼女とも結婚する気はありません。父上もこの事を知っているとは思えませんし、何よりも非常識です」

「…なっ!？あの姫が居るから…そうなのね？」

「どうしてそうなるんです?…そんなんじゃありません。どちらの方とも結婚する意志は無いという事です」

そう答えた時のアリスの表情にあきらかな苛立ちを感じた。
だが、開いた口は恐ろしい程冷静なものだった。

「まあ…この先、考えが変わることもあるでしょう？その時は、リリーに一目惚れでもしたとか言えればいいのよ…まあ、返事は今すぐでなくてもいいわ…」

そんな事は有り得ないと言い返そうとしたところで、”これ以上話はない”とばかりにアリスは立ち上がるとリリーを部屋の中へ残し、マルクスだけを部屋の外へと無言で促すと鼻の先でボタンと扉を閉められた。
まるで追い出された形だ。

（あいつは…母さんを手にかけた女だ。きつと今回のことでも何か考えているに違いない…）

しかし、これはある意味チャンスかもしれない。
あの女の化けの皮を剥がす……。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

自分の執務室へと戻ってくると、早速ダラスを呼びつけた。

書類を片付けながら待つこと数分、ドアがノックされダラスが顔を出した。

「マルクス様、お呼びですか？」

「ああ…ちよつとな…」

そう言うと、マルクスはダラスを応接用の椅子へと促し座らせるとアリスの部屋での出来事を話し始めた。

一通り話終え、ダラスの様子を窺うと、やはりあまり良い表情はしていなかった。

それもそのはず。

まさか、アナタリアから来た侍女と王妃に繋がりがあつたなんて…。調べを怠つたと言われても仕方ないだろう。

「そ…それは本当ですか!？」

「ああ。だが、あのリリーとか言つた娘…縁談には乗り気でなかった気がした」

「そうですか…にしてもまさかあの侍女が…」

「まあ一度、彼女とこの事について話をしてみたいと思つんだが…。時間を作ってくれないか？」

「そうですね…わかりました。早急に調整してみます」

頼むと言うとダラスは部屋を出て行った。

静かになった部屋でマルクスは顎に手をやり物思いにふけていた。

アリスの事、リリーの事そしてミレーヌの事…どうするべきか？

いや、別にリリーとの結婚を考えて居るわけでもない。

どの道三カ月も立てばミレーヌは自分の国に帰る筈だ。

リリーはどうだかわからないが…。

大体そんな事で悩むなんて。

(全く自分らしくない…)

マルクスは立ち上がると仕事の続きをしようと机へ向い一枚の書類を手に取った。

マルクスが仕事に没頭し始めた時には窓の外は夕焼けが広がり夜の訪れを迎えようとしていた。

第16話：リリーの事情

マルクスが半ば追い出されるように去っていった部屋で二人っきりになるとアリスは話を切り出した。

「マルクスがああ言い出すのは予想の範囲内：大丈夫よりリリー心配しなくてもあなたを必ず妃にしてあげますからね…うふふ」

「叔母様…私は…」

リリーの言葉など聞いていないかのようにアリスが笑い続けているのは端から見ればとても不気味だろう。
何かに取り憑かれているのではないかとも思わせる。

リリーの正直な心の内はミレーヌへの罪悪感でいっぱいだった。

正直、アリスの言うことを聞きたくはない。

だが、彼女に逆らうことができないのが現状…。

そんな自分が情けなかった。

彼女と会ったのは過去一度きり。

それも母が亡くなった時だけである。

その時の印象も最悪なものだった。

かつて、リリーの母がこの国の側室へ召されるはずだったのを、妹であるアリスの助言によって伯爵家へと嫁ぐことになったという。

「あの時はごめんなさいね…まさかこんな事になるなんて…」

言葉では悪い事をしたと言ってはいるが、態度と表情は全く悪びれていなかった。

その後も、母が実家宛に送っていたという手紙の内容を話し始め、その内容は衝撃的なものだった。

最初は上手くいっていた夫婦関係。

それもリリーが生まれたことにより一変してしまふ。

伯爵である父は、リリーが見ていないところでことあるごとに、跡取りを産めなかった母だけを攻めるようになった…。

父は母を精神的に…またある時は肉体的にどんどん追い詰めていったようだ。

思い返してみれば、初めは優しくかった母も時が経つにつれて、リリーに辛く当たるようになっていた。

父も自分が居ないように接してくるのがわからず、悲しくてしかたがなかった。

何故母や父は自分を愛してくれないのか？せめて母だけは昔の様に戻ってほしい。

いつしかそんな事ばかり考えるようになっていた。

やっとわかった事实に、リリーは生まれてこなければ良かったのではないかと悔やむことしかできなかった。

その事実をなんの躊躇もせず口にしたアリスに腹が立った。

母が亡くなつてからの父はというと、相変わらずリリーの存在を無視し続けた。

母が生きてた頃から恐らく居たのだろう愛人の女を堂々と家へと連れ込むようになり、なんと隠し子までいたのだ。

皮肉な事にその子供は男の子…。

父の溺愛っぷりは吐き気がしたし、母は違えど幼い弟にも憎しみさえ感じた。

リリーの居場所はどんどん無くなって行った。

弟は何にも分かっていないからか、リリーに纏わり付くようになる。どんなに冷たくあしらっても笑顔に向けてくる弟に更に嫌悪感が増した。

そしてついに、事件を起こしてしまう。

あの日は、丁度弟と二人っきりで留守番をしていた時だった。

勝手にリリーの部屋に入ってきて遊びだした弟を初めは無視していた。

だが、彼女が本を読むのに夢中になっている時だった。

突然、物が割れる音がして弟に視線を向けると、足元に散らばるガラス片…母が優しくかった頃に唯一買ってくれた置物がバラバラになっているのが目に入った…。

「なんてことするのよ!!」

そう言って小さい弟を思いっきり突き飛ばしていた。

弟は小さな叫び声を上げて壁にぶつかって、打ち所が悪かったのかぐったりして動かなくなっていた。

その音を聞きつけたのか、リリーの部屋の扉が開き入ってきたのは丁度家に帰ってきた父だった。

「何をしている!!!」

そう怒鳴られ頬を叩かれた瞬間、自分が何をしたのか…サツと血の気がひいた。

父は弟を抱きかかえたと出て行った。

その後、弟は頭を打っていたらしく、幼くして半身不随となってしまうた。

父は仕事と看病に忙しく、家へと帰ってこなくなった。

そうして、半月が過ぎた頃…。

突然帰ってきた父に呼び出され、花嫁修行という名目でリリーをアナタリアの侍女となるよう告げた。

結局リリーは追い出されるように家を後にしたのだった。

自分としては、父…そして母から愛情というものを貰えなかった土地にいつまでも居るよりも、誰も自分を知らない所へ行けば少しは救われる気がした。

父は邪魔者が居なくなってきたと精々していることだろう。

そして、訪れたアナタリアの地で出会ったのが王女ミレー又だった…。

感情を上手く表に出すことができなくなってしまったリリーは、侍女仲間からは誤解を生み嫌がらせされることも珍しくなかった。

そんなリリーに対して、ミレー又は決して文句を言わず寧ろ友達のように接してくるのだ。

正直今までそんな人間に出会ったことの無かったリリーは戸惑いを隠せなかった。

実際偽善者だと決めつけて、出会ってから数年は心を開く事はなかった。

だが、リリーが病気になった時には…自分の立場もあるというのに、せつせと看病をする。

侍女仲間から嫌がらせされているのを見つければ身を呈して守ってくれた。

そんな姿を見て、少しずつ気持ちは変化していった。

今では、心を許せる唯一の存在だ。

だからこの国にやってきた時にアリスに呼び出され、自分とマルクスとの縁談の話を聞かされた時には驚いてしまった。

それは、ミレーヌに対しての裏切りだ。

断ろうと口を開きかけた瞬間、アリスが告げた言葉にリリーは顔を青くした。

「この話を断れば、どうなるか分かっているのかしら…？あなたがした罪を私は知っているのよ？」

リリーの表情が変わったのを見たアリスは嫌な笑みを浮かべると更に口を開いた。

「ミレーヌは知っているのかしら？あなたが弟を殺そうとしたのを…」

「ちっ違います！…あれは！…」

「何が違うと言うの？実際あなたの弟は、半身不随で床に伏せっているのではないの…一歩間違えれば死んでいたかも。あーなんて恐ろしい子」

「……………」

アリスに言い返せる言葉など何も無かった。

その事実をミレーヌが知ってしまったら、また私は独りぼっち…。

（そんなのは嫌だ！でもミレーヌ様を裏切るのも…）

そうは思っても結局はアリスの言いなりとなってしまうたのだった。

第17話：丸め込まれたマルクス

夏から開始する王都南端に位置する橋の修繕計画がついに始まった。これは前の年から出ていた案件だ。

橋は古く至る所に亀裂が入っており、いつ崩れてもおかしくは無い状態。

崩れてしまえば貿易にも支障が出てしまう。

だが、度々議題に上っては先延ばしになっていた。

そして今回別の案件で忙しい陛下の代わりに、マルクスが指揮を執り行う事になったのだ。

ハッキリ言って今は多忙で、本来縁談がどうのと言っている場合ではない。

「これに…サインをお願いします…」

執務室へとやってきた大臣がサインの必要な書類を差し出している。恐る恐ると言った感じで話しかけられ、マルクスは忙しく動かしていた手を止めて、ちらりと大臣へと目を向けた。

父より歳のいった大臣だ。

何故かビクビクしながら受け取るのを待っている。

「大臣よ…」

「はい。なんでしょうか？」

「この案件は父が担当していたはずだが？」

「えっ！？そうでしたか？いやー間違えるなんて歳ですか？はっはっはっ」

そう言っただ口を開けて笑っている。

マルクスはそんな事は無視をして書類を突き返した。

大臣は受け取ってすぐにも部屋を出て行くと思っていたのに、何故かマルクスの前で突っ立っている。

「大臣……まだ何か？」

「あつ……えー……いやぁ最近マルクス様に縁談があるようですね？」

マルクスの眉がくいつと上がった。

（大臣の目的はそれが……）

「それが何か？」

「いやっ、どうなっているのかと皆も気にしてまして……」

「……気にせずとも、結婚などする気など無い」

「そ、それでは……この塔に今も滞在されている姫君は？」

「勝手に居座っているだけだ関係無い」

「そう申されましたも……一度お食事などなさってみてはいかがです？」

関係ないと言っているのに、永遠に続きそうな話にマルクスはうんざりしてきた。

そんな様子のマルクスを無視して「贈り物をされてはどうです」だの「食事じゃなくても、お茶を一緒に」だの勝手に話をしているのだ。

大体贈り物などして、あの姫に勘違いなどされたらどうするつもりなのか？

それを狙っているのかどうなのか分からないが、こんな事を言われでは面倒でしょうがない。

だが、ここで話に乗ってしまえば大臣……いや、父の思っつぼだ。

「……仕事が忙しいのだ。そんな暇は無い」

「それでは……」

「いい加減にしまえ！忙しいと言っている！もうお帰り願いたい」
「で、ですが……」

「ダラス！大臣がお帰りだ」

そう言うのと隣の書斎に籠っていたダラスが顔を出した。

「マルクス様、どうしたんですか？」

今まで隣にいて大臣とのやり取りが聞こえず、状況を把握できていないダラスだったが大臣の姿を見てなんとなく想像できた。

「どうしたも、こうしたも無い！只でさえ仕事を立て込んでいる今、大臣の話には付き合いきれん！」

「まあまあ……マルクス様の言い分も分らないのですが、大臣も陛下に頼まれたんじゃないやありませんか？」

先の言葉はマルクスに、後の言葉は大臣に向けられた言葉だった。

「え、ええ……そうです。陛下は姫君の事を気にされてます」

「……… だったら、俺にどうしろと言うんだ」

「ですから、先ほども申し上げたように姫君と一度食事の席を設けてみてはと……」

「そんな時間は無い」

「食事の時間ぐらいなら何とかかりますよ？」

「何を言ってるんだ、ダラス！！」

いい加減にこの話を終わらせて仕事に戻りたいのに、自分の味方であるはずのダラスまで大臣の話に乗ってしまった。

「マルクス様…ミレーヌ様がそんなにお嫌いなんですか？」

「嫌いとかそういう問題じゃないだろ」

「じゃあどういふ問題なんですか？」

「……………」

「お答えになれないのですね…」

このままでは何を言っても墓穴を掘ってしまいそうで、マルクスは押し黙ったまま答えようとしなかった。

それをどういふ風に捕らえたのかダラスは満面の笑みを向けてきた。全く何を考えているのか分からない。

腹立たしいやつだ。

ミレーヌの事を嫌いだなんて思った事はない。

正直気になる存在ではあるのだが…。しかし、それだけだ。

好きとかそういう感情は無い。

それを言っても余計ややこしくなるだけだ。

「では、ミレーヌ様との食事の時間も調整しなくては……いいですね？逃げ出すなんてことはしないで下さいよ」

「俺は子供じゃないんだ。そんな事するか！」

”食事の時間も”と言ったのはあの侍女との話し合いの時間も調整するからだろう。

「では、大臣…ミレーヌ様と食事をする事にしたと陛下にお伝えください。これでああなたの面目も立つでしょう」

「そうですね。やはりダラス殿に最初から頼むべきでしたな。では、私はこれで…」

そう言々と大臣は来た時とは対照的な笑みを浮かべながら帰ってい

った。

なんだかんだ言っ
ていつの間にか、丸め込まれて食事する事になっ
てしまった。

自分の意志とは関係なく事が進んでいるような気がしてならず、マ
ルクスは無意識にため息を吐いていた。

第18話：雨に降られて

マルクスに醜態を晒してしまったあの日から五日が過ぎた。

その間、ミレー又はと言うと部屋へ閉じこもって大人しくいた。また庭師の手伝いなんかしてマルクスに見つかりでもしたら、今度は何を言われるか分からないし、それで傷つくのは自分だ。

だからと言って、このままずっと三ヶ月の間、部屋に閉じこもっている訳にはいかないこともわかってはいるのだが…。

「ミレー又様：差し出がましいでしょうが、部屋に閉じこもってばかり読んでいないで、お庭の散策でもしたらいかですか？」

ミレー又付きの侍女であるクラリスはここ数日部屋にばかりいるミレー又に豪を煮やして発言を試みたのだが、本に集中している彼女はその言葉を聞いてはいなかった。

「ミレー又様！！聞いてますか！？」

「きゃっ！な、なに！？」

突然人影が出来たと思ったら、次の瞬間には本は取り上げられていた。

「ですから…本ばかり読んでいないで、たまにはお庭にでも出で、外の空気でも吸ってはとうですか？」

「あ……そうだったの？ごめんなさい。本が面白くてつい……」

笑顔で答えてみたものの、クラリスは仁王立ちしたまま表情は厳し

い。

彼女は誰に対しても平等な態度をとる。上も下も関係なくだ。それは時として侍女にあるまじき行為をしてしまうのだ。そんな彼女にエルマはオロオロとしていた。

彼女も本当はこんな強硬な態度に出たくは無いのだろう。

そう思うのだが、ミレーヌは部屋の外へ出てマルクスに会ったらどんな顔をすれば良いのか悩んでしまい…。

「とにかく今日の予定はお庭の散策です」

「わ、わかったわ」

力強くそう言われてしまつては嫌とも言えない。

渋々重い腰を持ち上げて庭へと出る。

五日ぶりに出た外はミレーヌの心を移したかのように曇っていた。

今日は朝から用があるとリリーとセレナは不在。

三人で庭を散策しながら話に夢中になってたからか、いつの間にか開けた所に出てきてしまった。

その奥には何やら変わった建物がある。

ミレーヌは二人にあの建物は何かと尋ねた。

「あれは、元王妃様が建てられた温室です」

「元王妃様？」

「はい。御存知なかったですか？今の王妃様は後妻で、マルクス様のお母様でらした元王妃様は十年前にご病気で亡くなってらっしゃいます」

「そうだったの……」

エルマが語った初めて聞く事実ミレーヌの心がチクリと痛んだ。

肉親を亡くすなんてきつと心が痛んだろうと思うとやるせない。

「そう言えば、元王妃様の侍女だった子もそのすぐ後に亡くなられたって……」

「ちよつと……クラリス！」

「えっ？あつ……ごめん……」

クラリスの言う侍女の話に対するエルマの反応が、ミレーヌは気になった。

何かあるのかと問いかけてみても、二人とも押し黙ってしまった。

「ごめんなさい。何か聞いてはいけないことを聞いてしまったかしら？」

「い、いえ……謝らないで下さい。噂でしか聞いたことが無いんで何とも言えないんですけど、その亡くなった侍女とマルクス様は大変仲が良かったとかつて……でも当時勤めてた侍女も、今はほとんどいませんし……この話はちよつとしたタブーになってるんです」

「そうなの……」

マルクスと仲が良かったという侍女の話はとても気になるのだが、そう言われてしまつては突っ込んで話を聞くわけにもいかない。

かと言つてマルクス本人には口が裂けても聞く事は出来ないだろう。

なんだか微妙な空気が流れてしまった。

どうにかしなければと思えば思うほど、頭が働かない。

丁度その時ポツリと何かが頬に当たった。

(……………?)

ミレーヌが上を見上げた次の瞬間、大粒の雨がざあーっと降ってきた。

「やだ！雨だわー！」

「ミレーヌ様！ここからだとお部屋までは遠いので、とりあえず中央塔の回廊まで走りましょう！」

「え、ええ」

そう言うと三人は急いで中央塔まで走った。

中央塔までの距離はそんなになかったのだが、土砂降りの雨にうたれてしまい全員ずぶ濡れた。

いくら日中は暖かいとはいえ、水を吸ったドレスは重いし冷たかった。

「皆濡れてしまったわね……」

「申し訳ありません。私が庭の散策にでもだなんて言ったから……」

「ううん、気にしないで。久しぶりの外はやっぱり良かったわ」

ポケットの中に入れていた刺繍入りのハンカチはかるうじて濡れていなかった。

それで顔や髪の毛を拭いていると正面からマルクスがダラスを従えて歩いてくるのが目に入り、ミレーヌはピタリと手を止め固まった。ゆっくりと歩いてきたマルクスはミレーヌの前まで来ると立ち止まった。

「……なぜ、濡れてるんだ？」

「そ、それはお庭を散策していたら雨が……」

ミレーヌが答えようとすると、隣に居たクラリスが先に口を開いた。彼女の発言にマルクスはチラリと外へ視線を向けたと思うとすぐに

ミレーヌに戻した。

「…寒いのか？」

「え？」

「震えてる…」

そう指摘されて初めて自分が震えている事に気が付いた。
自覚すると余計に寒く感じる。

どうにか震えを沈めようと無意識に腕をさすっていると突然何かに包まれた。

「それを羽織って行くといい。ダラス行くぞ」

「は、はい…ミレーヌ様、風邪など引かないように気を付けてくださいね。もちろん後ろの二人も…では」

ダラスはそう言うと共にスタスタと歩いて行ったマルクスを追いかけるように去って行った。

呆然と二人の後姿を見つめていたミレーヌはハッとして自分を包み込んでいるものに視線を向けた。

そこには上等そうな、きめ細やかな刺繍が施してあるマント。

「あ…これ…」

そう…自分を包み込んでいた物はマルクスのマントだった。
みるみるうちにミレーヌの顔に赤みが増す。

嬉しいやら恥ずかしいやら…。

「私、マルクス様があんな事するの初めて見ました…」

クラリスがぼつりと呟いた。

それにエルマが同意するかのように頷いた。

「あっ！！」

「ど、どうかされましたか？ミレーヌ様」

「お礼を言うの忘れちゃった…」

「言われてみれば…まあ…でもお礼は後からするとして、ここはとりえずダラス様が言うように急いで部屋へ戻りましょう。風邪を引いてしまいます」

「そ、そうね…」

確かにこのままここにおいても風邪を引いてしまう。

三人は早足で部屋へと向かうのだった。

第19話：逃げ出したミレーヌ

「ミレーヌ様、どうされたんですか？」

部屋へ戻る途中にセレナにバツタリ出くわした。

彼女はミレーヌの姿を見つけると駆け寄って来た。

髪の毛からは雫がポタポタと垂れ、男物のマントを羽織っているのを見て何とも言い難い顔をしている。

「それが…庭に出たら雨に降られてしまって…今部屋へ戻る所なの」
「そうだったんですか。でも、部屋へ戻るよりそのまま風呂へ入られた方がいいかと…ミレーヌ様は私とこのまま浴場まで行きましよう」

「え？でも…私だけ行くのは…」

「大丈夫ですよ。エルマとクラリスも侍女用の浴場へ行って、温まって来た方がいいでしょうし」

確かにセレナの言う通り部屋へ戻るよりこのままお風呂に入って身体を温めた方がいいかもしれない。

自分も寒いことから、きつと二人も寒いはずだ。

「そうね。二人ともそうした方がいいかもね」

「…そうしょうか？エルマ」

クラリスはエルマにそう問い掛けると「では、これで失礼します。また後で」と言っって別の道へと去って行った。

「では、参りましょうか？」

「ええ」

二人になったセレナとミレーヌは浴場へと向かったのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

夕食も食べ終わり、夜着に着替えたミレーヌはベッドの中に入り、
昼間クラリスに取り上げられた本を読んでいた。

目は字を追ってはいえるものの、内容は全くと言って良いほど頭に入
ってきけてはいなかった。

さつきから別な事が頭を過ぎる。

読む事を諦めて視線を本からベット脇に置いてある長椅子へと移し
た。

そこにはマルクスのマントが折りたたまれて置いてある。

今日のマルクスはやけに優しかった。

思い出ただけで口元が緩んでしまう。

だが、それを払拭するかのように頭を左右に振って邪な考えを追い
払う。

ちよっとマントを貸してくれただけで、変に勘違いして期待なんか
したら後で傷つくのは自分だ。

マルクスはただ、ミレーヌを見て寒そうだったから…理由はそれだ
けだ。

(でも…)

考えは堂々巡り。

期待する自分とそんな期待はしちゃダメだという自分が心の中でせ

めぎあう。

いつまでもこんな事を考えていては眠るに眠れない。

とりあえず、明日はあのマントを持ってお礼を言いに行こう。
会う口実が出来た事を喜ぶべきか否か…。

（とにかく早く寝なきゃ…）

ただ字を追っていただけの本を閉じるとベット脇の棚に置き、ミレー又は布団の中に潜ると瞼を閉じた。

あれだけ色々と考えて眠れそうもなかったと言うのに、少し心の整理が出来たからか数分も経たないうちに規則正しい寝息をたててミレー又は眠りについていた――――。

次の日、ミレー又は朝食を取ると早速マントを抱えて部屋を出た。
行き先はもちろんマルクスが居るであろう執務室だ。

一度訪れているので迷うことなく辿り着いた。

そこまでは良かったのだが、いざ部屋へ入るのを躊躇してしまう。
前回ここでマルクスと対峙した時の事を思い出すと…どうしても扉をノックする手が上げられないのだ。

そんなミレー又には、扉の左右に立っていた護衛が不審な目を向けてくる。

いよいよ不審な視線を寄越す護衛に何か言われる前に、ミレー又は一度深呼吸をすると扉をノックした。

緊張がピークに達する。

だが、いつまで経っても扉が開くどころか返事すら無い。

（居ないのかしら…？）

それなら護衛の人が最初からそう言うはず。

何も言わないという事はきつと中に誰か居るはずだ。

もう一度ノックしようとして手を上げようとしたところで突然扉が何の前触れも無く開いた。

「誰だ？」

扉を開けたのはマルクスだった。

突然開いた扉にだけではなく、マルクスが自ら出てきた事にビックリしてしまった。

「何の用だ？」

「え、えーと…」

「悪いが、忙しいんだ。早く用件を…」

いきなりの事に頭が真っ白になってしまっていたミレーヌは、自分が何をしに来たのか視線を下に向けた時に思い出し、マルクスの言葉を遮った。

「あ、あの！これを返しに来たんです！」

「は？」

そう言っただ事に抱えていたマントを差し出す。

いきなり突き出されたマントに目を丸くしたマルクスは「あ、ああ…」と言っただけで受け取った。

「それと…ありがとうございました」

「……別に礼を言う程の事じゃない……」

「いえ。でも、嬉しかったです」

思わず言ってしまった気持ちに顔があつと赤くなるのが分かった。急に恥ずかしくなったミレーヌは「お忙しい時にごめんなさい……わたくしはこれで……」と言っただけ言っつてその場を一目散に逃げ出した。

「あつ、おい！」

後ろではマルクスが引き止めていたのも気づかずに……。

そして……

いきなり「ぜえ、はあ」と息を切らしながら部屋に飛び込んで来たミレーヌに侍女たちは首を傾げたのだった。

第20話：予想外の訪問者

橋の修繕に関する報告書を読んでいると不意に扉を叩く音が聞こえた。

この執務室へは事前に申請などしてからでないとはやって来ない。そうでなければダラスか父か？だが彼らはノックなどしない。

そもそもこんな朝早くに訪問してくるなんて…。護衛の者も立っているはずだ。

（誰だ？一体…）

出るかどうか迷った挙句結局扉を開けて出る事にした。

少し時間が掛かってしまったから、もしかしたら相手はもう居ないかもしれない。

その場合は誰が着たのか護衛に聞こうと思った。

「誰だ？」そう言いながら扉を開けた先に立っていた人物…ミレー又だった事に少し驚いてしまった。

彼女は侍女も従えず一人でやって来たようだった。

「何の用だ？」

「え、えーと…」

「悪いが、忙しいんだ。早く用件を…」

急かす様にそう言つとミレー又は突然視線を下にやったかと思うと「あ、あの！これを返しに来たんです！」と言つていきなり手に持

つっていた物を突き出してきた。

「は？」

よく見るとそれは昨日ミレーヌに渡したマントだった。

「あ、ああ……」

やっとミレーヌが何をしに来たのかわかった。

昨日は朝からいつ雨が降ってもおかしくない天気だった。

父の執務室から自分の部屋へ戻る途中、廊下に居たミレーヌが目に入った。

本当はそのまま通り過ぎようと思っていたのに、何故か足は勝手にミレーヌの方へと動いていた。

目の前までやってくると、ミレーヌの体が濡れている事に気が付いた。

指摘すると、彼女ではなく、その隣にいた侍女が雨に濡れたと答えた。

視線を外に移すと確かに雨が降っていた。

よく見れば震えて寒そうだった…。

「それを羽織って行くといい」

そう言ってミレーヌ身体に自分のマントで包むように渡している自分が居たのだ。

何故こんな事を…そう思ってもすでに遅い。

ここ最近の自分の行動には疑問だらけだ。

「あと…ありがとうございました」

昨日の事を思い返していると彼女は礼を言った。

「……別に礼を言う程の事じゃない……」

「いえ。でも、嬉しかったです」

嬉しかった……今、そう言わなかったか？

それはどういう事かと問いただそうと思ったところで彼女は逃げ出した。

駆けていく彼女の背に向かって急いで声を掛けたが、一度も振り返りはしなかった。

ミレーヌが去って行ってすぐに、ダラスが首を傾げながら執務室へと入ってきた。

どうしたと問えば彼はこう言った。

「今、ミレーヌ様とすれ違ったのですが、なんだか急いでいる様子で……何かあったんでしょうか？」

「さあ……？」

マルクスは知らない振りをしてみたのだが、ダラスは何か感づいているんじゃないかと思った。

まあ、別に知られたからといって何かがあるわけじゃないが……。

書類に視線を戻し、字を目で追っていると突然ダラスが話し掛けてきた。

「そうそう、時間の調整がやっと整いました」

「……………」

「侍女のリリーとは明日午後、ミレーヌ様との食事は三日後の夜で

す」

「なあ…侍女はまあ良いとして……ミレーヌとの食事はしなきゃダメなのか？」

「何を今更言ってるんですか？先ほどあちらの侍女にも伝えてきちやいましたよ」

「…そうか…」

相手側に言ってしまったのなら仕方ないが、今からでも食事をなかった事にしたいのが本音だ。

（まあ、どうにかなるさ…）

心の中でそう呟くと食事の事は頭から追いやって仕事に没頭する事にした。

そして、その食事の席で彼の運命は変わっていくことになるとは知らず――――。

第21話：矛盾する考え

次の日、約束通りにリリーは午後やって来た。

「そこに座りなさい」

「はい…」

応接用の椅子にお互い向かい合って座った所で、ダラスは部屋を出て行った。

「お話とは何でしょうか？」

「決まっているだろう、私たちの縁談の話だ」

そう言うとりリーは困ったような微妙な顔つきになった。その表情から彼女はこの縁談が乗り気でない事は一目瞭然。アリスが勝手にこの話を進めているんだろうと思った。

「お前がこの縁談についてどう思っているのか聞きたい」

「私は…その…」

「アリスに何か口止めでもされているのか？」

「えっ？ い、いえ…その様な事は…」

「なら、言える筈だろう？」

リリーは少し黙ってそれからぼつりぼつりと話し始めた。

「縁談については正直申し上げると…したくありません。ミレーヌ様を裏切りたくありませんし、ですが…叔母…アリス様のいう事に逆らう事も出来ない私は最低な人間だと思います」

「……………」

「あの人は自分の地位や名譽の為なら何でもするでしょう…例えばミレー又様に危害を加える事も…」

「……そうだろうな…」

彼女はマルクスが同意した事に驚いたようだった。

それまで俯かせていた顔を上げマルクスを見つめてきた。

「お前は知っているか？かつてあの女がした事を…」

「え……？」

「まあ…知らなくて当然だな…その当時この城で働いていた者はほとんど残っては居ないし…」

「それは…どういふ…」

「今はまだ言えないが、あの女はきっと今回の事でも何か企んでいるに違いない」

「企むて…一体何を？」

「それは分からないが、俺に君との縁談を持ちかけてきた意味も分からない。何か良からぬ事を考えているとしか考えられない」

「…良く分かりませんが、マルクス様は…ミレー又様との事を利用したいという事ですか？」

利用したいのか…そう言われるとは思っていなかった。

確かに今回の事でもしかしたらあの女をどうにか出来るのでは無いかと考えた。

しかし、それでは何の関係も無いミレー又を巻き込んでしまう事になる。

だが…

「そうだな…利用…したいのかもしれない…」

「ミレー又様は私とマルクス様の縁談が持ち上がっている事も何も知りません。それに、マルクス様のことはきつと…」

「……………きつと？」

「いえ…何でもありません」

さて、どうするか…。

利用はしたいが、結婚はしたくない。

これでは矛盾だらけだ。

「あの…ミレーヌ様に正直に話してみてはいかがです？」

「ミレーヌに？」

「はい。何もかもを知らないままと言っるのはどうにもならないかと

…」

「……………」

「私が、ミレーヌ様の立場なら嫌だと思います」

「……嫌…か…」

「私はミレーヌ様ではないのでどう思っかは分かりませんが…」

「……………」

「私も……今はアリス様に何も言えず従ってはいますが、あくまでもミレーヌ様の侍女で…彼女の味方でありたいと思っています」

「そうか…」

マルクスは顎に手をやり考え込んだ。

ミレーヌにすべてを話す……………。

そうすると、マルクスの過去もすべて話さないとならないだろうか？

これは、誰にも知られず一人で抱えてきた問題。

それを彼女に知られる事が果たして良いことなのか…？

しかし、何も知らないではどうにもならないのは確かだとも思っ。

丁度明後日ミレーヌと食事する事になっている。

その時に人払いをして…。

「明後日、ミレーヌと食事するのだが…」

「では、その時に？」

「ああ…彼女がどう出るのか分からないが…一か八かだ」

- - - - -

リリーが部屋から去って行ってしばらくすると、マルクスは一人でアリスの自室へと赴いた。

「あらマルクス…どうしたのかしら？やっぱり気でも変わってリリーとの縁談でもする気にでもなった？」

クスクスと嫌な笑いを漏らすアリスをマルクスは無表情で見つめた。

「…いえ、そんな気は更々ありません。それに、先ほどリリー本人にも確認しましたが、彼女も縁談を進める気はないそうです」

もつと違う反応を示すと思っていたアリスは「ふーん、……そう…」
と言うだけだった。

一体何を考えているのか分からず、マルクスは眉に皺を寄せた。
そんな彼をアリスは一瞥すると口を開いた。

「で？あれだけ否定してたんだから、あの女とは縁談を進めたいだ
なんて今更言わないわよねえ？」

「……………」

アリスはじつとマルクスを見つめた後「まあ、いいわ……………それよ

り、わたくし疲れてるの。休みたいから早く出て行ってちょうだい」と気だるげに手をしっしつと振った。

結局マルクスが何も答えなかった事をどう捉えたのかはわからないまま部屋から追い出された。

とりあえず、アリスが今の話を聞いてどう出るだろうか？

それも気になったが、まずは明後日ミレーヌにどのように話を切り出すべきなのか思考を切り替えた。

第22話：食事会〔1〕

「マルクス様とお食事？」

上がった息を整えて落ち着いてきたところで、それを見計らったかのようにセレナが話し掛けてきた。

「はい。先ほどダラス様がこちらにいらっしゃって…三日後の夜だそうです」

「そ、そう…わかったわ…」

今日でなくて、三日後というのがせめてもの救い。

思わず言ってしまった言葉を彼は忘れてくれてるといいんだけど…でも、何でまた急に食事をする事になったのだろうか？

理由はどうあれ、一緒に食事できる事は嬉しかった。

「今からお召し物をどうするか決めましょう！」

「え？今から！？」

「そうですよ！せっかくのお誘いですよ？ここは殿下をぎゃふんと言わせましょう！」

「…うつ…」

何故か気合入りまくりのセレナ。

それに便乗してクラリスまで参戦し、ドレスはこれだのアクセサリはあれだの言い出した。

エルマは対照的に落ち着いた様子で二人の選んだ物を指摘している。ミレーヌはもちろん蚊帳の外だ。

呆れながらそれを遠巻きに見ていてふと気が付いた。

「あれ？リリーは？」

「え…先ほど洗濯物を持って出て行きましたよ」

「うん」

「何かあるんですか？」

「ううん、最近顔を見てない気がする……」

今頃気が付くなんて…。

（これじゃ、主人失格ね…）

[illegible]

朝から着せ替え人形のようにされていたミレー又は疲れきっていた。どんな事を話そうとか考えている余裕すらなかった。

ただ食事をするだけなのに……そんな思いすら抱いたほどだ。

ボソリとそれを言ってしまった。為に説教までされてしまった。

「ねえ、本当に食事するだけなのにこんなに着飾っておかしいんじゃないかしら？」

最後の足掻きと、遠慮がちにそう言つては見たものの、セレナとク
リスにすごい勢いで睨まれた。

そんな様子をリリーとエルマは眺めているだけで助けようとはしてくれない。

いよいよ諦めるしかなかったミレー又はため息を吐き出して立ち上がった。

その姿をみて満足しているのはやはり二人だけ。

しきりに「いいですねー」「やっぱりこれだわ！」などと言って頷き合っている。

今日二人に着せられた物は、赤いマーメイドタイプのドレス。

大胆に開いた胸元がとても恥ずかしいっらない。

それに合わせる様に、首元にはこれまた大きな赤い宝石のついたネックレス。

髪の毛は何十にも編みこみ結び上げたセレナが言うには最高傑作なんだとか。

その他ジャラジャラとブレスレットやらイヤリングなど、これではとても食事も喉に通りそうに無い。

「では、参りましょうか」

そう言うて向かった先は何十人も一緒に食事できそうなくらい広い部屋だった。

どうやら先に来てしまったようでマルクスは居なかった。

通された席に着席すると、すぐに配膳係が色々と並べていく。

ぼーっとそんな様子を眺めていると、「マルクス様が参りました」と声を掛けてきた。

その言葉にハッと我に返ると急いで立ち上がりドキドキしながらマルクスを出迎えた。

部屋へ入ってきた彼の姿はいつもの格好をしていて、余計恥ずかしさが増した。

（やっぱり、こんな格好するんじゃないかった！）

そう思っても”今から着替えるのでちょっと失礼します”だなんていえる空気ではない。

どうしようと考えている間にも、マルクスはさっさと席へと着席していた。

「……どうぞ、座って…」

「は、はい…」

向かい側に座ったマルクスは腕を組んで何やら考え事をしているようだった。

表情もなんだか厳しい。

やっぱり、別に食事なんてしたくなかったんだという思いが胸に突き刺さる。

「本日はお招きいただきましてありがとうございます」

「あ、ああ…」

勇気を振り絞って述べた感謝の言葉にも彼は上の空。

次々と運ばれてくる食事を黙々と食べている感じで、会話もほとんど無かった。

これでは一人で食べているのと変わらない。

話しかけようにも、何と声を掛けていいのか分からず、結局ミレーヌも黙々と食べ物を口に運ぶしかなかった。

食事も終盤に差し掛かったところで突然マルクスが口を開いた。

「ちょっと話がある…」

まさか話しかけられるとは思っていなかったミレーヌは、口に運ぼうとしていた物を危うく落としそうになった。

しかも、話とは何なのか？

もしかしてさっさと国に帰れと言われてしまうのだろうか？

どう考えても頭の中には悪いことしか浮かばない。

その間にも、彼は配膳係やその他付き添っていた者達を部屋の外へと促し、ついに広い部屋で二人つきりになってしまった。

ミレーヌは高鳴る鼓動を抑え、持っていたナイフとフォークをカチヤリとテーブルに戻すとマルクスを見据え言葉を待った。

話があると言ったのに、黙り込んでいるマルクスに不安がどんどん増していく。

手に汗が滲み、喉がカラカラになってきた。

彼は一体どうしたのだろうか？

心配になってきた所でついに彼は口を開いた。

「話というのは…これからの事で…」

「は、はい」

「今から言うことは他言無用にして欲しい」

「え？」

「約束できるか？」

他言無用、約束？それはどういう事だろうか？

どう受け止めていいのか迷っていると、真剣な表情をしたマルクスがもう一度言った。

ミレーヌは静かに頷いた。

「今の王妃は後妻だという事は知っているか？」

「…？はい。つい先日侍女の者に聞きました」

「では、前の王妃の事は？」

「亡くなったという事だけで…く、詳しいことは…知りません」

なんだかよく分からない方向に話が進んでいる気がする。

何故、今そんな話をするのだろうか？

そう心の中で考えていると、マルクスは衝撃的な一言を口にした。

「そうか…では単刀直入に言おう。俺の母は…現王妃に殺されたと考えている」

「えっ！？」

「そして今回の縁談に関しても何か考えている節がある…そこで君に頼みたいことが…」

只でさえ殺されただなんて衝撃的な話を聞いて混乱しているというのに、今度は頼みごと？

一体何を頼みたいというのか？

そこでまたマルクスは黙り込んでしまった。

「頼みとは…なんです？」

「……こんなことを頼める立場でないのは十分理解しているつもりだ。一度は君を拒否した身…だが…」

「……………」

「俺と結婚する事にして欲しい…」

「え………？結婚……？」

「ああ…実際に結婚するわけではない。ただ、周りにそう思わせた
い」

その言葉を聴いた瞬間、悲しみより何よりも怒りがミレーヌの心に
広がり思わず立ち上がった。

第23話：食事会「2」

「事情はよく分かりました。それで…結婚することにして、どうなさりたいんですか？」

ミレー又は拳を握り締め、彼を睨み付けた。

マルクスは睨みにも怯むことなく真っ直ぐにミレー又を見つめ返していた。

「それは…こちらの件が解決したら、それ相応の物を贈らせてもらいますよ…」

（この人は何も分かってない！！）

「あなたは…わたくしが何かを…欲しがっているとしても？どうして…？わたくしは何かが欲しいわけではないわ！！」

そう言うと同時にミレー又の瞳から涙が零れ落ちていた。

泣くつもりなんてこれっぽっちも無かった。

悲しさより腹立たしさが胸に広がっていたはずなのに…。

必死に止めようと思えば思うほど決壊したダムのようにボロボロとこぼれてくる涙を拭うことも出来なかった。

一方マルクスはというと、突然泣き出したミレー又を冷めた目で見れずにいた。

今まで、どんなに酷いことを言おうとも涙一つ見せなかったというのに…。

（やはり女は泣けばいいと思っているのか？）

一体何が悪かったのか？

そんなこと考えなくても他の人なら当然分かることが、マルクスには分かっていたいなかった。

「なら、どうしろと言っただ？」

「どうしろって…！」

「こちらは、言いたくもないことまで言っただ！それに、こうして頭を下げて頼んでいると言っのに！」

「そんな…あんまりだわ…」

そうして黙り込んでしまったミレーヌにマルクスは苛立ちを隠せなかった。

だが、ここで更に腹を立てては話にならない。

彼はとりあえず気持ちを落ち着かせようと目の前の水を一気に飲み干すと、ため息を吐き出し口を開いた。

「このまま話をしても、仕方ないようだな…」

「……………」

「……とりあえず、泣き止むんだ」

そう言っただけマルクスはハンカチを取り出すとミレーヌに差し出した。初め受け取る気配を見せない彼女だったが、マルクスが辛抱強く受け取るのを待っているとおずおずとハンカチをその手に収めた。

「俺は先に出るが、君は落ち着くまでここにいるといい。また別の日に話の場を設ける事にする。その時までを考えておいてほしい」

未だ黙って俯いている彼女にそう話しかけるとマルクスは部屋を出

て行った。

（もう！馬鹿あ…何で泣いたりしたのよ…）

一人つきりになった部屋でミレーヌは自分を悔やんでいた。

マルクスの前で涙を見せるなんて事だけはしたくなかったというのに…。

その上、マルクスの優しさをまたしても垣間見てしまって、どうしても彼を憎みきれずにいた。

マルクスから受け取ったハンカチで涙を拭っていると、しばらくして扉を叩く音が耳に入ってきた。

今は誰にも会いたくはないのだが、きっと皿とかを色々片しに来たんだろう。

ちよっと目は赤いかもしれないが仕方ない。

「どうぞ…お入りなさい」

そう声を掛けると扉が開き中へ入ってきたのは、リリーだった。

駆け足でそばへとやって来たリリーは、ミレーヌの顔を見て何故かくしゃりと顔を歪めた。

「ミレーヌ様…」とぼそりとつぶやいたと思ったら黙り込んでしまった。

どうしたのかと問いかけてみてもリリーは俯いて涙を堪えている様だった。

普段何があっても涙を見せない彼女が泣くほどの事だ…。

何かあったのだろうか？と段々心配し始めた時だった。

「ミレー又様…申し訳ありません…！」

「ちよつと…いきなりどうしたと言つの一？」

突然頭を下げて自分に向けて謝つてきた事に驚き、思わず腰を上げ彼女の肩に手を掛けた。

するとリリーは顔を上げ涙にぬれた瞳を真つ直ぐミレー又に向けた。彼女は意を決したように口を開き、「私…ミレー又様に黙っていたことがあるんです…」そう言った後は信じがたい事実を次々と告げられたのだつた――。

「てことは…マルクス様があんな事を言い出したのはリリーが原因だつたつて事？しかも…アリス様に脅されてマルクス様との縁談を断りきれ無かつたつて…一体何がどうなっているのよ？」

リリーから語られる事すべてが嘘であつて欲しいと思わずにはいられないような内容ばかりで頭が痛くなつてきた。

だが、リリーの眼差しは真剣そのもので、嘘をついているようには思えない。

別に事情が事情だけに彼女が謝る事では無いだろう。

それに一つ確認したかつた。

「あなたはマルクス様と結婚したくはないの？」

本当はそんな事聞きたくないのが心情なのだが…。

でも、そう言う訳にもいかない。

ここはきつちりと聞いておかなければならぬ大切な事だと思つた。なんて答えるのか。もし結婚したいと言つたら…自分は…身を引い

てしまうかもしれない…。

「そんな！ミレー又様を差し置いてそんな事できません！」

「でも…」

「いいですか？私はマルクス様の事はなんとも思っていないませんし…それにミレー又様にこそ幸せになって欲しいんです。だけど…王妃様に逆らうことも出来ないなんて…本当に情けないです」

「リリー…」

またしても肩を落としてしまったリリーに胸が苦しくなってきた、どう声を掛けていいのかわからなかった。

だが、リリーの答えを聞いてホッとしている自分も居た。

それにしても…王妃様ってとんでもない人だ！

マルクス様の母親を本当に殺してしまったのかは分からないが、リリーを何かで脅しているのは事実だ。

もともと責任感の強いミレー又は段々王妃様のことが許せなくなってきた。

自分の利益のためだけにそんな事をするだなんて…。

自分はどうするべきか？

この城へやってきた本来の目的とは少々ずれてしまうかもしれないが、ここはリリーの為…はたまたマルクスの為に自分は…。

「決めた！私、マルクス様の言う通りにしようと思うわ」

「えっ！？でも、それじゃ…ミレー又様は…」

「そうね…もう気が付いているかもしれないけど、わたくし彼のことが好きなの。だから、結婚してくれじゃなくて、結婚することにしてくだなんて言われた時はとても腹が立つやら悲しいやら訳が分からなくなってしまうたけれど…」

「だったら…そんな事受け入れてしまつては…」

「そうねえ、結婚もしないで国に出戻りなんて事になっちゃうかもしれないわね…」

「……………」

「でも、少しの間だけでも彼のそばに居れるなら…この際…」

（結婚できなかったとしても…）

自分にとつてはとても悲しい選択になるかもしれないが、それでも大切な人の悲しむ顔なんてこれ以上見たくはなかった。

第24話：鈍感なマルクス

マルクスは自室へ戻るつもりだったが、その途中進路を変え執務室へとやって来ていた。

今の所急ぎの仕事などないのだが…。

扉を開けると、ダラスが背を向けて長いすに座っていた。

何やら集中していて、人が入ってきたことにも気が付いていないようだ。

「何をしてるんだ？」

後ろから急に声を掛けたからか、ダラスは慌てて振り向いた。

「あ、ああ…マルクス様でしたか…」

「おいおい、護衛でもあるお前が人の気配に気が付かないなんてある意味死活問題だぞ？」

「すいません、ちょっと問題が起こりまして」

「問題？」

「ええ、例の橋のことなんです…つい先日貿易商の一行がその橋を通る時にどうやら一部が崩れ怪我をしたそうなんです。これが報告書です」

渡された書類に一通り目を通すと、確かに負傷者有りと書かれていた。

「これは一刻も早く修繕しなくては不都合にもなりかねないかと…」
「そうだな…」

本当なら本腰を入れて取り組まなくてはならないと言うのに、ミレ

「又の事もどうかしなくてはならないのだ。

「そう言えば、ミレーヌ様との食事はどうだったんです？」

「ああ…それなんだが…」

マルクスは食事の後に話し合ったことをダラスに教えるべきか迷った。

ダラスは自分の身近にいる人間の中でも一番信頼している人物だ。彼が自分を裏切ることはないとは思っただが…。

マルクスは迷った挙句、彼にすべてを話す事にした。

もはや自分一人ではどうにかできる問題でもないような気がしたからだ。

「実は、お前に黙ってた事がある」

「……？何を黙っていたというんです？」

「俺の母親の事だ…」

「…前王妃様？それって…まさか！？」

ダラスは前王妃が亡くなった時周りの者に異議を唱えていた。

皆は病死と信じて疑わなかったのだが、ダラスは何かがおかしいと思ひ必死に訴えたのだが、誰も取り合ってはくれなかった。

もちろん息子であるマルクスにも掛け合ったが、当時の彼は誰の話も聞きたくないと部屋へ閉じこもってしまい話を出来るような状態ではなく結局うやむやになってしまい今日まで至ってしまったのだった。

「……？お前何か知っていたのか？」

母親…前王妃についてダラスと何か話した覚えの無いマルクスにと

って、彼の反応にはいささか疑問を感じた。

「知っていると云うか…前王妃様がお亡くなりになった時、私は何かがおかしいと周りの者に色々掛け合っただのですが、誰一人として聞いてくれる者はいませんでした。もちろん、マルクス様にもお話をしなくてはと思っていたのですが、当時のあなたは何ヶ月も部屋へ籠ってしまっていたので結局うやむやに…」

マルクスは一人で母親の事に関して悩んできた事を今更ながら後悔した。

まさか彼がそんな事を思っていたとは考えもしなかった。

「そうか…ずっと俺だけだと思っていた…」

そう言うとマルクスは鍵が付いたネックスを首元から外すと、あの棚の引き出しの一つに鍵を差し込むとそれを回す。

引き出しを開け、中に入っていた物を取り出すと、ダラスに差し出した。

「これは？」

「ユーリの日記だ」

「？」

「この日記の最後の方に、母の事が書いてある」

「えっ!？」と驚いた声を出したかと思うと、ダラスは急いで手渡された日記のページをめくり始めた。

そして問題のページを見つけると更に驚愕とした顔つきになった。

「こ、これは…本当ですか？」

「ああ。俺はそう思って誰の目にも触れぬよう保管してきた。下手

にバレたらまずい事になりそうだったからな」

「やはり…前王妃様は病死などではなく……この、ある方って誰でしょう？」

「俺は現王妃、アリスだと考えている」

「え！？」

「だが、確たる証拠が無く、憶測でしかないのだが…」

「まあ…前王妃様がお亡くなりになってからのアリス様は更に積極的ではあったようですが…で、ミレーヌ様はどうなったんですか？」

ミレーヌの事を聞いたのに、前王妃の話が出てきてだいぶ話がそれてしまっていたが、それはそれで気になっていた。

「それなんだが…」

マルクスは食事の後にミレーヌに話した内容をダラスに洗いざらい話した。

すると、普段真面目な彼はマルクスの話しにどんどん顔を曇らせ…。

「マルクス様…あなたって人は…」

「何だ！何か文句でもあるのか！？」

「文句というか…ミレーヌ様が何だか不憫に思えてきましたよ」
「はあ！？」

マルクスは自分がミレーヌに対してどんな事を言ったのか思い出してみたが、何で不憫なのかが分からず首を傾げた。

「あのですね？まず、結婚するためにこの国へ来た方に対して、結婚することにくれだなんてかなり失礼な話ですよ？それに、物を贈ればいいってもありませんよ…現にミレーヌ様は物が欲しいわけじゃないとおっしゃったんでしょ？」

「あ、ああ…そうだが…」

「ミレー又様が泣き出したのもきつと…全く…鈍感にもほどがありますよ…」

「なっ！！主人に向かって鈍感だと！？おまえいつからそんなに偉くなっただんだ！」

「まあまあ、ちょっと落ち着いてください…で、本当に分からないんですか？」

「何がだ！」

「もちろん、ミレー又様の気持ちですよ」

（気持ちだと？どんな気持ちが俺に対してあると言っただ！？）

マルクスは自分に分からないことが、ダラスは分かっているみたいな言い方に腹が立った。

「ミレー又様はきつと、あなたの事が好きなんだと思いますよ」

「……………はあ！？」

第24話：鈍感なマルクス（後書き）

次回もよろしくお願いします。

第25話：理解しがたい言葉

「ダラス：冗談も休み休み言え」

「冗談？私は冗談など言いませんよ」

確かに彼は普段から真面目であり冗談を言う男ではない。

だが、今の発言はどうしても信じられなかった。

いや…信じたくなかった。

一方ダラスは「全く頑固というか…なんというか…」と少し呆れていた。

ミレー又はダラスから見ても美しい娘で、少し変わった所はあるが…まあ見劣りするところなどないのだ。

むしろ、今まで一人だったことの方が不思議でならない。

あれだけの美貌なら縁談なんてさぞかし多かっただろうに…。

「とにかく、また改めて話をするから、時間の調整をしてくれないか？」

「まだそんな事を頼もつて言っんですか？それだったらいつその事結婚してしまえば良いのに…それだったらミレー又様も話を聞かかもしれませんよ？」

「…お前まで結婚しろだなんて言うのか」

「そもそも私は反対した覚えはありませんよ？まあ初めは妃選考までして急ぐことはないと思ってましたが…言うなればこれは政略結婚ですよ。そんな事どの国でもやってることじゃないですか？どうしてそこまで頑なに拒否しているんだか分かりませんよ」

「……それは…」

彼だっていつまでも独身を貫こうなどとは考えていない。

ただ、過去に囚われたまま前に進んではいけないような気がするのだ。

今思えば…当時の自分がもつとしっかりしていれば、母もユーリも死を迎えることは無かったのではないかと…。

ユーリの日記を発見し事実を知ったときからもう何年も眠りに付き夢を見れば、初めは自分の隣には歳を重ねたユーリが微笑みながら佇み、それを優しい眼差しで見守る母と父がいる幸せな夢。

だが、その夢は途中で自分を責め醜い顔へ変化していく母とユーリ…まるで、自分だけが幸せになるなんて許せないと言うかのように…。

そして父は勝ち誇った顔をしたアリスへと取って代わり高らかに耳障りな声で笑うのだ。

『私が殺したんじゃない、お前が殺したんだ』と…。

暑くもないのに汗をびっしょりと掻き、飛び起きるともう朝で…熟睡したことなどここ数年でほとんど無い。

それを目の前に居る彼に言った所で何の解決にもならないし、今更と、マルクスは黙り込むしかなかった。

そんな無表情で黙り込むマルクスに何かを感じ取ったのか

「まあ、無理に理由を聞きたいわけでも、結婚しろと言いたいわけでもないですから…あまり気になさらないでください。それよりも…明日にでも私からミレーヌ様に謝罪しておきますから、もうそんな馬鹿な話はなさらないように考え直して下さい」

「…あ…いや、でも…」

「でもは無いです！いいですね？」

「わ、わかったよ」

彼の有無を言わさぬ物言いに反論し損ねたマルクスは渋々頷くことしか出来なかった。

「橋の件も早急に対策を練りたいところですが今日はもう遅いので明日朝一にでも会議を開く事にしましょう。ですからマルクス様も自室に戻って早くお休みになって下さい」

「あ、ああ…そうだな…」

二人で執務室を出て自分の部屋へ向おうとした所で後ろから声を掛けられ足を止めた。

「なんなら部屋までお送りしましょうか？」

「あのな…俺を誰だと思ってる？女子供じゃないんだぞ」

「冗談ですよ」

「……さっき冗談は言わないって言ってたか？」

「あれはあなたが冗談として捕らえたからですよ。私は冗談だとは思ってません」

「はあ…もういい。とにかくあれは聞かなかったことにする…じゃあな」

そう言うマルクスは手をひらひらと振り歩き始めた。

第三者の自分からしてみれば、マルクスは認めたくないだけでミレーヌを気にし始めている事は丸分かりだというのに。

ダラスはそんな彼の背中に向かってボソツと呟いた「過去に囚われてばかりだと本当に大切なものを見失いますよ？」と。

そんな事を言われている事も気づかないマルクスは自分の部屋へ戻りながらダラスに言われたことを考えていた。

彼はミレーヌが自分を好きだから泣き、怒ったのだと言った。

好きだからという部分は理解しがたいが、怒った事だけを取って見

れば何となく理由は分かったような気がした。

あの時の事を冷静に思い返してみれば、すべてを話せば分かってもらえるのではないかと侍女のリリーは言っていた。

にも関わらず、結局自分の都合のいい様にしか話をしていなかったかもしれない。

（…馬鹿だな…俺は…）

はあっ…とため息しか出てこなかった。

第26話：ミレーヌ、マルクスの元へ

翌日、ミレーヌは午後のお茶を飲みながら、いつマルクスに話をしに行こうか考え込んでいた。

（話をするなら早い方がいいに決まっているけど向こうの都合もあるだろうし……。うーん……）

「ミレーヌ様何か悩みでもあるのかしら？」

「朝からずっと上の空というか……どうしたんでしょう？」

「リリーだったら何か知ってるんじゃないかと思ってさりげなく聞いてみたんだけど、逃げられたわ……あれは何か知ってるわね」

朝からずっと、話しかけても返事はするものの何だか様子のおかしいミレーヌにセレナもエルマも何かあったのではないかと思っていた。

それを一番ミレーヌと親しいリリーに聞いてみても困ったように「私にも……」と答えるだけ。

しかも、そそくさと部屋から出て行ったものだから余計何かあったとは思えない。

クラリスなら堂々と本人に聞くのだろうが、今日に限って他へ手伝いに行っている為不在。

二人は直接聞く勇氣もなく、どうしたものか？と思っている所にノックの音が響いた。

「ん？誰かしら？……はい、今開けますね……ってダラス様！？」

「こんにちは……ミレーヌ様にお……」

「はい！どうぞどうぞー！」

滅多に顔を出さない人間がやって来たことでミレーヌの今の様子と何か関係があると踏んだセレナはダラスが最後まで言うのを遮り満面の笑顔で招き入れた。

彼はいきなり腕を引つ張られ困惑気味に部屋へと入ってが、ミレーヌの姿を見た途端…。

「ミレーヌ様、昨日はマルクス様が大変失礼な事を…申し訳ありません！」

開口一番そう言つて頭を下げた。

そんな彼に、ミレーヌは慌てて椅子から立ち上がると駆け寄った。

突然の事態に呆然と見守るしかない侍女二人。

しかし話が見えない…。

彼の話し振りから察するにマルクスが何かしたという事は確かだろうが…。

「あ、あの！どうか頭を上げて下さい」

「いいえ！お許しがいただけるまでは！」

「いや、でも…わたくしはもう怒っています…それにマルクス様のお話をお受けしようと思っっていますから…」

「えっ！？」

まさかあんな話を受けるだなんて言われると思っていなかったダラスは勢いよく顔を上げるとミレーヌを凝視した。

「昨日マルクス様が出て行った後、侍女に色々と聞きました。何かわたくしでもお役に立てるなら…」

「な、何を言っているんですか！？そんなの良くありません！考え直して下さい！」

「いいえ！とにかくもう決めましたから！」

「ですが、それではあなたが…」

「いつお話しようかと考えていたんです。やっぱりマルクス様はお忙しいですよね？」

「いや、まあ……忙しいといえば忙しいんですが……。はあ……いいんですか？」

「いいんです。元々歓迎されてなかったみたいですし？で、今マルクス様はどちらに？これからお会いすることは出来ませんか？」

「こ、これからですか！？」

「ええ。お願いします。さあ、参りましょう」

いきなり「会わせてくれ」と言われ困惑するダラスを伴うと、ミレー又は部屋から出て行った。

ポカーンとして二人のやり取りを見守っていた、侍女達は「ねえ……今の一体何の話？」と首を傾げていた。

- - - - -

「ミレー又を連れて来た？」

「はい。今すぐにもお会いしたいと……」

「なら、通せ」

昨日の今日で会いたいと言われるとは思わなかった。

寧ろ避けられてもおかしくは無い事を自分はしたというのに……。

ダラスはすぐに廊下へ続く扉を開けるとミレー又を執務室へと招き入れた。

ミレー又は堂々とマルクスの前にやって来たかと思うと、腰に手を

当て仁王立ちをすると声を張り上げた。

「あなたの言う昨日のお話、お受けいたします!!」
「……………は？」

いきなりの事で思考が停止したマルクスは間抜け顔とも取れる表情をして固まった。

こんな主人の姿を初めて目にしたダラスは、一瞬噴出しそうになり必死で口元を押さえ耐えて居たのだが、次のミレーヌの言葉には耐え切れなかった。

「マルクス様、王妃様をとっちめてやりましょう!!」

「ぶはっ!!ミ、ミレーヌ様…いきなり何を…くっ…」

「……………」

「あら、なんで笑うの？」

「…ちよっ…本気で言ってるんですか？」

「え、何が？」

「何がって…」

二人はマルクスが一言も発言していないことに気が付ずに言い争いのようなものを繰り返していた。

ミレーヌの「王妃様をとっちめてやりましょう」発言にはマルクスも正直度肝を抜かれた。

こんな事を言う、姫…いや、女には初めて会った。

まして、普段笑みすら殆ど見せないダラスを笑わせるなんて。

まあ…半分は自分が間抜け顔を晒したつてもあるかもしれないが…。

(面白い…なんちゅう女だ…)

「ぶっ…あはははは!!」

いきなり笑い出したマルクスに、言い争いをピタリと止めた二人がぎよっとした顔でこちらを振り返った。

「な…なんだ？」

「い、いえ…マルクス様が笑うのなんて初めて…」

「は？何を言っている。ダラス…お前こそ普段笑わないくせに笑ってたまる？」

「それは…まあ…そうですね」

「俺だって面白ければ笑うさ」

そんなやり取りの中、ミレー又はマルクスの笑顔に釘付けだった。

いつも無表情の人が笑うと破壊的威力を発するんじゃないだろうか？それが好きな人ならなお更…。

自分がその笑顔を引き出したのだと思うとミレー又の胸は張り裂けそうなほど嬉しさでいっぱいだった。

第26話：ミレーヌ、マルクスの元へ（後書き）

26話、何度も修正してすみません。
次回もよろしく願います。

第27話：謝罪と感謝

「アリス様、先ほどあの姫がマルクス様に接触しました」

優雅に紅茶を飲んでいたアリスは口に運ぼうとしていたカップをピタリと止めて報告にやって来た使いの者に鋭い目線を送った。

「それで？」

目線と同様冷たい声で目の前に居る男に先を促すと、彼はそれに怯むことなく報告を続けた。

一通り聞き終えたアリスは拳をわなわなと震わせながら立ち上がり、足元に跪く男をこれでもかと睨み付けた。

「こしゃくな真似を……」

「……………」

「どうしてくれるかしら？」

「……では、やはり……」

アリスを見つめ、男は“まるで悪魔のようだ”と心の中で呟いた。

それほどまでに、アリスはイライラしていた。

夫であるアレクの気持ちが一番最近離れている気がしてならない。

表面上は変わらない風を装っているが、他の側室の元へ夜な夜な通っているのを侍女が目撃している。

その上これまでは、どんなに意見をしてても何も言わなかったのに、ここ数ヶ月前からは口出し無用とばかりに全く話をしてくれず、取り合ってはくれなくなったのだ。

もちろん、息子であるマルクスの事となると余計だった。

その苛立ちをミレーヌへと向けることでアリスの精神はギリギリ保たれていと言っても過言ではなかった。

「そうね…まずは脅しを掛けなさい。それでも引かないようだったらその時は…わかつているわね？」

「……はい。承知いたしました」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その頃、三人はというとマルクスの寝室へと移動していた。

ミレーヌは初めて男性の寝室、しかもマルクスの寝室に足を踏み入れたのだと思うと、どうしても落ち着けず手に汗まで掻くほど緊張していた。

そんなミレーヌに気が付くこともなく男二人はさつさとベッド脇に置かれた椅子に座り込むと口を開いた。

「ここなら誰も話を聞く事は出来ないだろう…」

「ええ。まさかこんなにも簡単に引つ掛かってくるなんて」

「???ど、どういうことでしょうか？」

二人の会話が一体何の事なのかわからないミレーヌは動揺を隠せない。

「アリス様です」

「??」

「さっきの会話を王妃の使いの者に聞いてもらってた」

「使いの者?それって?」

「マルクス様：それだけだとミレーヌ様はわからないと思います
が……」
「ならどう言えばいいんだ？」

首を傾げるばかりのミレーヌにダラスが説明する。

「今朝、あなたに謝りに行くと言っていた私に、マルクス様はいつか気が変わってミレーヌ様が話に乗る事があれば、いつでもいいので執務室に連れて来るように言われていたんです」

「えっ……そ、そうだったんですか……？」

「ええ。もし万が一話に乗ってくるようなら、あなたを危険な事に巻き込むことになるのは100%わかっていましたから、私は考え直すように説得しようとも思っていました」

「……………」

「ですが、あなたは断る所からマルクス様の元へ行くとおっしゃった。そこで、私は考えたんです。もし、私とあなたが一緒に居る所を誰かが見ればマルクス様と会うと思うのは当然と考えるべきでしょう。ですからわざと人目の付く場所を通って執務室へと連れて行きました。アリス様の使いの者に執務室での会話を聞かせるために。そうすればアリス様が動くと思った……そうですね？」

「あ、ああ……ダラスの言う通り……で、思惑は見事的中したってわけだ。だが、昨日の今日でお前が会いにくると思わなかった……寧ろ避けられてもおかしくは無いことを自分化した……アリスの事も何も説明しないでいきなりあんな話をして悪かったと思っている。本当にすまない……」

真剣な表情で謝るマルクスに、ミレーヌは驚きで目を見開いた。

まさかここで謝罪の言葉を聞くとは思わなかった。

確かにあの時は腹が立ったし、しかもマルクスの前で涙まで見せてしまった。

その事に気が付いたミレーヌは急に恥ずかしさが込み上げてきて顔を赤く染めた。

「い、いえ…あの後リリーに話を聞きました…それで、わたくしでもお役に立てるなら…」

ダラスの言ったようにきつと危険なことが待ち受けているのだろう。もし、大きな怪我や、それで命を落とすことになったとしてもこの人の為に死ねるならそれでもいいと不思議と思えた。

きつと、ここまで思わせてくれる人がこの先現れるとは思えない…今なら断言できる。

それほどまでに、ミレーヌのマルクスへの思いは大きなものになっていた。

「…ありがとう…俺なんかの為に…」

すんなりと出てきた感謝の言葉にマルクスは戸惑うのと同時に、恥ずかしさから思わず二人から顔を逸らした。

（うわっ！俺今何て言った！？）

そんな事をマルクスが考えてるなんて露知らず、感謝を述べられたミレーヌはというと嬉しさの余り更に顔を赤らめ俯いてしまった。一方ダラスは耳を赤くして顔を逸らすマルクスを見て、珍しいものを見たと微かに口の端を上げたのだった。

第27話：謝罪と感謝（後書き）

感想、誤字脱字報告などありましたらよろしくお願いします。

第28話：嫌な予感（リリー視点）

リリーがミレーヌの部屋にある花を交換していると、何やら思案顔をしたセレナが話しかけてきた。

「ねえ…ミレーヌ様ちよつとおかしくない？」

「なに？おかしいって？」

「いや、なんか悩んでるような…リリーは何か知らない？ほら！今も上の空って感じで…」

そう言つてセレナが指を指した先に視線を移してみると、確かにぼーっと外を眺めるミレーヌの姿があった。

（きつと昨日の事とか考えてるんだと思うけど…）

リリーは事情が事情だけに、なぜミレーヌがああなのか勝手に言うのは躊躇われた。

それに、ミレーヌが他の侍女達に何も言わないなら自分が言つてしまつては良くはないだろうし。

「さ、さあ？私にも…それよりこの花瓶のお水換えてくるから、あとお願いね！」

「えっ！ちよつと！？」

これ以上追求されても困るので、セレナが何か言っているのも構わず、リリーは水の入った花瓶を抱えると部屋から出て行つた。

本当は朝に水を入れたばかりだから花瓶の水なんて換える必要はないのだけど…。

（絶対セレナは怪しいって思つてるんだろうな…）

はあつとため息を付き、水がたつぷりと入って、重量の増した花瓶を抱え直すと行く当ても無く歩き出した。

しかも、大きい為前方が見えにくいので慎重に歩かなくてはならずすぐに疲れてしまった。

（とりあえずどこかにこの花瓶を置いて一休みしよう）

「おや？君は…」

「きやあつ！！ダラス様！？」

……びしゃっ！！

「…ああつ！！！」

突然話しかけられてビックリしたリリーは花瓶を落としそうになっ
てしまった。

なんとか持ちこたえ、花瓶は落とさずに済んだのだが、水を廊下の
床にこぼしてしまい、その上ダラスの足に水がかかってしまった。

「も、申し訳ございません！」

顔を真っ青にさせたりリーは、持っていた花瓶をその場に急いで降
ろした。

両手が空いた彼女は、慌ててポケットからハンカチを取り出した。
床はそのままに、水が染み込んだズボンの裾を拭こうと手を伸ばし
かけたその時、突然ダラスに手を掴まれリリーは狼狽えた。

「いや、急に話しかけた僕が悪かった。そんなに濡れてないから大
丈夫だよ」

「いえ！ですが…」

「それより床を早く拭いたほうがいいと思いますよ？ああ、君！」

「たまたま通りかかったのだろう他の侍女をダラスは呼び止めると「悪いが床を拭く物を急いで持ってきてくれるかい？」と頼み、リリーの手を離すと床に置いてあった大きな花瓶をひょいと持ち上げた。

その一連の動作に全く無駄が無く、ぼーっとしていたリリーは慌ててダラスから花瓶を取り上げようとした。

「ダラス様！私が持ちますので…！」

「え？こんなに重いのに、女の子が持つて歩くのは危険ですよ？」
「ですが…」

持つ、持たせないと言い争っている間に先ほどの侍女がモップを持つて立つていた。

「あの…、拭く物をお持ちしましたけど…」

「ああ。ありがとう。この子に渡してくれるかな」

「は、はい！どうぞ…」

リリーより年下と思われる侍女は顔を赤らめてモップを手渡すと、

「では、これで…」とそそくさとその場を去って行った。

モップを手渡されてしまったリリーは、「ほら、早く拭いて」と急かされてしまい、仕方なくダラスから花瓶を取り返すことは諦め、水浸しになってしまった床を大急ぎで拭いた。

一通り拭き終わったのを見て、ダラスは話しかけてきた。

「で、この花瓶はどこに持つて行くつもりだったんですか？」

「えっと…あの…特にどこにとは決めてません…で…した」
「は？」

じゃあ何でこんな重い花瓶なんて持って歩いてたんだ？という痛々しい視線を浴びせられ、リリーは慌ててセレナとの事を話した。

「ああ…そういう事ですか…あなたも大変ですね」

「そんな事無いです。まあ、只の自己満足です」

「そう…それより、これ、本当に重いからどこかに置かないと…」
「そ、そうでした！でも、どうしよう…」

ミレーヌの部屋に戻る事は出来ないし…それより、花瓶を置いたとしてその後自分はどうしよう…と考えを巡らせている間にダラスは辺りを見渡し、目星をつけたのか彼はすぐ近くの扉の前に歩み寄った。

「こここの扉開けてくれるかな？」

と、リリーに声を掛けてきた。

その声にハッして慌てて扉まで近づくと、指示通りに扉を開けた。

そこは使われていない客室のようで、カーテンが引かれており中は薄暗く少し不気味な部屋だった。

何の躊躇いも無く彼は中へ入っていくと、扉の近くにあった背の低い戸棚に持っていた花瓶を置き廊下へと戻ってきた。

「花瓶はとりあえずあそこに置いておこう。ここは誰も使っていないから出入りもないしね。後で取りに来ればいい」

「どうも、ありがとうございます」

「ところで、今暇かな？」

「え？」

もちろん、暇だね？と言いたげな視線を向けられ、リリーは困った。

確かに暇と言えば暇だが…。

なんだか嫌な予感がした。

「暇だったら、ちょっと僕に付き合ってもらえないかな？」

「えーと、ど、どこに…」

「書庫室」

「し、書庫？」

「ええ。確か、君は文字を読み書き出来たよね？」

「え！？なんでそれを！？」

「そりゃ経歴書を見れば書いてあるしね。で、一緒に行ってくれるかな？」

ダラスの言い方は「別に忙しければいいんだけど…」とも取れるが、目はまるで「つーか、一緒に来るよね？」と言っている様だった。さすがにそんな目を向けられてしまつては、とても「嫌だ」と言える度胸はさすがにリリーには無かった。

「わ…わかりました」

「よかった。じゃあ行こうか」

そう言つて歩き出したダラスの背中を見て、気付かれない様にため息を吐き出したリリーは後を追った。

第28話：嫌な予感（リリー視点）（後書き）

次回もリリー視点です。

第29話：予感的中（リリー視点）

「ここが書庫室ですか？」

「そうだよ」

そう言つて立ち止まつて見上げた扉は大きく頑丈そうだった。

あまりの大きさに開けるのに苦勞しそうだな、という予想は呆氣なく裏切られた。

まるで扉の下に車輪でも付いているのではないかと思うぐらい、彼女がちよつと力を入れただけですんなり開いた。

それにも驚いたが、更に扉の先の光景にリリーは目を見開いた。

あまりの広さに奥が見えない。

ずらあーつと並べられた本棚には隙間が一ミリもないほど本で埋め尽くされていた。

「うわあー…すごいですね…」

「ここには国内中の書物や本があるからね。ほかに一部他の国のものもあるし…なんと言つても広いから、迷わないように気をつけて」

「はい。で、ここで一体何を？」

「うん、ちよつとこつちへ」

そう言つて右の奥へと進んで行つてしまう。

キヨロキヨロしながらついて行き、しばらく歩くと机と椅子がずらりと並べられた場所へと出た。

しかし、こんなに机があるというのに、誰も居ないとは…。

よく考えてみれば、辺りは静かで自分達以外の気配が全く無い。

そう意識した途端、自分は男の人と二人つきりだという事にドキリとした。

彼はマルクスほどではないが、まあ、ハンサムの部類に入る顔立ち

をされていてスラリと背も高い。
だが、男性にあまり免疫のないリリーには未知の存在だった。
どうしたって意識してしまう。

「君には、ここに書いてある本を探して欲しいんだ」

「……………」

「聞いてますか？」

何も返事をしないリリーを不審に思ったのかダラスは高い背を屈めて顔を覗き込んできた。

ダラスの赤茶色の瞳の中に自分が居るのが見えてしまい、その、あまりに近い距離に驚いた彼女は一步後ずさった。

その行動を不思議そうな目で見つめられ、意識しているのは自分だけなんだと思うと急に恥ずかしくなった。

「は、はい。本を探せばいいんですね？」

恥ずかしさを隠すように急いでそう言うと、何も無かったかのようにダラスは姿勢を元に戻すと、手に持っていた紙を渡してきた。

「これが、リストです。ここに書いてあるものは、すべてあそこの本棚にあると思うので後はよろしくお願いします」

「わかりました」

後はよろしくの部分聞き逃し、頷いて返事をした彼女は、ダラスが元来た方向へ体を向けるのを見て、まさかと思った彼女は慌てて彼の服を引っ張った。

「あの、どちらに？」

「僕はこれからミレーヌ様の所へ行かなくてはならないので」

（はい？まさか、一人でこれを探せと？）

どうにもムカツとして彼を睨みつけると何かを察したのか、ダラスは「ああ、心配要りません。直ぐに他の者も来ますから、そしたら本を渡してください。では」と言つて奥へと消えて行き、しばらくすると扉の閉まる音が微かに聞こえた。

「何よ、もう！」

そう叫んだ言葉は書庫室にこだまして消えた。

初めはダラスの事が腹立たしく何も思わなかったのだが、時間が経つにつれ冷静になってくると、なんだか、一人つきりだというのをもろに感じてしまい無性に寂しくなってきた。

しかも、1冊どうしても見つけれない。

いよいよ寂しさよりも困ったという気持ちが大きくなってきた所に、扉が開く音が耳を掠めた。

（やっと誰か来てくれたのかしら？）

と意識を入り口の方へと向けると人の話し声が微かに聞こえた。

一人は男で、もう一人は女の人の声だった。

しかし、その声の主達はこちらへとやって来る気配がまるで無く、ぼそぼそと何かを話しているようだ。

（ダラス様がよこした人とは違うのかしら？）

首をかしげながら、とりあえずその人達に話しかけようと、入り口へと足を向けた。

段々近づくにつれ、話し声は大きくなり、リリーの耳にもハッキリ

と聞こえてきた。

「いいか、計画通りに事を進めるんだ。じゃ無ければ、俺もお前も命は無い。わかってるな？」

そう言う男性の声が聞こえた途端、リリーはピタリと足を止め、息を呑んだ。

幸い、まだ二人からは距離がある為、彼らはリリーの存在に気が付いてはいない。

だがここで物音一つでも立てれば見つかってしまう可能性は高い。それに話の内容が内容なだけに下手に見つかれば何をされるかわからない。

「わかってるわ。アリス様の為もあるけど私も死にたくは無いわ」

その声に、リリーの心臓は更にドクドクと嫌な音を立てた。

この声を彼女は知っている。

だが、顔を確かめて見なければわからない。

というか、彼女であって欲しくない。

どうしようと迷った末、意を決して確かめる事にしたリリーは、そうつと足音を消しながら何とか彼らに近づき、本棚の向こうを覗こうとした瞬間、扉が開く音が響き驚いたリリーは身体を元の位置へ戻した。

どうやら、扉が開いたのは彼らが出て行く所だったようで、もう一度覗き込んだときには、すでに誰もいなかった。

嫌な予感が的中してしまった。

床に座り込んで膝を抱え、顔を見なくて良かったという気持ちと、

ちゃんと確認したかったという思いがぐるぐると頭の中を回る。
もし本当にあの声が彼女の物で、何かを企んでそれを実行しようとしているのであればマルクスかダラスに知らせなくては…。

「あの…」

「きゃっ！」

あまりにも考え込んでいて、人が入ってきた事に気が付かなかった。突然話しかけられ驚いていると、ダラスに言われてやって来たという彼女は座り込んでいるのを見て、具合が悪いのかと言いながら覗き込んできた。

変に心配させてしまつては良くないと、リリーは急いで立ち上がる
と「大丈夫」と声を掛けた。
だが、彼女はまだ心配そうに見つめてくる。

「本当に大丈夫よ。ちょっと疲れたから休んでただけ」

そう言うと彼女は安心したように「なら、よかった」と言つて微笑んだ。

その笑った顔を見ると、先ほどの緊迫した空気が嘘だったかのよう
に緊張がほぐれる様だった。

とにかく一刻も早く本を見つけ、ダラスかマルクスに会わなければ
…。

「あと、この一冊がどうしても見つからないの」

そう言うと、彼女は指差した文字を目で追い、「この本だったら、

別の棚にあったと思います。すぐに取ってきますね」と言って奥へと行ってしまった。

だからいくら探しても無かったのね…とため息を付きリリーが机があった場所まで戻ると、本を探しに行っていた彼女が目的の物を手に持って棚の間から出てくる所だった。

「これで全部ですね」

紙と本とを交互に見て全部ある事を確認すると彼女は本を持ち上げた。

「半分持つわ」と言っただけ彼女の手の上にある本の半分を取り上げる。書庫室を出て廊下を歩きながらリリーは隣を歩く彼女に話しかけた。

「ところで、今ダラス様はどちらに？」

「え？ダラス様ですか？」

「う、うん。その…他にも頼まれた事があって…」

頼まれ事など無いのだが、そう言えばダラスを探している事に疑問を持たれることは無いだろう。

案の定、彼女は全く疑っていないようだった。

「えーっと、どこにいるかまではちょっとわからないです」

「そっか。じゃあしょうがないね」

とは言いつつ内心焦っていた。

この際、マルクスでもいいのだが、そんな事聞けるはずも無い。と、視界の端に今最も会いたい人物が映った。

しかも、マルクス様と、ミレーヌ様まで一緒に居るではないか！！今すぐ呼び止めたいのは山々なのだが、隣を歩く彼女に気付かれた

らまずいような気がした。

それほど、あの三人は周りを気にしているような感じだったから。

（ああ、行っちゃった…）

どうしようかと考えているうちに目的の場所へと付いたのか、彼女が話しかけてきた。

「ここです。半分持ってくれて助かりました」

「う、ううん。じゃあ私はこれで…」

そう言って持っていた本を彼女に渡すと急いで歩いて来た道に戻る。

（確かここらへんで見たんだよね？）

三人を見かけた場所へ戻ってきたリリーは辺りを見回す。

そしてすっかり誰も居ない事を確認すると三人が向かったと思われる方向へと足を向けた。

第30話：声の正体

「じゃあそろそろ出ましようか？」

「そうですね…」

「ああ」

マルクスもダラスも仕事が山のように残っているし、いつまでも三人でこんな所に居たらまずいという話になり、後日話の続きをしようということになった。

「ちょっと待てダラス」

そう言つて廊下へ続く扉を開けようとしていたダラスはドアノブへ伸ばしていた手を下ろし振り返った。

「なんですか？」

「足音が聞こえる」

「「え？」」

ミレーヌが耳をすませると確かに廊下側から足音が聞こえる。その足音は目の前にある扉の前まで来るとピタリと止まった。

「ど、どうするんですか？」と声を潜めてすぐ後ろに居たマルクスに問いかける。

マルクスが口を開けようとした瞬間、コンコンと扉が叩かれる音が部屋に響いた。
ドキッとした。

ここへ来る途中に誰かに見つかったのか？

それがもしアリス側の人間だったら……。
そう思うとミレーヌは居ても経ってもいられない。

「誰だ」

ソワソワしているミレーヌと違い、落ち着き払ったマルクスの声と表情。

ダラスに視線を向けてみれば特に焦りもせずこちらも落ち着いているように見える。

そんな二人を見て、焦っているのは自分だけなんだと思うと少し恥ずかしかった。

「リリーです」

（リリー！？え？）

扉の向こうに居るのはリリーだったと一瞬安心したものの、何故ここに？と疑問が湧き出てきた。

三人で顔を見合す。

「あのっ、開けてもよろしいですか？」

何だか切羽詰ったような様子にダラスは扉を開けた。

するとリリーはサッと身体を部屋へ入れると扉を静かに閉めた。

ミレーヌが駆け寄ると若干リリーの顔色が悪いように見える。

「ど、どうしたの？なんでここが？」

「えと……その……さっき廊下で見かけて……それよりお話が！」

「とりあえず奥行くぞ……」

リリーの様子がおかしいと判断したマルクスはまた元居た寝室へ来るように促す。

全員が寝室へと入った事を確認するとリリーは口を開いた。

「あの、さつき書庫室にいたんですけど…」

そう言っただけで切り出された話に三人は黙り込んだ。

最初に口を開いたのはマルクスだった。

「そうか…早速動き出したという訳か…」

「……………」

「で、女の声に聞き覚えがあると言ったが、誰だ？」

「顔を見たわけではないので確信は持てませんが…声はクラリスのものでした」

「え！？ク、クラリス！？」

ミレーヌが驚くのも無理は無い。

正直ここに居る誰もが信じられないという表情を浮かべている。

「おい、ダラス…今日中にも身元を調べろ」

「わかりました」

「ただ、まだ確信は持てない。泳がす為にもこのままミレーヌに付いてもらう」

「いいな？と言う目線をミレーヌに向け、彼女が頷くのを確認するとマルクスはリリーに向き直った。

「ここに来るまでに誰かに見られはしなかったか？」

「はい。大丈夫だと思います」

「そうか…とりあえず教えてくれてありがとう。これで対策も練り

やすくなつた」

「あ…いいえ…」

リリーは若干俯いていたから気が付かなかった様だが、ミレーヌは見逃さなかった。

マルクスが見た事も無い優しい微笑をリリーに向けたその一瞬を…。この場に相応しくない、自分の中に湧き出てくる黒い感情にミレーヌは必死に蓋をした。

「ミ…又、ミレーヌ」

何度目かの呼びかけにやっとミレーヌは俯いていた顔をパツと上げた。

その表情は少し暗かった。

「大丈夫か？」

「え？なぜ？」

「何だか…」

自分から大丈夫かと問いかけておいて、なぜ？と言われても、マルクスは表情が暗いからとは言えない。

それじゃ、まるで自分がミレーヌを気にしていると思われるし、そんなのは認めたくない。

「？」

「いや、何でもない」

まあ、自分を狙っている人物が身近の人間だと知ったからだとマルクスは自分に言い聞かせ、そっぽを向くと、皆を部屋から出るように促した。

ダラスが横でマルクスの言動に口の端を上げているのにも気づかず
に…。

第31話：心の距離

マルクスが婚約を結んだ――――。

その話のはあの”女嫌いで有名な王子の婚約”とあって、あつという間に城の中を駆け巡り、幾日も経たぬ内に城だけでは留まらず国中にまで知れ渡る事となった。

おかげで城下町の人々の専らの話題はそんな王子を射止めた姫君は見目麗しい美少女だの何だのと憶測が憶測を呼び大騒ぎ。

まさかそんな事になっているとは露知らず、ミレーヌはここでの日課になりつつある、花への水遣りをしていた。

「ミレーヌ」

突然後ろから自分を呼ぶ声がしたと思い振り向くが誰も居ない。キヨロキヨロと辺りを見回し、首を捻っているとまたも声を掛けられた。

「どこを見てるんだ？上だ、上」

「え？」

そう言われて上を見上げると、二階のバルコニーからこちらを覗くマルクスの姿があつた。

蜂蜜色の髪の毛が太陽の光に照らされキラキラと揺れる。

その美しさに彼女が見とれていると、マルクスの表情が突然硬いものとなった。

それも一瞬だったのだが、それを見逃さなかったミレーヌはどうし

たのかと声を掛けようとした時だった。

「お前は明日から別の部屋へ移る事になった。今から準備しとけ。いいな……」

彼は早口にそう告げると踵を返し去って行ってしまった。

もちろん彼女が何か言葉を発する前に……

突然現れ、部屋を移るようにと言われても何のことやらさっぱりわからない。

ミレー又は部屋の中で掃除をしていたセレナに声を掛けた。

「今、マルクス様が別の部屋に移れて……ねえセレナ、何か聞いている？」

「えーと、今後はマルクス様と一緒にの部屋になると伺ってますが……そう言えば言うの忘れてました……」

「ええ！？嘘でしょ？」

（そんな事マルクス様が認めたっていうの！？）

婚約は偽りで結婚しないのだから、今まで通り別々の部屋で過ごすのだと思っていたミレー又は動揺した。

「まあ！何言ってるんですか？婚約者同士だったら一緒にの部屋で寝起きしても何の問題も無いじゃないですか」

「いやいやいや！！十分に問題ありますから！！などとは言えるはずもなく……」

真顔でそう言っただけのけるセレナにミレー又はもはや苦笑するしかなかった。

「掃除も一通り終わりましたから、水遣りはお終いにして、お部屋へ戻って色々と整理してもらえますか？」

「あ、うん。そうね…」

何だか納得がいかないが事情を知らないセレナには文句も言えないので素直に従うしかなかった。

（一緒の部屋だなんてどうしよう……ああ誰か…嘘だと言って！！）

次の日、朝早くに起こされたミレー又は自分の持ってきたものがどんどんと運び出されるのを見て、何となく肩を落とした。

昨夜はほとんど寝る事が出来ず、寝に入ったのは朝方。

ほんの少ししか寝れなかった為今朝はあまり調子が良くない。

とりあえず邪魔をしないようにと部屋の隅にある椅子に彼女は腰掛けていた。

「ミレー又様、運び終わりました。移動しましょう」

その声を掛けられて椅子から立ち上がると、少しの間過ごした部屋を後にした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

新しく通された部屋はマルクスの執務室に近い部屋だった。

前に居た部屋がゆうに2つは入るんじゃないかという広さで、更に居心地が悪いような気がした。

今は侍女達も下がりこの部屋にはミレーヌ只一人。

結構遅い時間にも拘らずマルクスが姿を現さない所を見ると仕事に忙しいのだろう。

昨日の夜もあまり眠れなかったので、早く寝たいのだが、この部屋にあるのは4人寝ても余りそうなほど広いサイズのベッド一つ。

いくら広いとはいえ、このベッドでマルクスと一緒に肩を並べて寝るのかと思うと、どうしても布団に入る事が出来ず、気を紛らわせようと未だに応接室のソファで本を読んでいた。

だが、ただ字を追ってるだけで全く内容が入ってこない。

仕方なく読むのを諦め本を閉じようとした時だった。

微かに廊下から歩いてくる足音を耳にした瞬間、ミレーヌの心拍数は一気に跳ね上がる。

あまりの緊張に廊下へと続く扉を凝視していると、程なくして扉が開きマルクスが入ってきた。

彼は部屋へ入ってくるなりミレーヌがまだ起きていた事に驚いたのか一旦動きを止めたと思うと、次に眉間に皺を寄せた。

「まだ起きていたのか？」

「は、はい…何だか眠れなくて…」

そう答えるものの、マルクスは聞いているのかいないのか寝室とは反対側に位置する扉を開けるとミレーヌを見る事も無くその中へ消えて行った。

たったそれだけの行動なのに、彼との間にものすごい距離を感じてミレーヌは無性に泣きたくなった。

だが、こんな事で一々泣いていてはダメだと自分を奮い立たせ、何とか涙を飲み込んだ。

しばらくすると、マルクスが消えていった扉が開く音がしてそつちに視線を移すと、再び彼が姿を現した。

お風呂に入ってきたのか、彼の髪の毛が濡れていて、服装も白を基調とした簡易なものに変わっている。

初めて目にする姿にミレーヌが見とれてぼーっとしていると、さつきと同じ位置にいる彼女に呆れたのか、マルクスは聞こえるようにため息を吐き出すと「早く寝ろ」と一言だけ言つと寝室の扉を開けた。

またしてもさつさと入っていくのかと思いきや、マルクスは扉を開けたままミレーヌに声を掛けてきた。

「なんだ、早く寝ろと言つたのが聞こえなかったか？それとも、そこで寝る気なのか？」

「い、いえ！そういうわけじゃあ……」

「だったら早くこっちへ来い！」

イライラした口調で大声を出したマルクスにミレーヌは肩をビクつかせた。

そんなミレーヌの姿を見て彼は自分を落ち着かせる為かため息を吐くと「疲れてるんだ……」と言いながらミレーヌに近づいてくる。

「俺と一緒に寝るのがそんなに嫌か？」

「え？」

彼は今なんと？

まさかそんな言葉が彼から出るとは思わなかったミレーヌは驚いた。

「仕方ないだろう……。婚約を発表した以上いつお前が襲われるとも限らない。この部屋だったら俺がいるからまだ安全だと思ったんだ

が…今日は遅くなつたが、これからなるべく一人にさせない様早くこの部屋へ戻るから安心しろ」

「はいはい」

まさかそこまで心配してくれるとは思っていなかったミレー又は彼の氣遣いに頬を染めた。

だけど、次の彼の言葉で高揚した気持ちが一気に下がるのがわかった。

『もちろん王妃の問題が解決しだいこの婚約は解消するんだ。同じ部屋で過ごすのはその間だけだ』

寝る前にマルクスから言われた言葉。

それになんとか”はい”と答えたものの、ミレー又はやり切れない思いで布団を顔まで上げると目を固く閉じた。

自分から偽りの婚約を望んだくせに、いざその立場になってみるともう後戻りは出来ないのだという事を思い知らされる。

あの後マルクスはさつさとベットの端へと潜り込むとミレー又は背を向け、数分も経たずに寢息を立て寝てしまった。

実際は数メートルも離れていない所に居て、少しでも手を伸ばそうと思えば掴める距離にいても、心の距離はどんなに追いつこうと走って手を伸ばしたとしても届かないのだ。

その事実はどうしようもなく胸が痛み、ミレー又は次から次へと溢れる涙を止める事は出来なかった。

第32話：認めた気持ち

やつと寝たか……。

先ほどまで微かに震えていた背中は今ほ規則正しく上下している。マルクスは静かに身体を起こすと、ミレーヌの背中を見つめた。

しばらくじつと見つめていると、ミレーヌが身動きこちらを向いた。一瞬起きたのかとドキッとしたが彼女の目は閉じられたままでの事に安堵のため息を漏らす。

その時、雲に隠れていた月が現れて、その光に照らし出された彼女の顔。

泣いているんだろう事は背を向けていてもわかった。

いつまで経っても泣き止む気配を見せない彼女に寝たふりするのをやめ、なぜ泣くのかと問い詰め、その背を抱き締めたい衝動に駆られた時には愕然とした。

自分から偽りの婚約を提示して、それにミレーヌが応えた。

自分の思い通りに事が進んでいるはずなのに、どうしてもしつくり来なかった。

だからなのかここ最近、自分の中に芽生えそうな感情にイライラが収まらなくて…。

今まで認めないようにと意地を張って来たのだが…。
もう限界かもしれない。

彼女が起きないようにそつと近づくと、手を伸ばしミレーヌの頬に残る涙を親指で拭った。

自分が触れているのにも気づかず眠るミレーヌに、大胆にも彼女の頭を手を持って行くとサラサラとした髪の毛にも触れた。

一度触れてしまうと、それこそ自分の気持ちに嘘はつけなくなった。

そうだ…俺は間違いなくミレーヌに惹かれている。

彼女が好きだ………。

そう認めた瞬間心につつかえてた物が取れた気がした。

なのに同時に、ミレーヌに対して言った言葉が重く心にのし掛かり、ぎゅっと胸の辺りを握り締めた。

一緒の部屋にする事はダラスと話し合って決めた。

アリスが動き始めた事を知った以上ミレーヌを傍に置いておいた方がいいだろうと。

その事に何の異論は無かったのだが…。

イライラの対象であるミレーヌと同じ部屋で寝るなんて、数時間前の自分にとっては苦痛以外のなにものでもなかった。

だから勘違いされないようにとアリスの事が片付いたらこの婚約は解消すると言ったのに…。

その時のミレーヌの暗い顔を思い出し、自分自身を殴りなくなった。

そして今は……。

別の意味で苦痛なのではないだろうか。
好きな女が隣で無防備に寝ているのだ。

一体いつまで自分の理性が持つか。

ミレーヌには今まで嫌ってる風を装って来た。

『ク…ス…マルクス…』

自分と呼ぶ懐かしい声が聞こえた気がした。
重い瞼を開けると視界がぼやけてハッキリしない。

『……？』

『マルクス、こっち…』

今度はハッキリと聞こえた声。
忘れかけていた記憶が蘇る。
この声は……。

『ユーリ…？』

そう言った瞬間、視界がハッキリして驚いた。
自分の目の前に立っていたユーリは悲しい顔から、うれしそうな笑顔になった。

『ユ……』

『彼女は貴方にとってかけがえの無い人になる。気を付けてね…どうか手放さないで…』

『なに？言ってる意味が…』

訳が分からず、勢いよくユーリの肩を掴もうとした手は、彼女を通り抜けて空を掴み、その反動で転びそうになってしまった。

急いで体勢を立て直し振り返れば、またも彼女の顔から笑顔が消え、悲しい顔をしてこちらを見つめた。

『もう、私行かなきゃ…』

『え…』

『マルクス…幸せになってね…』

そう言ったかと思うと彼女の身体は霧となり消えた。

「あつ！！おい！！」

そう叫んだ瞬間現実に戻された。

視界に入るのは、間違いなく眠る前に見た光景。
それが何よりも現実だと物語っていた。

（今のは夢だよな…？）

にしたってリアルだった。

その証拠に夢から覚めてもユーリの言葉をハッキリと思い出せる。

『彼女は貴方にとってかけがえの無い人になる』

（ユーリ…お前一つ間違ってるぞ…かけがえの無い人になるんじゃない、もうなってるんだよ…）

マルクスは「ははっ」と自嘲的に笑うと、起こしていた身体をまた長いすに横たわらせて天井を見上げた。

『どうか手放さないで…』

（今は正直嫌われてるかもしれないが、ぜってえ手放すもんか！！）

『マルクス…幸せになってね…』

最後の言葉を思い出した瞬間、彼は腕で顔を覆つと目を瞑る。
その目からは、涙が一筋、頬へと流れていった。

第32話：認めた気持ち（後書き）

マルクス、やっと自分の気持ちを認めました。

これからどんな物語は佳境に入っていくと思います。

今後もよろしくお願いします。

第33話：混乱〔1〕

朝目が覚めた時にはベッドはもぬけの殻。

隣に寝てたはずなのに、その場所に手を伸ばしてみても温もりすら感じられないほど。

「冷たい…」

ベッドから抜け出して応接室、洗面所や浴場を覗いてみたけど彼の姿はどこにも無かった……。

「ははっ…当たり前か…」

ベッドに居なければ部屋のどこにも居ないだろうと予想はしてたものの、そんなに顔を合わすのが嫌なのかと思うとやっぱり悲しくなった。

肩を落としながら寝室へ戻り、姿見を覗いて自分の顔を見ると、目も真っ赤で酷い顔だった。

（あーあ、このままじゃ皆に心配掛けちゃうよね……顔洗おう…）

こんな顔のまま侍女達に会ったら絶対何か言われるに決まっている。さすが、王子が使う部屋だけに、今までの部屋には無かった洗面所も付いてて本当に助かったと思う。

冷たい水で洗って、少しスッキリした顔で応接室の方へと出て行くと、丁度侍女達がやって来た。

「おはようございますー!!」

そう元気よく挨拶をしながら部屋へ入って来たのはクラリスとエルマ。

この二人は仲が良いみたいでいつも一緒にいる気がする。

リリーの話聞いてから少し警戒はしてるけど、今でも自分に何か危害を加えようとしているとは思えない。

かと言ってリリーが嘘を言うはずなんてないし…。

「ミレーヌ様、今日は何をなさいますか？」

長椅子に座って本を読んでいると、エルマが遠慮がちに聞いてきた。さっきよりマシにはなったけど、まだ目が赤いはず。なのに、彼女はその事に一言も触れてはこなかった。ミレーヌは内心ホッとした。

「そうね…今日は温室へ行ってみたいかも」

「温室ですか？」

「うん、だめかな？」

落ち込んだ時には好きな花に囲まれてれば何だか落ち着くし、それに元気をもらえる様な気がするのだ。

それに前から一度入ってみたかった。

彼のお母様が建てたっていうあの温室…。

「そうですね…ヨダンさんに聞いてみないと…」

「お願いできる？」

「は、はい。それじゃあ今から聞いてきましょうか。ミレーヌ様はどうぞ御食事をなさって下さい」

「ちょ、ちよつと待って！今行くの？」

すぐにも部屋を出て行こうとするエルマをミレーヌは慌てて呼び止めた。

「え、ダメでしたか？早いほうがいいと思ったんですけど…」

「いやっ…あ…あの…ダメって事はないんだけど…」

「……？」

エルマがこの部屋を出て行ってしまうと、クラリスと二人っきりになってしまうと焦ってしまったのだが、首を傾げているエルマにどう言ったらいいのかわからない。

どうしようかと頭をフル回転させていると廊下へ続く扉が開き、思っても見なかった人物が入ってきた。

その事に更にミレーヌの頭は真っ白になってしまった。

扉を開けて入ってきたマルクスは、無言でミレーヌの傍へとやってくると、何故か彼女の隣へと座り込んだ。

只でさえ、いきなり現れた事にビックリしているというのに…。

（え？え？なに？しかも、な、なんで隣に！？）

訳がわからず混乱しているミレーヌをよそに、彼はすかさず出された飲み物を口元へと優雅に運び、ミレーヌに顔を向けた。

「……なんだ？」

「えっ！？」

どうやら、知らず知らずの内にミレーヌはマルクスを凝視していたらしい。

奇怪な顔でマルクスに見つめられて問われたミレーヌは更に混乱してしまい、あからさまに彼との距離を開けるように座りなおした。

「……………」

その行動に彼の周りの温度が一度下がる。

だが、いつも冷たい態度を取られてきたミレーヌはそれに気が付かない。

ミレーヌ達の事を見守っていたエルマの方が内心焦りだす。

丁度その時、朝食の準備をしていたクラリスが声を掛けてきた。

「マルクス様朝食の用意が整いました」

「ああ」

「ミレーヌ様もこちらへどうぞ」

そう言われて初めてマルクスが何でこの部屋へやって来たのかがわかった。

すでに朝食を取り始めているマルクスを見てミレーヌも慌ててテーブルについた。

二人して無言で食べ物を口に運んでいる状況に、エルマが恐る恐るといった感じに話しかけてきた。

「ミレーヌ様：あ、あの、御食事中にすみません…」

「大丈夫よ？なにかしら？」

「温室の件なんです…」

「温室？」

”温室”という単語を耳にしたマルクスが何の事だとも言うつように侍女に問いかけた。

もしかして怒られるのではとミレーヌは戦々恐々とする。

「あ、はい。ミレーヌ様が今日は温室に行ってみたいと…」

「母のか？」

「はい」

「なら、俺が案内する」

「ええ！？」

怒られるのではないかと思っていたのに、まるきり反対の事を言ったマルクスに、突然何を言い出すのかとミレーヌは大声を出してしまった。

当然マルクスに睨まれてしまい慌てて俯いた。

「何か文句でもあるのか？」

「い、いえ！そういう訳では…」

「だったらもつと嬉しそうにしたらどうなんだ」

「……ごめんなさい」

「別に謝って欲しいわけじゃない…」

ため息混じりにそう言われてしまい、昨日と急に態度が変わったように思える彼にミレーヌの頭は混乱しっぱなしであった。

第34話：混乱〔2〕

朝食も食べ終わり、マルクスは「ちよつと出てくる。直ぐ戻るから待ってる」と言つて部屋を出て行つた。

その発言通り、ミレーヌが本の一頁を読み終わらないうちに彼は戻つてきた。

「もう、出れるか？」

「はい」

「じゃ、行こう」

この間は偶然温室の方へとやって来たので道がわからない為ミレーヌは遅れないようにマルクスについていく。

先ほどから仕事は大丈夫なのかと気が気でないミレーヌは、隣を歩くマルクスにちらちらと視線を向けて歩いていた。

「なんだ？」

「え？」

「さつきから視線を感じるんだが、何か言いたい事でもあるのか？」

「あの…お仕事の方は大丈夫なのかと思つて…」

「……ふつ…たまには生き抜きも大事だと思うが」

「は、はあ…」

そう言われてしまうと何も言い返せず、その後は普段出来ない会話をするチャンスにも関わらず何を話せば良いのかわからずミレーヌは黙つて歩いた。

しばらく庭を歩いていると、いつか見た建物が目の前に現れた。

壁の上部分と屋根とがほぼガラス張りの温室の入り口には大きな南京錠が掛けてあり、マルクスはズボンのポケットから鍵を取り出し、

それを穴に差込んで回すと、ガチャリと音を立てた。
ガラス張りになっているのは上半分だけで外からは中の様子が伺えなかったのもあり、扉の先の光景にミレー又は満面の笑みを浮かべた。

「わあ……！！すごいっ！！」

外にある花壇も素敵でミレー又は好きだったが、ここに咲く花達はずっと種類も豊富でミレー又は一瞬でこの温室が気に入った。

普段から良く手入れをしているのかここに咲く花は皆生き生きとしている。

ゆっくりと歩いて回っていると、見た事も無いのが目に入りミレー又は立ち止まって良く見ようと近づいた。

「なんだ、珍しいものでもあったか？」

そう、声を掛けられたミレー又は驚いて後ろを振り返った。
どうやらマルクスの存在を忘れてしまうほど夢中だったようだ。

「お前…俺が居る事忘れてないか？」
「い、いえっ！そんな事ないです！」

いきなり図星をつかれてしまった。
なんとも微妙な空気が流れる。

「まあ、いい。で？気になるものでもあったのか？」
「あ、はい。これなんですけど」

と言ってミレー又は先ほど目にとまった物に指を指すとマルクスの

視線も指の先へと向けられた。

「これ、アナタリアには無くて…はじめて見ました」

「ああ…これはファéronというフルーツの一種だ。そのままでもうまいが、菓子に使われる事が多いんだ。俺も子どもの頃はそれを使った菓子をよく食べた」

「例えばどんなお菓子ですか？」

「そうだな…、ドライフルーツにしたものとか、クッキーとか…一番はタルトがうまかった」

「まあ！タルトですか？マルクス様がおいしいって言うなら、きつととてもおいしいんでしょうね？」

「じゃあ、今度シェフに頼んで…」

「是非お願いします！！」

マルクスが最後まで言うのを遮り、瞳をキラキラと輝かせながらミレーヌは勢い込んで彼に歩み寄った。

そんなミレーヌに彼は一瞬驚いた顔をしたと思ったら「ぷっ」っと噴出した。

「そんなに食いたいのか？」

彼が笑ってしまうほど物欲しそうにしてたかと思うと、「ぼっ」っ
と音がしそうなほどミレーヌは顔を真っ赤に染めた。
その様子にマルクスは更に腰を曲げて大笑いし始めた。
あまりの笑い様にミレーヌは腹が立ってきた。

「そ、そんなに笑わなくても…」

ミレーヌがそう言っても彼の笑い声は止まらず、しばらくしてやっと落ち着いたようだった。

「あー面白かった」

「……………」

やっと笑いが収まったかと思えば、面白かったなんて言われ、余計腹が立ったミレーヌは後ろを向いて怒っている事をアピールした。

「何？怒ってる？」

「見てわかりませんか!？」

後ろを向いたままそう言うと、マルクスはミレーヌの前へ回り込み「ごめん」と言った。
なんだか調子が狂う。

マルクスは自分のことを嫌っていたのではないのか？
なんだか昨日のマルクスと違いすぎて、都合の良い夢でも見ているのではないかと思えてくる。

一方マルクスは、ミレーヌの怒った姿も可愛いんだなと思いながらも、どう接したらいいのか悩んでいた。

自分の態度にミレーヌが困惑しているのもわかっていた。

じゃあ、自分の気持ちを伝えるか？

いや、まだ早い。

焦ってそんな事をして、もし拒絶されたらきつと立ち直れない気がする。

なんとも女々しい自分に苦笑するしかなかった。

少しずつ、少しずつ彼女との距離を縮めて行けばいい。

「この時はそう思っていた……。」

第35話：騙されたマルクス

温室へ二人で行った日から彼が優しいと感じるのはやっぱり気のせいじゃないような…？

あれからマルクスは忙しそうなのに、食事は必ず一緒に取り、夜も執務室に籠る事無く早く部屋へやって来る。

仕事を部屋に持ち込んでしている事もあった。

それだけなら義務としてそうしているようにも見えるが、違うのだ。多分今までの彼だったらきつと同じ部屋に居ても会話も無く一緒に居るのも辛かったと思う。

だけど、今の彼はピリピリとした感じも無く、以前より話しかけやすくなった気もするし、時には笑ったりとまるで別人のようで…。

本来はこんな人だったのだろうか？

いい事なんだろうけど、そうされればされるほど辛い。

もしかして？と期待しちゃいけないと思っててもしてしまうの繰り返し……。

「はあ……」

「どうかしたんですか？」

本日何度目かのため息を付いた所でリリーに声を掛けられた。

今この部屋にはリリーと二人つきり。

常に他の侍女が居たり、マルクスが居たりしたからリリーと二人つきりになるのは久々かもしれない。

「何か悩み事ですか？」

「悩みというか……ねえ、最近マルクス様、変じゃない？」

「え？変…ですか？」

「何ていうか、そうね…今までの冷たい態度が急に柔らかくなった
と言つか…」

「うーん…言われてみれば確かに雰囲気が変わったような気がしま
すね」

ミレーヌはやっぱり思った。

マルクスが変わったと思うのは自分だけでは無かった。

「どうしてだろう？」

「何かいい事があったとかでしょうか？」

「うーん」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ミレーヌとリリーが首を捻っている頃、マルクスは執務室で仕事に
没頭していた。

最近は早めにミレーヌの待つ部屋へと戻るため、いつもの倍のペー
スで仕事をこなす毎日だった。

「マルクス様、少しは休憩なさったらどうです？」

「……………」

ダラスが気を遣って声を掛けてもほぼ無視でずっと机にかじりついている。

仕事以外の話は全く聞いてない…。

だが、以前と比べるとイライラしている様子は無い。

これはもしか？

「そんなにミレーヌ様にお会いしたいんですか？」

そう言った瞬間、今までどんなに声を掛けようとも顔を上げなかったのに、マルクスは勢い良く顔を上げて「ち、違う！！」などと慌てふためく。

今の反応でダラスは確信した。

大体、顔を真っ赤にして言われれば誰が見てもそれが嘘だとわかる。ちよつと鎌を掛けてやろうとダラスは心の中でほくそ笑んだ。

「はいはい。では、そういうことにします」

「なんだ？それが、主人に対する物の言い方か？」

「マルクス様が素直じゃないからですよ」

「は？」

「で、気持ちは伝えたんですか？」

「な、何の話だっ！」

「もちろん、マルクス様の想いをミレーヌ様に言ったのかって事ですよ」

そう言われた瞬間、マルクスの動きがピタリと停止した。

（なっ、なんでこいつ、俺の気持ちを知ってるんだ！？）

まさかダラスに鎌を掛けられているとも知らずにマルクスは焦る。

「……まだ、言ってない」

「何も？」

「ああ、そうだー!!」

「どうしてですか？早く言った方が……」

「はあ！？そんな、いきなり好きだなんて言えるか!!」

そう大声で叫けば、水を打ったように静まり返った。

「……………」

「お、おい……なんで黙るんだよ？」

「いえ……まさか貴方がミレーヌ様に好きだと言おうとは思いませんでした」

ダラスは、そう口では言いつつ心の中では「やっぱりね」とニヤつく。

一方マルクスはダラスの言葉に騙されたんだと気が付く。

「あ、ああっ!!!!?」

「そうですか……マルクス様が……ミレーヌ様をねえ……ふーん」

と、ブツブツと言ってみればマルクスが面白いほど反応する。

「いいい、いやー!!今のは忘れる!!」

「何言ってるんですか？貴重なマルクス様の愛の告白をそう簡単に忘れられる訳が無いじゃないですか？」

「あ、あのなあ!!」

「まあまあ、そう照れなくても」

「……………もういい！！資料を取ってくる！！」

何を言っても墓穴を掘りそうな状況に、ついにマルクスは逃げ出した。

執務室を出ると、後についてこようとする護衛を説き伏せ彼は一人で書庫へ向かったのだった。

第36話：忍び寄る危険

「ちよつと、本取ってくるわね」

見終わってしまった本を手に、ミレー又は部屋を出ようと扉に手を掛けた所でリリーに呼び止められた。

「一緒に行きましょうか？」

「ううん、場所もわかつてるし大丈夫よ」

「でも…」

きつと、一人で行動すると危険だと言いたいのだろう。

「心配しなくても、直ぐ戻ってくるから」

そう言つて、リリーの返事も聞く事無く部屋を出て行つた。

暇つぶしにと読み始めた本はシリーズ物で、五巻まである。

これがなかなか面白くてすでに四冊目を読み終え残すはあと最終巻のみ。

早く続きが読みたくてリリーの言葉も聞かずに出てきてしまった。

（リリーったら心配しすぎなのよ…）

ミレー又は足早に書庫へと入り、目的の物を探す。

本を誰かが移動させたのか、なかなか見つからず自然と奥へ奥へと足を向ける。

しばらくして目的の物が本棚の上の方、手を伸ばせばギリギリ届きそうな場所にあるのを見つけた。

（もうつ！あと少しで届きそうなのにつ！誰よ…こんな所に移動させたのは！！）

心の中で悪態を付きながら必死に手を伸ばしてた時だった。背後に何かが動く気配がしたと思った次の瞬間、口をハンカチのような物で塞がれ、凄い力で背後から押さえつけられた。

「ふうつ……っん！！」

（やつ…やだっ！何！？）

いきなりの事にミレー又は若干パニックになりながらも抵抗を試みる。

だが、相手はそれよりも強い力で抑えようとする。

「騒ぐな！」

低くても威圧感のある知らない男の声。

相手が全く知らない男だという事に恐怖感を抱く。

更に次に発せられた言葉でミレー又はピタリと抵抗をやめた。

「少しでも騒いだらこのナイフがお前に突き刺さる事になる」

恐る恐る視線を下に持つていくと自分の腰の辺りに光るナイフが目に入り、冷や汗が背中を流れた。

少しでも気を抜けば崩れ落ちそうなほど足が震えてしまう。

男は更にナイフをミレー又はの首元へと移動させ、耳元で囁いた。

「いいか、良く聞け…殺されたくなければ早く自分の国に帰るんだな」

そう言うと、男は素早い動きでもって後ろへ引つ張った後、ミレーヌを突き飛ばした。

「きゃっ！！」

ドンツと、凄い力で背中を押されたミレーヌは本棚へと倒れこみ、勢い良く肩をぶつけ、あまりの痛さにその場に蹲る。

肩を手で押さえながら顔を見ようと振り返る。

だが、書庫の中は薄暗く、フードを目深に被っているせいでよくわからない。

なのに、男がニヤリと笑った気がしてミレーヌはゾツとした。

そして次の瞬間、ナイフを振り上げたのを見て、ミレーヌは目を見開いた。

勢い良くミレーヌ目掛けて振り下ろされるナイフがスローモーションの様に目に映る。

「いやあっ！！」

咄嗟にミレーヌは目を瞑ると、次に来る痛みを待ち構えた。

ガンっ！！！！

しかし、痛みがやってくることはなく、物凄い音が足元に響いただけだった。

恐る恐る瞑っていた目を開き、そちらに視線を向けると、男は持っていたナイフをミレーヌの足のすぐ横へと突き立てていた。

あまりの恐怖に震え上がり、ついに涙がこぼれ落ちる。

「……っ!!」

男はミレーヌの怯えた顔を見て満足したのか、足早に書庫室を出て行った。

そして静寂に包まれる書庫内。

誰も居なくなり、恐怖は去ったというのに一向に震えと涙が止まらない。

今回は肩を痛めただけだった。

だけど、一歩間違えれば自分は刺されていただろう。

そう考えると、余計恐怖が込み上げる。

先ほどの事が嘘だと思ったかった。

だが、肩の痛みと、足元に突き刺さるナイフが嫌でも嘘でも何でもなかったのだと言う事を物語っている。

あの時なぜリリーの言う事も聞かず出てきてしまったのか…。

つい先日、マルクスから一人になるなと注意されてたのに、それを無視するような事をしてしまった。

激しい後悔がミレーヌを襲う。

と、その時だった。

「おい、そこに居るのは誰だ？」

背後から声を掛けられ、ミレーヌは飛び上がりそうなほど驚いた。だけど、聞こえたのは良く知った声。

「マ…ルク…ス様…？」

そう呟き、涙でぐちゃぐちゃの顔のまま振り返ると、思った通りマルクスが立っていた。

彼はミレーヌの顔を見て、動きを止めた。

ミレーヌは少し離れた所で立ち止まっている彼の元へ駆け寄ると、その胸へと飛びこんだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

書庫に行つて来るとダラスに言つた手前、適当に何か取つて戻らうと思つていた。

中は本が陽に焼かれないようにとカーテンが引かれ薄暗く、いつもなら明かりが灯っているのに今日はそれが無い。

不審に思つたが別に困るほどでもなかったし、まあいいかと奥へと向かうと、棚の間に蹲る女を見つけた。

誰だ？と声を掛けてみれば、それはミレーヌで。

彼女の泣き顔を見た瞬間、何かがあつたのは明白。

自分の腕の中に飛び込んできた彼女を抱きとめると震えているのがわかつた。

泣いていては話を聞けないだろうと、とにかく気持ち落ち着くまで彼女を抱きしめたまま待つことにした。

しばらくすると、落ち着いてきたのかミレーヌは「ごめんなさい」と言つて胸から顔を上げて離れた。

「何があつた？」

なるべく優しくそう声を掛けると、ミレーヌは先ほど蹲っていたと

思われる場所を指差した。

視線を彼女からそちらの方へと移すと、床に突き刺さるナイフ。ミレーヌから一旦離れ、それを手に取ってよく見ても、どこにでもあるナイフで、もちろん誰のか分からない。

「い…きなり、男の人に…う…後ろから襲われてっ…」

「一人でここに來たのか？」

「……………はい」

「全く…自分がどれだけ危険に晒されているか分かってたはずだろ？」

何かを言えば言うほど浅はかな行動をしたミレーヌに腹が立つてくる。

そして、もう少し自分が早くここに来ていれば、彼女を襲った男を捕まえられたと思うと悔しかった。

「それに！あれほど一人になるなと言っただろう！！」

そう大声で叱り飛ばすとミレーヌは「ご、ごめん…なさい…」と言っ
て俯いた。

彼女に近づくとな手が震えているのが目に入り、マルクスは大声を出
してしまった事に心の中で舌打ちをした。

持っていたナイフを床へと転がすと、その音に驚いたのかミレーヌ
が顔を上げる。

その顔にはいく筋もの涙…それを見た瞬間、無意識の内に彼女の手
首を掴むと自分へと引き寄せ、もう一つの手を背中へと回すと抱き
しめていた。

第37話：もどかしい気持ち

抱きしめられた瞬間、夢か幻かと思った。

だけど鳴り響く胸の鼓動と、掴まれた手首や背中に回る腕の感触がそれを否定する。

彼から微かに香る爽やかなシトラス系の香りを思いつきり吸い込んだ途端、顔がどんどん熱くなっていくのが分かった。

止め処なく流れていた涙もピタリと止まってしまった。

彼は一体、今何を考えているのだろうか？

どんな表情をしているのか気になったけど、なんだか怖くて顔を上げられず彼の胸の辺りばかりを凝視していた。

どうして…抱きしめられてるんだろうか？

襲われて、泣いてて可哀想だったから？もしかして、同情してるとか？

そう考えた途端、彼の腕の中に居ることに耐えられなくなってきたミレーヌは声を絞り出した。

「あ、あの…離して下さい…」

声に反応したのかのように、マルクスは急に我に返ると慌ててミレーヌを離れた。

その際に本棚にぶつけた肩が痛み、咄嗟にそこを手で押さえた。

ミレーヌの様子を見ていたマルクスは眉間に皺を寄せ「肩が痛むのか？」と聞いてきた。

「え、ええ…本棚にぶつけてしまつて」

「大丈夫か？見せて…」

「さ、触らないで!!」

そう言いながら伸ばされた手が視界に入った途端、ミレー又は思わずそれを払いのけていた。

瞬間彼の表情が悲しみを帯びた事に彼女はもちろん気付かない。

「…ど…同情ですか…？だったら…こんな事しな…」

「ち、違う!!」

彼の手を払いのけてしまった手前怖くて顔を見れず、視線を床へと貼り付けたまま震える声で言った言葉は、マルクスの否定の言葉でかき消されてしまった。

(えっ……？)

訳が分からない。同情じゃなければなんだと言つのか？

否定された事で膨らむ期待。

ミレー又は意を決して俯いていた顔を上げて彼を見つめる。

「……じゃ、なんですか…？同情じゃなかったら……何だつて言うんですか!？」

「……………」

目の前に立つ彼を見つめたまま怒鳴るようにそう言つと、彼の目が一瞬見開かれる。

だが、それも本当に一瞬で彼はすぐに表情を元に戻すと黙り込んだ。じつと彼を見つめ、何か言葉を口にするのを待ち続ける。

その間、胸の鼓動がやけに大きく響いて、うるさく感じた。

「……………今は」

「……………」

「…答えられない」

勇気を出して聞いたのに…。

ドキドキしながら待ってた答えは何とも煮え切らないものでミレー
又はがっかりした。

気落ちしたミレーヌを余所に、彼はこれ以上話す事は無いとでもい
うように背を向けると、床に転がっていたナイフを拾い上げた。

「…肩を痛めてるんだろ？もう…出よう」

背を向けたまま、彼女の顔も見ずにそれだけ言うと、マルクスは出
口へとスタスタと歩いて行ってしまふ。

慌ててその背を追いながら、ミレーヌはもどかしい気持ちで一杯だ
った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ミレーヌを部屋まで送り、執務室へとやって来たマルクスは椅子へ
倒れこむように座ると、持っていたナイフを机の上に転がした。

ゴトリと音を立てて転がったそれは、窓から差し込む陽を浴びてキ
ラリと光る。

それを見つめながら、先ほどの事を思い返していた。

頭の中に浮かび上がるのはミレーヌの涙に濡れた顔と何かを訴えるかのような瞳。

なぜか彼女の涙を見た瞬間に理性など遙か遠くに吹っ飛んでしまい、気が付いた時には彼女は自分の腕の中に居て…。

本当に焦った。

肩を痛そうにしているミレーヌを心配したのに手を思いっきり払われた時には胸が痛んだ。

しかも、同情だと勘違いされるとは思わなかった。

咄嗟に違うと言ってしまったが、じゃあなんですか？と問われ、動揺を悟られないように必死だった。

ただ一言”好きだからだ”とそう答えてやればよかったのだろうが、どうしても恥ずかしさが邪魔をして、結局「今は答えられない」と言うので精一杯だった。

そんな自分に呆れてしょうがない。

(くそっ！！あー情けねえ……)

心の中で散々悪態を付いて、今になって後悔してもしようがないだろうという結論に行き着いた。

机の上に転がしたままだったナイフを机の引き出しへ押し込むと、何とか気持ちを切り替え仕事を始めた。

しばらくして何か違和感を感じ、規則的に判子を押ししていた手を止めた。

なんだ？と考えて、ダラスが居ない事にようやく気付く。

「そっいゃ、どこいったんだ？アイツ…」

まあいいか…と書類へと視線を移し、何枚か書類に判子を押しした所で入り口の扉が開いた。

「ここに居らっしゃったんですか？」と言いながら目の前に来たダラスをマルクスはチラリと見るだけで手は止めずに動かし続ける。

「は？てか…お前こそ、どこ行つてたんだよ？」

「私はマルクス様を探してたんですよ」

「俺もお前に話がある」

そう言いながらマルクスは引き出しの中に入れておいたナイフを取り出すとそれを机の上に置いた。

ダラスは眉をひそめてナイフを取り上げ繁々と眺める。

「これは？」

「ミレーヌが書庫で襲われた」

「！！？」

「それは犯人が残してつたナイフだ」

「で、ミレーヌ様は！？」

「肩を痛めただけで他は何とも無いから安心しろ。今は部屋に居る」

そう言つとダラスは「そうですか…」と言つて安堵のため息を吐き出した。

「ついに動き始めたつて事ですね…それだとちょっと心配ですね…」

「何かあるのか？」

「陛下が二週間後に舞踏会を計画しているそうで…」

「はあ！？」

「それが…ミレーヌ様のお披露目も兼ねて各国に招待状も出したそうです」

舞踏会を計画しているまでは聞き流せた。

だけど…まさか招待状まで出しているとは思わなかったマルクスは

怒りに震えて拳を握り締める。

「俺は聞いてないぞ！そんな話！！」

「私も先ほど聞いたばかりで……」

「あんの糞親父！！俺の了解も無く勝手に招待状まで出しやがって！！」

「それは私もマルクス様に相談してからのほうが良いと言ったんですけど……すでに出した後だったみたいで……」

「……どこに居る」

「え？今なんて……」

「だから、親父は今どこに居るって聞いてんだ！！」

まるで噛み付くように怒鳴られたダラスは両手を胸の前に持つてきて思わず仰け反ってしまう。

「いや……でも陛下は今、会議中……」

「わかった」

「え？わ、わかったって……」

「ちよつと出てくる」

そう言つてマルクスは執務室を出て行ってしまう。

「ああ！？ちよつ……！！」

一度言い出すと何を言つても聞かない性格のマルクス。

ダラスにとってある意味面倒くさい性格とも言える。

これで何度迷惑を被ったか知れないのだ。

今までのパターンからいつて彼は100%会議中の部屋に乗り込んで行くつもりだろう。

（全く……！！）

ダラスは大きなため息を吐き出すと、慌ててマルクスの後を追った。

第38話：言い争い

マルクスは大きな音を響かせ扉を開け放つと、会議中の部屋へ躊躇する事無く足を踏み入れた。

細長いテーブルの一番奥にアレクが座り、その周りを取り囲むように大臣や貴族らがずらりと並んで座っていた。

突然現れたマルクスに何事かと驚いた表情を見せ、立ち上がる大臣や貴族もいる中、そんな事にも目もくれず彼は父親の前へとやって来た。

周りが騒然とする中、王アレクはマルクスがやってくる事を予想していたのか、驚きもせず一人平然としていた。

「マルクス、会議中だぞ」

「父上、話が…」

「陛下…申し訳ありません。マルクス様、ここは一旦下がりました」

マルクスが何かを言う前に、後からやって来たダラスがそれを遮り、腕を引っ張って外へと連れ出そうとする。

「ダラス、離せ!!」

「いいえ! 離しません!!…いいから出ましょう」

「俺は話があつてここに来たんだ!」

どうにも興奮しているマルクスに、アレクは「やれやれ…」とため息を吐き出すと椅子から立ち上がると口を開いた。

「マルクス…お前が言いたい事はわかってる。だが、今は会議中だ。話がしたければ後で私の所に来なさい」

「……………」

「ダラス、連れて行きなさい」

「すみません…失礼しました…」

- - - - -

「で？話を聞こうじゃないか…」

王の執務室へとやって来たマルクスは不貞腐れた表情で応接用の椅子へと座り込んだ。

せっかく忙しい中、時間を割いてやっているというのに、マルクスはというと出された茶をわざとゆっくり飲んでるようだった。

一向に口を開かない息子にアレクは眉を寄せる。

「おいおい…会議中に乗り込んで来るぐらい話がしたかったんじゃないのか？」

「……父上こそ、私に何か言う事があるんじゃない？」

「なんだ、どうせ舞踏会の事だろ？各国に招待状も出したんだ。もう取り止めには出来んぞ」

「なんでそう勝手なことを…」

「婚約を祝って何が悪い？」

「……………」

「何も言い返せないなら文句を言うな。アリスも楽しみにして……………」

バンッ - - - - -

マルクスは義母の名前が出た途端、口へと運んでいたカップをテー

ブルへと叩きつけると父親を睨み付けた。
アレクはマルクスの突然の行動に驚きもせず、そんな息子が無表情で見つめると、徐に立ち上がり背を向けた。

「…何が気に食わない？」

「……………父上は……」

「なんだ……」

「なぜあの女と結婚したんですか……？」

「……………」

唐突な質問をしたからか、アレクが振り返るとまた椅子に座り込んだ。
だ。

しかし、先ほどと同じ無表情で、マルクスを見つめると黙り込んでしまった。

「どうなんですか？父上」

「……………仮にも母親をあの女と言うのはやめなさい」

「ははっ……あれが母親？笑わせないで下さい」

「……………」

「あの女を母親だなんて思ったことは一度だってありませんよ。父上はあの女に騙されてるんですよ。いい加減目を覚まして下さい」

「黙れ……」

「父上は母上の事を忘れたん……………」

「黙れと言っている！！これ以上私を怒らせるな！いいか、お前にとにかく言われる筋合いは無い！！舞踏会は二週間後だ。わかったら早く出て行け！！」

どうやらマルクスはアレクの逆鱗に触れてしまったようだ。
これ以上何か言えば、幾ら息子でも只じゃ済まされないかもしれない。
いい。

咄嗟にそう判断したマルクスはアレクの顔も見ずに立ち上がると、無言のまま執務室を後にした。

「マルクス……すまない…今はまだ…」

執務室では閉まった扉を見つめ、アレクは苦渋の表情を浮かべていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ダラスが扉横の壁に寄りかかりながらマルクスを待っていると突然中から聞こえてきた怒声。

マルクスかと思いきや、普段温和で滅多に怒鳴らない王の怒声だった事に驚いた。

中に入ろうか迷っている間に執務室の扉が開き、マルクスが出てくる。

「マルクス様！今の怒鳴り声は！？」

そう聞いても、マルクスからは何の反応も無くスタスタと歩き出す。いつもの彼なら悪態でも付きそうなものに余程アレクに怒鳴られたのが堪えたのだろうか？

こういう時は何も話し掛けないのが一番だろうと、ダラスはマルクスの後ろを黙って歩いた。

中央塔の回路までやって来ると、突然マルクスは歩みを止めた。危うくぶつかる所だった。

「おっと！どうしたんですか？」

「ダラス…… 舞踏会は予定通り二週間後だ」

「陛下にミレーヌ様の事はお話にならなかったんですか？」

「あの親父に何を言っ たって意味無いって事がよくわかった」

「しかし……」

「いいから、予定通りだ。 ついでにミレーヌの所へ行つて伝えて来い。俺は執務室に戻る」

「…… かしこまりました」

そう答えるとダラスはマルクスと別れ、ミレーヌの元へ向かった。

第39話：告白

ミレー又はマルクスが執務を終え、部屋へと戻ってくるのを今か今かと待っていた。

昼間ダラスから聞かされた舞踏会の話…。

侍女達は大々的に行われる久々の舞踏会とあって目を輝かせダラスの話を聞いていたが、ミレー又はいくら両親が参加すると言われても素直に喜べなかった。

書庫で知らない男に言われた「殺されたくなければ、国に帰れ」という言葉に不安が無いと言えば嘘になる。

だが、一番の気がかりはマルクスが何を考えているのかが分からない事だった。

「まだ起きてたのか？」

「……………！！」

声を掛けられハツとして顔を上げると、いつの間にかマルクスが目の前に立っていた。

考え込むあまり、彼が戻ってきた事にも気が付かなかった。

「お疲れ様です…あの…」

「なんだ？」

「舞踏会の事ですけど……………」

「……………ああ…ダラスに伝えるように言ったが、聞いたか？」

「はい…あの、でも…いいんですか？」

「いいって？」

「このままだと、婚約が本当に公のものになってしまつのではない

ですか？」

「……………」

「わたくしは……………」

「仕方ないだろ？親父が招待状も出して……………」

一瞬、聞き間違えたのかと耳を疑った。

でも彼は確かに「仕方ない」と口にした……。

あれだけ自分を否定してきたのに……！！

「仕方ない」で済ませるのですか？なら、あなたにとっては特に何とも思わないと？」

「そんなこと言ってない……！！」

「じゃあ、何だと言っんですか！？わたくしは……正直あなたが分かりません！」

「……え？」

「今のわたくし達は偽りの婚約をしている状態のはず……あなたが結婚はしたくないと……わたくしを妃と認めないと言って……それでも、あなたの事情を汲んで偽りの婚約者になると決めたのに……それなのに……」

「……………なにが言いたいんだ？」

「……………わたくしの事……嫌いですか？」

真っ直ぐと目を見てそう言えば彼は一瞬うろたえた後ミレー又から視線を外した。

それでもミレー又はもう一度言い聞かせるように言った。

「嫌いですか？」

「……急に何を言い出すんだ？そんな事聞いてどうする？」

「誤魔化さないで下さい！」

「別に誤魔化してなんかない……」

「じゃあ、答えてください」

上目遣いに睨みながら言うと、マルクスは小さくため息を吐き出すとボソツと言った。

「……嫌ってなど……いない」

「……」

「……」

「……じゃあ、わたくしの事をどう思ってるのか教えてください」

ミレーヌは今まで聞くのが怖くて避けてきた事をマルクスに問いかけた。

彼は戸惑いの表情を浮かべるとそのまま黙り込んでしまった。

マルクスはミレーヌの問いかけにどう答えるべきなのか迷っていた。どう思っているかと問われれば”好き”に決まっている。そう思うのに、本当の気持ちを伝えたところでそれを信じてくれるか不安で、その二文字を口に出ることが出来ないでいた。

「答えられませんか？」

黙ったままのマルクスに痺れを切らしたのかミレーヌは悲しい表情を浮かべるとそう口にした。

それでも何と言っていいのかわからないマルクスは視線を逸らし尚も黙ってしまう。

「最近のマルクス様は黙ってばかりですね…嫌いではなければ、何ですか？昼間は同情でもないとも…では、特に何とも思っていないで、興味も無いという事でしようか？そうならそうとおっしゃってくればよろしいのに…ここでお会いした時わたくしの事を否定なさったのなら、変な優しさなんて見せないでそれを突き通して下さい！…じゃなきゃ…あなたを…諦めるどころか…」

マルクスにぶつける様に言っているうちに、これまでの事が次々と頭の中に思い浮かんで、胸が苦しくなった。

もう感情を抑えることができない…自分の気持ちが溢れすぎて苦しくて仕方がない。

この苦しさから逃れるためにはもう……………。

「…………好きです」

そういつた瞬間、驚いたようにマルクスは彼女に目を向け、始めて二人の視線が絡み合う。

彼は驚いた表情のまま固まっている。

驚き以外の反応をしめさないマルクスに強い不安を感じ、ミレーヌは彼を見ていられなくなり瞼をギュッと閉じて視界を遮った。

勢いでいってしまったけど…もし拒絶されてしまったら……………。

そんなミレーヌの不安を余所に、突然告白されたマルクスは顔に熱が集中していくのを自覚していた。
端から見れば、きつと耳まで真っ赤だろう。

目をギュツと閉じて何かに怯えているようなミレーヌに愛しさが込み上げる。

力いっぱい抱きしめたい衝動にかられた。

だけど、初めて聞いた彼女の気持ちを確かめたい気持ちが勝った……。

「ほ…本当か…？」

そうぼそりとつぶやくように言うと、「えっ!？」とミレーヌは閉じていた目をパツと開きマルクスを凝視した。

顔を真っ赤に染め、熱っぽい視線を送っていたマルクスは、突然顔を上げたミレーヌに反応が遅れた。

しまった!と思った瞬間、これ以上ないほどの恥ずかしさが込み上げ、マルクスは掌を顔にやり、無理やり表情を隠そうとした。

だが、すばやく伸びてきたミレーヌの手がそれを阻止しようとする。

「どうして隠すんですか!？」

そう言つて手を抑え込まれたマルクスはせめてもの抵抗に顔をそむけた。

ミレーヌは今までにない彼の反応を見て、更に期待の籠った目をマルクスに向けた。

そんなミレーヌの視線に一瞬たじろぐ。

「ミ、ミレーヌ…？」

「マルクス様……もしかして…わたくしの事を……」

確信めいたミレーヌの物言いにマルクスは慌てて彼女が先を言うのを遮った。

「やめろ！それ以上言うな……！！」
「あ……」

もう、ミレーヌの胸は期待感ではち切れそうだった。
これ以上は自分で言いたい。
けど、期待の籠った視線を向けられたマルクスは心の中でため息を付いた。

「……………ああ……くそっ！そうだ……お前が好きだ！これで満足か！？」
「……………」

やけくそ気味にそう言った彼はふて腐れた様にドカリと音を立てて長椅子に座り込みそっぽを向いた。
そんな彼を呆然と見つめ続けるミレーヌ。
ついさっきまで期待の籠った視線を向けてたくせに、なんの反応も示してこないなんて。
マルクスはそっぽを向いていた顔をミレーヌに戻し不審な目を向けた。

「……………おい」
「う、ごめんなさい……あまりにも嬉しくて……」
「はあ……………まあいい……」

そう言うと徐に立ち上がったマルクスはミレーヌに近づき、抱きしめようと手を伸ばしたその時だった……………。

ドンッドンッドンッ

部屋の扉を勢いよく叩かれ。突然の事に驚き固まる二人。

「夜分遅く申し訳ありません！ここを開けてもらえませんか！？」

と緊迫したような声が部屋に響き、我に返ったミレーヌとマルクスは慌てて扉を開けた。

すると入ってきたのは青い顔をしたセレナだった。

「大変です！！リリーがどこにも居ないんです！！」

第39話：告白（後書き）

あまりの急展開でびっくりですよね…？
書いてる本人が一番驚いてます。

更新も滞ってしまっていてくださった方には本当に申し訳な
かったです。

最後まで書き上げてからUP予定でしたが、これ以上お待たせする
のも悪いと思い更新させてもらいました。
これからもお付き合い頂けたら嬉しいです。

第40話：動き出した計画

リリーは就寝する為、自分に割り当てられた部屋へと入った。
だが、入った瞬間何か違和感を覚え、扉の所で立ちつくすと、部屋の中を見回した。

（……？いつもと変わらない様に見えるけど…何かしら？）

しばらくその場で考えてみたものの、結局何に違和感を感じるのかが分からず、リリーは気のせいだと結論付けベッドへ潜り込むと目を閉じた。

そして寝息が聞こえ始めた時だった。

部屋の奥にある窓が静かに開き、そこから現れたアリスは音を立てないようにリリーのベッドへと近づくと何処からかナイフを取り出した。

そしてナイフを持って無い方の手をリリーの顔へと移動させ……。

（……！！！！？）

リリーは突然口を何かに塞がれた事で目を覚ました。
目を見開き、視界に映るよく知った人物に驚愕とした。

「ふっ…んんんんっ！！！」

すぐにアリスの腕から逃れようと、口を塞いでいる手を掴むと必死にもがいた。

だが、いくらもがいてもその手を退かすことが出来ず、リリーは苛

立った。

そんな彼女を見て、アリスは不敵に口角を上げるとナイフをリリーの首元へと持つてくると、口を開いた。

「抵抗するのはよしなさい…これ以上抵抗するなら、おまえの息の根をすぐにでも止めるからね…」

首に食い込むナイフの冷たさに、その言葉が本気で唯の脅しではない事はすぐにわかった。

小刻みに震えだした手を相手の腕からゆっくりと離し、抵抗する気はない事を示す。

だが、首に添えたナイフはそのままに「ベッドから降りなさい」と命令された。

どうして自分が襲われているのか、どうしようというのか？
混乱する頭をどうにか鎮めようと試みる。

とりあえず冷静になろうと、わざとゆっくりと起き上がる。

口を抑えつけられていた手はいつの間にか退かされ、言葉を発する事も出来る状態になっていた。

だけど、まだナイフが首元にあるせいで、結局何も言う事が出来なかった。

相手はリリーの耳元へ口を寄せると囁くように呟いた。

「このまま黙ってわたくしについて来なさい。少しでもおかしな行動を取ったら……わかつているわね？」

念を押されるように言われた言葉に、リリーは小刻みに首を縦に振った。

誰かとすれ違うことを願ってついてきたが、無情にも誰ともすれ違うこともなく城の地下に連れてこられてしまった。

アリスは廊下の突き当たりにある扉の前まで来ると立ち止まった。

そして目の前の頑丈そうな扉を開けるとそこには男が一人壁際に置いてある椅子に腰かけていた。

中は地下だからか、窓の一つもなく、ただろうそくの火がおまけ程度に灯された薄暗く狭い部屋。

入口の所で入るのを躊躇っていると、腕を掴まれ勢い良く部屋の中へと押し込まれた。

「ぼさつとしてるんじゃないわよ」と一言悪態を付くと、アリスは男の方へとリリーを突き飛ばした。

男は床へと転がったりリリーを何の反応も示さず一瞥しただけ。

床へと転んだ拍子に打った腕を擦りながら起き上がるとリリーはアリスが立っている方へと体を向けた。

「お、叔母様…どうして？」

そう震えた声で問いかけると、アリスは「ふっ」と嫌な笑いを漏しただけで、リリーを鋭い目つきで睨み付けながら言った。

「お前は自分の立場を忘れたのかしら？」

「……え？」

「縁談の話を通ればどうなるか分かっていたはず…なのに、お前はマルクスに何と言った？」

「……」

「何と言ったのかと聞いているの！……」

「そ…それは……」

「なら、わたくしが代わりに言っておげましょうか？あの後、マルクスがわたくしの所に訪ねて来て言ったわ…お前が縁談などする気もないと…その上あの女と縁談を進める気はないと言っておきながら数日後には婚約ですって！？冗談じゃない！」

「……………」

リリーは目の前で怒りを露にしているアリスに青ざめた顔を向るだけで何も言い返す事が出来ない。

「役立たずのお前には本当にガッカリしたわ。せめてここでしばらく大人しくしているのね…時が来れば出してあげるわ……おい、お前！」

「…はい」という男の声を聞いて、リリーは今ここにいるのは二人では無かった事を思い出した。

「いい？ちゃんとこの子を見張っているのよ」

「はい…かしこまりました」

「それと、この子に変に手出しでもしてみなさい？その時は…どうなるかわかってるわね？」

「はい」

アリス達がそんなやり取りをしている間リリーは考えていた。

雰囲気と口調は少しあの時と違うが、この男は前に書庫にクラリスと一緒に居た男に間違いない。

あの時ハッキリ顔を見た訳でもないが、何故だかそう確信していた。それにこんな地下に連れてきて、私を見張らせてこれから一体彼らは何をしようというのだろうか？

私を見張これもあの書庫で言っていた計画の一部なのだろうか？

どんなに考えてみても、全く見当もつかなかった。
ただ分かった事は、アリスはあの時本当は傷つけるつもりはなかったという事。

でなければ、男にそんな事は言わないはず。

「じゃあ、頼んだわよ」と言うとアリスを一度リリーに一瞥くねると入ってきた扉から出て行った。

薄暗く、ろうそくの火だけが灯る密閉された場所で男と二人。

リリーは少しずつ後ずさりすると男と距離を取った。

そんなリリーを鼻で笑うと、男は先ほど座っていた椅子へと腰かけた。

「そんな怯えなくっても、何もしやしないよ」

呆れる様に言われても、信用なんて出来やしない。

とにかく男から距離を取ろうと対角線上に後ずさる。

だけど、狭い部屋ではそんなに距離を取れずに背中が壁へとぶち当たった。

ただ重苦しい沈黙が流れ、いつしか時間の感覚さえもなくなってきた頃、突然男が突拍子もないことを聞いてきた。

「なあ、お嬢ちゃんはあるの王妃様の姪なんだろ？」

「……えっ……」

男は驚き固まるリリーを無視したまま話を進める。

「本当の事言うとな俺は別にお嬢ちゃんや……ミレーヌ様に危害

を加えたくて行動してるんじゃない。アリス様に弱みを握られててなあ…仕方なくなんだ。そりゃ、中には忠誠心からアリス様に従っている者もいるがな」

「ど………いう事？」

あまりに衝撃的な話にリリーは思わず男に話しかけた。

男は彼女が反応を示したのに気を良くしたのか、聞いてもない事をペラペラとしゃべり始めた。

「俺さあ…田舎の下級貴族出なんだ。……親父は領主っていう地位を利用して領地内の民から国が指定する税より多くの税を徴収し余りを懐に入れていたらしい。一体何で知ったのかは分からないが、アリス様がそれをネタに脅してきたんだ。その事実を知ったのはその時が初めてで、まさかと思ったさ。親父がそんな事するはずが無いてね…」

そこまで言うとなんは大きく息を吐き出すと項垂れてしまった。

そんな彼を見てリリーはなんでか居た堪れない気分になった。

同情なんてする事無いのに、なんだか目の前の男が気の毒に思えてしまった。

何と声を掛けていいのか分からず黙っていると、男から「ふっ」と笑う気配がしたかと思うと、顔を上げリリーに視線を超越した。

お陰でバチツと目が合ってしまった、リリーは慌てて視線をそらした。

「なあ、計画が何なのか知りたくないか？」

唐突にそんな事を聞かれ、リリーは眉間に皺を寄せた。

「計画？」

「ああ。これから起きる事さ」

「……どうして私に？」

「………なんでだろうな…これからも脅されたまま、いつ殺されるのか分からない人生が嫌になっちまったからかな…いっそ、何もかも話しちまおうかとさ」

「………」

「あの王妃様が生きてる限り、俺は親父がした事の罪を償う事も出来ず、馬鹿な計画に加担して…何をしてんだか…まあ、そう思ってる奴は他にも居るかもな」

「ねえ…あなたはどうしたいんですか？」

リリーは無意識の内に聞いていた。

「………そうだな…この計画を止めたいってのが正直なところさ」

「えっ、でも…」

「ははっ！一人じゃ何もできないだろうって言いたそうだな…まあ実際そうだ。俺一人じゃ何も出来やしないだろうな…でも…」

「でも？」

「まあ…。とりあえず聞いてくれよ。王妃様が何をしたいのか」

リリーはどうしようか迷った末に黙って首を縦に振った。

変な緊張感が漂い、何故か口がカラカラに乾く。

これから聞く計画がどういったものなのか……高鳴る鼓動を抑え男が話し始めるのを待った。

「計画は簡単に言えばミレーヌ様の国外追放だ」

「………えっ！！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085n/>

月夜の晩にキスをして

2011年9月10日03時23分発行